大島村文化財調査報告書　第13集

長畑馬場遺跡

2000

長崎県大島村教育委員会

大島村文化財調査報告書　第13集

長畑馬場遺跡

2000

長崎県大島村教育委員会

序

大島村は，九州の北西・平戸から海上15kmに位置する周囲38km²の島で，西に生月，東北東に伊万里湾から鷹島，北方30kmに壱岐を望み，玄海灘を遠望することができます。

大島は古くから海洋交通の要衝として開け，遣明船などが寄港滞在しています。

島内には39箇所の遺跡があり，昭和42年，長崎大学医学部による「埋蔵文化財包蔵地調査」で表採された旧石器時代の石器類は，貴重な資料として，ふるさと資料館に展示されています。

縄文時代の年代を知ることができる資料としては，現在までのところ平成８年に中学生が大賀で発見した土器片数点が存在するのみです。

昭和13年，「勝負田古墳」から舶載品の銅鏡・勾玉が出土し，昭和16年，「岳ノ下古墳」からは海洋型の古墳として耳環・鉄刀・土器等が出土しています。

弥生時代の遺跡の発掘調査としては，平成２年，圃場整備にともない「大根坂遺跡」の調査を実施しています。村単独のわずか４日間の調査でしたが，丹塗の痕跡や籾跡のある土器片・鹿の骨・石器・柱穴等が出土しています。

今回の「長畑馬場遺跡」の発掘調査は，中山間地域総合整備事業にともなうもので，平成９年度の範囲確認調査に始まり，平成10年度，11年度に本調査を実施しました。

長畑馬場遺跡は，島の南西部板ノ浦地区の曲り鼻という岬近くに位置する遺跡で，現場は畑地で，昭和40年前後の整地作業によって上部のほとんどを切り取られている状況でした。

調査の結果，人骨・獣骨・魚骨・甕棺・ガラス玉等の副葬品・住居跡・集石遺構・石器・土器片・ピット多数の出土がありました。

事業自体，予定より早く前倒しで着手されたもので，開発事業と調査のはざまで，長雨・調査面積の大幅な拡大等々，過酷な条件の中で，県教育委員会文化課の調査員の先生方には，現場調査から内業，報告書の作成まで，最善を尽くしていただきました。

国立歴史民俗博物館の西本先生，長崎大学医学部解剖第２教室の分部先生，福岡市埋蔵文化財センターの折尾所長，奈良国立文化財研究所の肥塚隆保氏，現場でお世話になった長崎県平戸耕地事業所，地権者・作業員の皆様，その他関係各位に心から感謝とお礼を申し上げます。

今回の調査は一応終了しましたが，遺跡内にはまだ遺構等が存在する可能性があり，今後とも注意を払って見守りたいと思います。

「文化財はお金にはならないが，後世に伝えていかなければならないもの。」といわれます。お金に代えられないものがあることを肝に銘じて伝えていきたいと思います。

この報告書がそのために役立つことを念願し，関係の皆様への謝意をこめてごあいさつとします。

平成12年３月

大島村教育委員会教育長　黒　川　隆　昭

例　　言

1　本書は長崎県北松浦郡大島村戸田長畑に所在する長畑馬場（ながはたばば）遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は中山間地域総合整備事業に伴い，平成９年９月29日～同年10月17日に行われた範囲確認調査の結果を基に，本調査を平成10年９月28日～同年10月30日と，平成11年６月28日～同年10月１日の２ヶ年度にわたって実施した。

3　調査は大島村教育委員会が主体となり，長崎県教育庁文化課が実施した。

4　本書の執筆については本田秀樹・大浦雅宏・荒木伸也・福田一志が分担執筆した。なお，本文目次に執筆者名を記した。

5　人骨については，現地での実測・取り上げを長崎大学医学部解剖学第二教室分部哲秋・佐伯和信の両氏にお願いした。また，両氏からは人骨に関する玉稿を賜った。

6　金属器の保存処理およびガラス小玉・管玉の分析については，福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎氏と片多雅樹氏に依頼した。両氏からは分析結果についての玉稿を賜ったが，紙面の都合上，法量分布グラフ・顕微鏡写真・蛍光Ｘ線分析結果のグラフについては割愛した。

7　炭素材の樹種同定は㈱古環境研究所に委託し，同定結果については本文に掲載した。

8　動物遺存体については，来崎された西本豊弘氏（国立歴史民俗博物館考古研究部教授）・鵜沢和宏氏（立教大学非常勤講師）・姉崎智子氏（慶応大学大学院文学研究科博士課程）に資料同定を依頼し，３氏からは分析結果についての玉稿を賜った。

9　遺物実測は網谷泰代・森崎京子・川村由美子・徳永妙子・近藤慶子・松尾美代子・黒川英子・竹中哲朗・松崎由紀子・濱本秀美の協力を得た。

10　製図は渡辺洋子・斉藤いづみ・近藤千鶴・小林利恵子が行った。

11　遺物復元は石本充子・大平由里子が行った。

12　遺構実測はその大部分を㈲埋蔵文化財サポートシステムに委託した。一部について，本田・大浦・荒木が行った。

13　本書関係の写真撮影は，調査中の個別遺構は調査担当者が行い，調査区全景については㈲埋蔵文化財サポートシステムが行った。遺物写真については伴耕一朗氏（タシロフォート）と松尾直子氏（埋蔵文化財サポートシステム）の指導・助言を得て，本田が行った。

14　本書で用いた方位はすべて真北（国土座標北）である。

15　本書で用いた遺構に関する表記は以下のとおりである。
竪穴住居：ＳＣ，甕棺墓：ＳＴ，石蓋土壙墓：ＳＧ，箱式石棺墓：ＳＡ，土壙：ＳＫ，その他の遺構（不明人骨）：ＳＸ，土器溜め：ＳＶ，ピット：Ｐ

16　本書関係の遺物は報告書刊行後，大島村教育委員会に移管される予定である。

17　本書の編集は本田による。

本　文　目　次

Ⅰ　調査に至る経緯……（大浦）1

Ⅱ　調査の組織と構成……（〃）1

Ⅲ　遺跡の立地と環境

1　地理的環境……（大浦）2

2　歴史的環境……（〃）4

Ⅳ　平成９年度の調査概要

1　調査の方法……（大浦）7

2　土　　層……（〃）7

3　遺　　構……（〃）8

Ⅴ　平成10年度の調査概要

1　調査の方法……（大浦）9

2　土　　層……（〃）9

3　遺　　構

a　甕　棺　墓（ＳＴ）……（本田）10

b　石蓋土壙墓（ＳＧ１）……（〃）14

c　１号住居跡（ＳＣ１）……（大浦）14

d　１号土壙（ＳＫ１）……（荒木）14

4　遺　　物

a　土　　器

i　甕　　棺……（本田）16

ii　石蓋土壙墓出土土器……（〃）20

iii　１号住居跡出土土器……（〃）20

iv　１号土壙出土土器……（〃）20

b　石　　器

i　１号土壙出土石器……（福田）22

ii　その他の石器……（〃）24

c　その他の遺物

i　鉄　　器……（本田）24

ii　玉　　類……（〃）25

Ⅵ　平成11年度の調査概要

1　調査の方法……（本田）26

2　土　　層……（〃）26

3　遺　　構
a　甕　棺　墓（ＳＴ）……（本田）26
b　箱式石棺墓（ＳＡ１）……（　〃　）32
c　２号住居跡（ＳＣ２）……（　〃　）33
d　２号土壙（ＳＫ２）……（　〃　）34
e　３号土壙（ＳＫ３）……（　〃　）35
f　４号土壙（ＳＫ４）……（　〃　）36
g　５号土壙（ＳＫ５）……（　〃　）36
h　土器溜り（ＳＶ１）……（　〃　）37
i　不明石組ピット……（　〃　）37
j　Ｇ７区大型ピット……（　〃　）40
k　その他の遺構
i　ＳＸ１……（本田）40
ii　Ｄ３区Ｐ21……（　〃　）41
iii　Ｈ10区Ｐ５……（　〃　）41
iv　Ｄ４区Ｐ１……（　〃　）41
v　Ｅ８区Ｐ８……（　〃　）42
4　遺　　物
a　土　　器
i　甕　　棺……（本田）43
ii　箱式石棺墓出土土器……（　〃　）49
iii　２号住居跡出土土器……（　〃　）49
iv　２号土壙出土土器……（　〃　）52
v　３号土壙出土土器……（　〃　）53
vi　４号土壙出土土器……（　〃　）54
vii　５号土壙出土土器……（　〃　）54
viii　土器溜り出土土器……（　〃　）55
ix　その他の遺構出土土器……（　〃　）55
x　その他の土器……（　〃　）56
b　石　　器
i　２号住居跡出土石器……（福田）58
ii　30号甕棺墓石蓋……（　〃　）58
iii　土器溜り出土石器……（　〃　）58
iv　その他の石器……（　〃　）58

c　その他の遺物
i　金　属　器……（本田）60
ii　玉　　類……（〃）60
Ⅶ　総　　括
1　墓制について……（本田）61
2　副葬品について……（〃）62
3　祭祀土壙について……（〃）63
4　遺構の時期的変遷について……（〃）64
5　遺物について……（〃）65
6　ま　と　め……（〃）66
Ⅷ　自然科学分析
長崎県大島村長畑馬場遺跡出土の弥生時代人骨……（佐伯和信・分部哲秋・長島聖司）69
長畑馬場遺跡出土金属器の保存処理報告……（比佐陽一郎・片多雅樹）77
長崎県北松浦郡大島村長畑馬場遺跡出土　ガラス小玉の分析について（報告）……（〃）78
大島村，長畑馬場遺跡出土炭化材の樹種同定……（株式会社　古環境研究所）87
長畑馬場遺跡出土の動物遺体……（西本豊弘・鵜沢和宏・姉崎智子）93

挿図目次

第1図　大島村の位置図……3
第2図　大島村内遺跡一覧……5
第3図　遺跡範囲および試掘壙配置図（S＝1／2,500）……7
第4図　平成9年度範囲確認調査　出土遺構および土層図（S＝1／40）……8
第5図　平成10年度・平成11年度調査区グリッド配置図（S＝1／1,000）……9
第6図　甕棺墓実測図①（S＝1／20）……10
第7図　甕棺墓実測図②（S＝1／20）……10
第8図　甕棺墓実測図③（S＝1／20）……11
第9図　石蓋土壙墓実測図（S＝1／20）……12
第10図　1号住居跡実測図（S＝1／40）……13
第11図　1号土壙実測図（S＝1／20）……15
第12図　甕棺実測図①（S＝1／8）……17
第13図　甕棺実測図②（S＝1／8）……18

第14図　石蓋土壙墓出土土器（S＝1／4）……19
第15図　1号住居跡出土土器（S＝1／4）……19
第16図　1号土壙出土土器（S＝1／4）……21
第17図　1号土壙出土石器（S＝1／2）……22
第18図　その他の石器（S＝2／3）……23
第19図　7号甕棺出土鉄釧（S＝1／1）……24
第20図　1号甕棺出土管玉（S＝1／1）……25
第21図　2号甕棺出土小玉（S＝1／1）……25
第22図　甕棺墓実測図④（S＝1／20）……29
第23図　甕棺墓実測図⑤（S＝1／20）……31
第24図　甕棺墓実測図⑥（S＝1／20）……32
第25図　甕棺墓実測図⑦（S＝1／20）……32
第26図　箱式石棺墓実測図（S＝1／20）……33
第27図　2号住居跡実測図（S＝1／40）……34
第28図　2号土壙実測図（S＝1／20）……35
第29図　3号土壙実測図（S＝1／20）……36
第30図　4号土壙実測図（S＝1／20）……37
第31図　5号土壙実測図（S＝1／20）……38
第32図　土器溜り実測図（S＝1／20）……39
第33図　不明石組みピット実測図（S＝1／30）……40
第34図　G7区大型ピット実測図（S＝1／50）……41
第35図　その他の遺構（S＝1／20）……42
第36図　甕棺実測図③（S＝1／8）……45
第37図　甕棺実測図④（S＝1／8）……47
第38図　甕棺実測図⑤（S＝1／8）……48
第39図　箱式石棺墓出土土器（S＝1／4）……50
第40図　2号住居跡出土土器①（S＝1／4）……50
第41図　2号住居跡出土土器②（S＝1／4）……51
第42図　2号土壙出土土器（S＝1／4）……52
第43図　3号土壙・4号土壙出土土器（S＝1／4）……53
第44図　5号土壙出土土器（S＝1／4）……53
第45図　土器溜り出土土器（S＝1／4）……54
第46図　その他の遺構出土土器（S＝1／4）……54
第47図　その他の土器（S＝1／4）……55

第48図　２号住居跡出土石器（１～６はＳ＝１／６，７～９はＳ＝１／３）……57
第49図　30号甕棺石蓋（Ｓ＝１／６）……58
第50図　土器溜り出土石器（Ｓ＝１／６）……58
第51図　Ｈ10区Ｐ５出土石器（Ｓ＝１/６）およびその他の石器（Ｓ＝１/２）……59
第52図　Ｅ７区Ｐ267出土銅鏃（Ｓ＝１／１）……60
第53図　出土鉄器（Ｓ＝１／２）……60
第54図　25号甕棺墓出土管玉（Ｓ＝１／１）……60
第55図　甕棺墓主軸方位，埋置角度……62
第56図　長畑馬場遺跡　遺構変遷図……64

付図　長畑馬場遺跡遺構配置図（Ｓ＝１／200）

表　目　次

表１　甕棺墓一覧表……61
表２　礫石器重量別分布表……65
表３　管玉計測表……66

図 版 目 次

図版１　遺跡遠景（上），調査区全景（下）……99
図版２　検出遺構①……100
図版３　検出遺構②……101
図版４　甕棺出土状況①……102
図版５　甕棺出土状況②……103
図版６　甕棺出土状況③……104
図版７　甕棺出土状況④……105
図版８　甕棺出土状況⑤……106
図版９　２号住居跡出土遺物（上），２号住居跡（下）……107
図版10　出土甕棺①（Ｓ＝１／６）……108

図版11　出土甕棺②（S＝1／6）……109
図版12　出土甕棺③（S＝1／6）……110
図版13　出土甕棺④（S＝1／6）……111
図版14　出土甕棺⑤（S＝1／6）……112
図版15　出土甕棺⑥（S＝1／6）……113
図版16　2号住居跡・1号土壙出土石器/2号住居跡・出土石器・30号甕棺石蓋（S＝1/5）/
その他の遺物（S＝1/5）……114

Ⅰ　調査に至る経緯

平成９年度，国庫補助事業の中山間地域総合整備事業で周知の遺跡である水ノ元池遺跡・菰蓋池遺跡を含む地域の圃場整備事業が計画された。更に長畑馬場遺跡の大部分を含む地域の圃場整備も１年繰り上げて計画されたため，平成９年度大島村教育委員会が調査主体となり県文化課による範囲確認調査が行われた。その結果，長畑馬場遺跡の33箇所中７箇所の試掘壙から基盤層に掘り込まれたピットや弥生土器及び遺物包含層等が発見され，約2,350㎡の地域について本調査を行う必要があることが判明した。平戸耕地事業所と大島村教育委員会及び県文化課で協議を行い，平成10年度に本発掘調査を実施し記録保存をすることで合意を得た。

平成10年度，９月28日～10月30日の期間で約1,400㎡の調査を実施した。当初の計画では単年度に調査を終了し，整理から報告書まで刊行する予定であったが，予想をはるかに上回る遺物・遺構が発見され，調査日程も限られていたため再度平戸耕地事業所と協議を行い，平成11年度も継続して調査を実施することとなった。

平成11年度は６月28日～10月１日の期間で調査を実施した。当初は昨年度から継続している950㎡の調査で済む予定であったが，表土剥ぎを行った結果周辺の畑にも遺跡が拡大することが予想されたため，急遽バックホーによる試掘調査を実施し遺跡の範囲と調査区の確定を行った。その結果，新たに3,600㎡が調査対象地域と認められ，平戸耕地事業所との協議の結果総合計5,600㎡を調査・記録保存の対象とすることで合意を得た。

Ⅱ　調査の組織と構成

この調査は大島村教育委員会が調査主体となり，県文化課が依頼を受け調査を実施した。なお，各年度の調査担当は次の通りである。

1　平成９年度　範囲確認調査

(1)　事業主体　県北振興局平戸耕地事業所

(2)　調査主体　大島村教育委員会

(3)　調査担当　長崎県教育庁文化課　文化財保護主事　甲斐田　彰

　　長崎県教育庁文化課　文化財調査員　東　貴之

(4)　調査協力　大島村教育委員会　参事兼社会教育係長　米村　伍則

(5)　調査機関　平成９年９月29日～10月17日

2　平成10年度　本調査

(1)　事業主体　県北振興局平戸耕地事業所

(2)　調査主体　大島村教育委員会

(3)　調査担当　長崎県教育庁文化課　文化財保護主事　　大浦　雅宏

長崎県教育庁文化課　文化財調査員　　荒木　伸也

(4)　調査協力　大島村教育委員会　　参事兼社会教育係長　米村　伍則

埋蔵文化財サポートシステム

(5)　調査機関　平成10年９月28日～10月30日

3　平成11年度　本調査

(1)　事業主体　県北振興局平戸耕地事業所

(2)　調査主体　大島村教育委員会

(3)　調査担当　長崎県教育庁文化課　文化財保護主事　　本田　秀樹

長崎県教育庁文化課　文化財保護主事　　大浦　雅宏

長崎県教育庁文化課　文化財調査員　　尾上　博一

(4)　調査協力　大島村教育委員会　　参事兼社会教育係長　米村　伍則

埋蔵文化財サポートシステム

(5)　調査機関　平成11年６月28日～10月１日

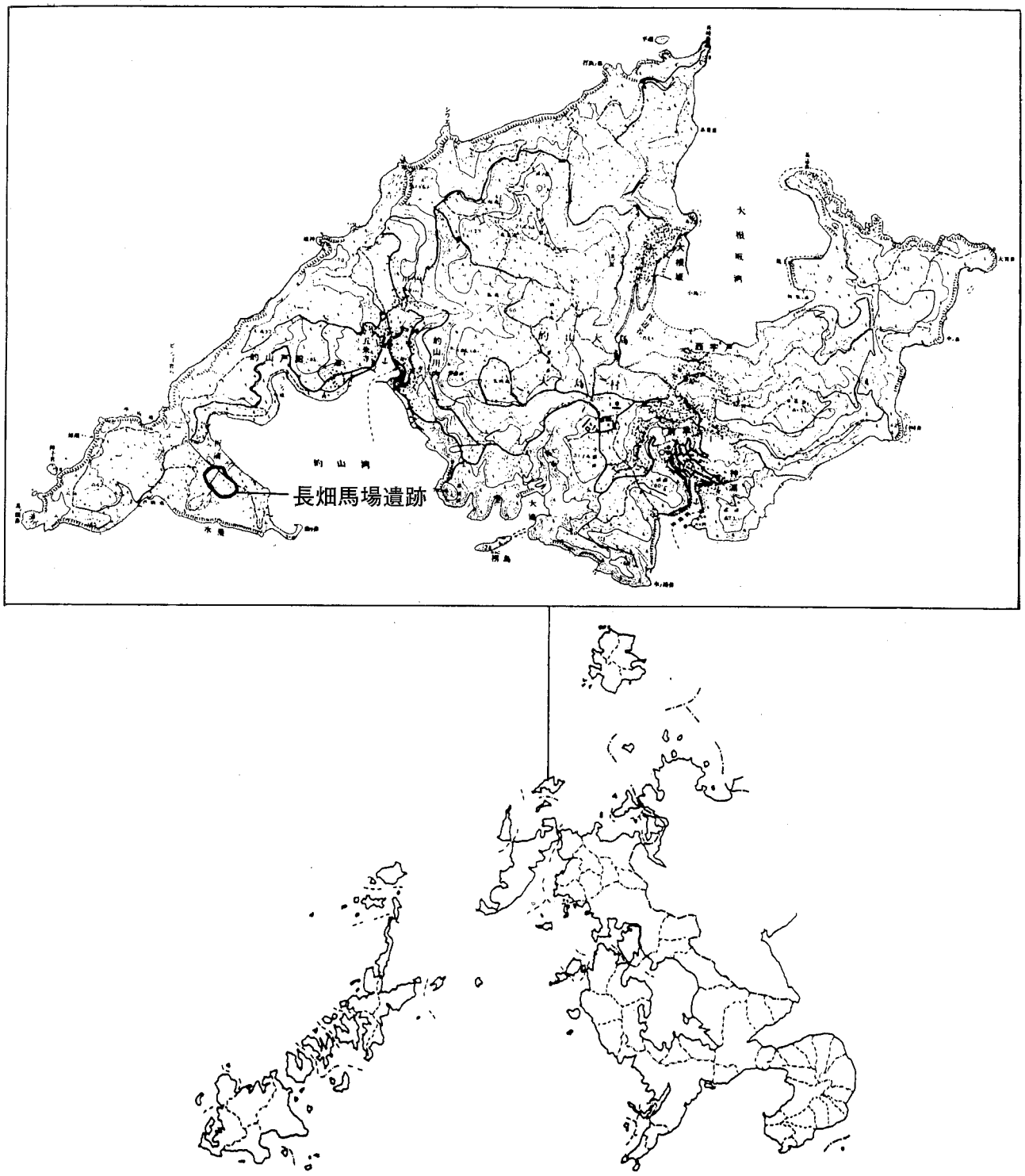
Ⅲ　遺跡の立地と環境

1　地理的環境

大島村は長崎県の北西端，東経129度34分，北緯33度29分の的山大島（あづちおおしま）にある。的山大島は平戸から海上約10kmの玄海灘に浮かび，交通手段としては「フェリー大島」で平戸港から約35分で的山港または神浦港に到着する。島の面積は15.33km²で，東西8.0km，南北4.6km，島の周囲は約38kmの大きさである。気候は周囲を海に囲まれていることと暖流である対馬海流の影響を受け，海洋性気候となっており比較的温暖である。島の周囲には多くの島が点在し，北北西には遠く対馬を望み，北北東に壱岐の島が浮かんでいる。南には度島その後ろに平戸島，南西に生月島や宇久，小値賀の島々，更に五島列島が連なっている。島の地質は玄武岩を母岩とする第三紀層上の溶岩台地で，島の中央部は起伏量200～210mを示す台地と起伏量200m以下の低位溶岩台地とに分かれている。島の周縁は一部の地帯を除き，傾斜40度以上の崖によって囲まれている。島内には河川として特にあげられるものは少なく，源を溜池に発する小溝や幅２m内外の小さな川がほとんどで，これらは排水路的な役割を果たしているものが多い。そのため灌漑用の溜池が多く点在し，その数は大小100箇所以上である。

長畑馬場遺跡は島の南西部に突き出た半島の中央部に立地し，海岸線は南側が断崖，東側が礫浜海

岸となっている。海岸からの距離は約200m，標高は35～45mを測る。遺跡から南方の海上には度島と平戸島，そして生月島を間近に見ることができ，大島が古代から海上交通の要地であったことが偲ばれる場所でもある。地形的にも低位溶岩台地上のなだらかな丘陵になっており，遺跡の立地条件としては申し分ない。周囲にはサクメ草ノ原遺跡・石橋遺跡・曲り鼻遺跡と本遺跡を含め旧石器～中世の遺跡が存在している。

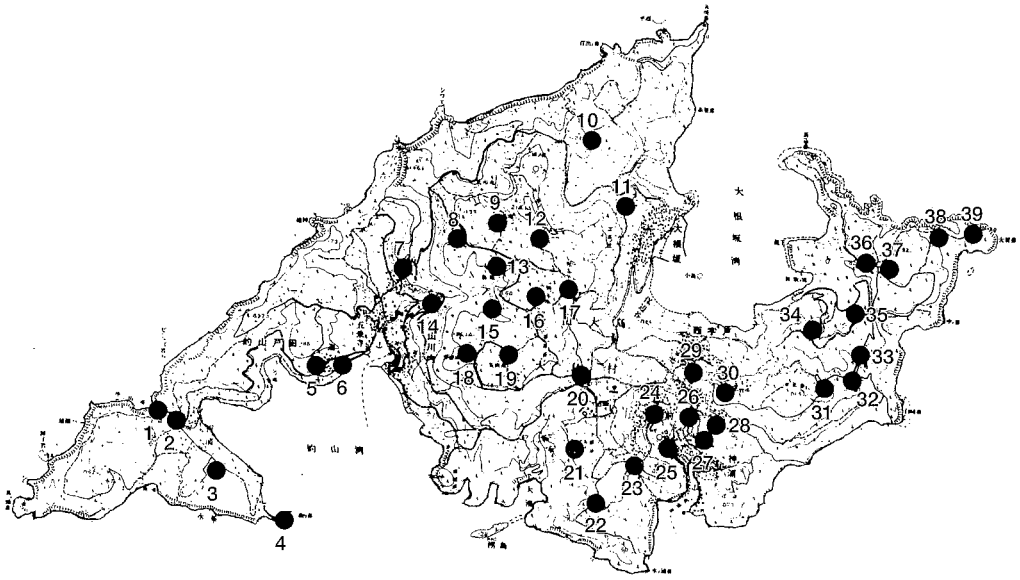


第１図　大島村の位置図

2　歴史的環境

大島村内の遺跡については1950年に京都大学が行った平戸学術調査によるものが最も古く，この中で７遺跡が登載されている。さらに1967年に正林護氏によって島内遺跡地名表が作成され，新たに４遺跡が加えられ11遺跡となり，これがそのまま『全国遺跡地図42長崎県』（文化庁文化財保護部1976）に登載されている。更にその翌年，正林・斉藤武男両氏によって島内の遺跡調査がおこなわれた。その後1984年，長崎県文化課による分布調査が実施され長崎県遺跡地図としてまとめられ，このとき遺跡総数は38遺跡となった。これに1996年の公共工事に伴う分布調査で新たに１遺跡が加わり，現在のところ大島村内の遺跡総数は39遺跡となっている（第２図）。時代別では，旧石器時代を含むものが12遺跡，縄文時代を含むものが29遺跡，以下弥生時代が３遺跡，古墳時代が６遺跡，中世が３遺跡，近世が１遺跡（以上遺跡数は延べ数）となっている。旧石器時代の遺跡からはナイフ形石器や台形石器の出土があり約２万年位前から人々が生活していたことが明らかである。なお1984年，下川達彌氏により大島村における旧石器資料についての調査が行われており，６遺跡について遺物の報告がされている。次に縄文時代の遺跡については，その数が全体の74％を占めており一番多くなっている。これは県北地域全体に共通してみられる特徴で，更に弥生時代の遺跡が大島村に３つしかなく，これは地形的に平地が極端に少なく大きな河川もない的山大島では弥生時代の集落は数多く存在することができなかったからであろうと考えられる。古墳時代では６遺跡存在するが，その４つは島の東側に集まっている。勝負田古墳と岳ノ下２号墳については樋口隆康・釣田正哉両氏が京都大学平戸学術調査団として調査を行いその報告書の中で遺物を含め詳しい記述が見られる。島の東側に位置する５世紀代につくられたとされる勝負田古墳は的山港を見下ろす標高50mの場所にあり，副葬品として内行花文鏡１面と勾玉３個が出土しており，立地的にも的山港付近にあった集落を取りまとめるようなものの存在が考えられる。島の西側にあり古墳時代後期とされる岳ノ下２号墳からは鉄刀２本・金環４個・鉄鏃４個及び須恵器の壺等が出土している。標高が95mとやや高めで周囲には平地がほとんどないことなど勝負田古墳とは条件が異なるものの，この時代の航海技術に優れた島内の人々を束ねる豪族的存在のものであろうと考えられる。

的山大島は古くから海上交通の要地として利用されている。それを示す代表的な遺跡が朝鮮井戸海岸遺跡であろう。天然の良港である的山港の南西の海岸に位置するこの遺跡は，秀吉の朝鮮出兵に参加した船団が水を積み込んだと伝えられることからこの名称がある。更にこの井戸は，湧水が豊富で海の干満に関係なく水量が変わらず塩分も含まれないため，古代から大陸へ渡る船が水を積み込んだところであるとも伝えられている。この遺跡からはナイフ形石器・黒曜石製剥片等の旧石器～縄文時代の遺物とともに宋・元・明・清時代の中国製陶磁器片が採集されており，また井戸内側下の石組は室町時代のものといわれている。『大乗院寺社雑事記』には「春は肥前国大島小豆（的山）浦より船出之，秋は同国後唐（五島）の島より船出之」と書かれており，この他の史料にも的山港に遣明船が寄港した記録が見られ，的山港付近は遣明船の発着地及び風待ちなどの滞在地として利用されていたと考えられている。このようにこの島が肥前国であるというその位置的環境から，外交上の海上交通



大島村内遺跡一覧

No.	遺跡名称	所在地	種別	時代	標高	出土遺物等
1	サクメ草ノ原遺跡	戸田字サクメ	包含地	縄文	60	黒曜石製剝片, 石鏃, 凹石
2	石橋遺跡	戸田字掘切	包含地	先・縄	43	石鏃, ナイフ形石器
3	**長畑馬場遺跡**	**戸田字長畑**	**包含地**	**先・縄・弥**	**45**	**弥生土器, 黒曜石製剝片, ナイフ形石器, 石鏃**
4	曲り鼻遺跡	戸田字曲り	墳墓	中世	2	須恵器片
5	本山神社遺跡	戸田字迎	包含地	縄文	33	凹石, 磨製石斧, 石鏃
6	朝鮮井戸海岸遺跡	戸田字迎	包含地	先・縄・中	1	黒曜石製・サヌカイト製剝片, 青磁片, ナイフ形石器
7	勝負田古墳	川内字勝負田	古墳	古墳	54	石棺, ヒスイ勾玉, 須恵器
8	白岩池遺跡	川内字白岩	包含地	先・縄	155	黒曜石製剝片, 石鏃, ナイフ形石器, 掻・削器, 彫器
9	菰蓋池遺跡	大根坂字菰蓋	包含地	先・縄	157	黒曜石製剝片・石核, 掻・削器, ナイフ形石器
10	仏法池遺跡	大根坂字仏法	包含地	縄文	100	黒曜石製剝片
11	大根坂遺跡	大根坂字大原	墳墓	縄・古	80	石棺1, 縄文土器片, 黒曜石製剝片, 須恵器
12	水ノ元池遺跡	大根坂字水ノ元	包含地	縄文	180	黒曜石製剝片
13	轟第1池遺跡	西宇戸字善出	包含地	先・縄	154	黒曜石製剝片・石核, 彫器, ナイフ形石器, 掻・削器
14	轟浄水場遺跡	川内字東山	包含地	縄文	54	黒曜石製剝片
15	轟第2池遺跡	川内字息坂山	包含地	先・縄	147	
16	柳ノ元池遺跡	西宇戸字柳ノ元	包含地	縄文	165	黒曜石製剝片, 掻・削器, ドリル, 台形石器
17	佐志宇戸池遺跡	西宇戸字佐志宇戸	包含地	先・縄	160	黒曜石製剝片, 台形石器, 黒曜石製石核
18	天道山遺跡	川内字天道山	祭祀遺跡	近世	160	黒曜石製剝片
19	長田池遺跡	西宇戸字長田	包含地	先・縄	160	ナイフ形石器, 台形石器, 黒曜石製石核, 彫器
20	藪田池遺跡	前平字藪田	包含地	縄文	115	黒曜石製剝片, 石鏃
21	小田ノ原遺跡	前平字小田ノ原	包含地	先・縄	120	黒曜石製剝片, ナイフ形石器
22	平瀬ノ辻遺跡	前平字平瀬ノ辻・宮田	包含地	先・縄	75	黒曜石製剝片, ナイフ形石器
23	城山遺跡	前平字	包含地	先土器	65	黒曜石製石核, 台形石器
24	前平公民館遺跡	前平字神山	包含地	縄文	49	凹石, 黒曜石製剝片
25	大島村役場遺跡	前平字葉山	包含地	縄文	8	黒曜石及びサヌカイト製剝片, 石鏃, 石斧, 凹石
26	大島氏居館跡	前平字川畑	館跡	中世	75	
27	前ノ辻遺跡	前平字前ノ辻	包含地	縄文	63	黒曜石製剝片, 土器片
28	仁田ノ久保遺跡	前平字仁田ノ久保	包含地	縄文	80	黒曜石製剝片, 石斧, 凹石, 石刃核, 土器片等
29	西宇戸遺跡	西宇戸字西宇戸	包含地	縄文	105	黒曜石製剝片, 石鏃
30	新田原遺跡	前平字新田原	包含地	弥生	120	磨製石斧
31	魚見岳遺跡	前平字魚見岳	包含地	縄文	145	黒曜石製剝片, 石斧等
32	岳ノ下2号墳	西宇戸字岳ノ下	古墳	古墳	95	横穴式石棺, 鉄刀, 金環, 鉄鏃, 馬具状鉄器等
33	岳ノ下1号墳	西宇戸字木原	古墳	古墳	85	須恵器(壺, 高杯, 蓋杯)
34	瓢車ノ木遺跡	西宇戸字キシャノキ	包含地	縄文	70	黒曜石製剝片
35	鞍越遺跡	西宇戸字鞍越	包含地	縄文	55	黒曜石製剝片
36	度島田遺跡	西宇戸字度島田	包含地	縄文	77	黒曜石製剝片
37	西宇戸鬼塚古墳	西宇戸字鬼塚	古墳	古墳	82	円墳(L=7m, W=1.9m程度の横穴式石室か?)
38	牧遺跡	西宇戸字牧・奈女利	包含地	先・縄	45	ナイフ形石器, サヌカイト製剝片, 石核
39	牧第2遺跡	西宇戸字2－1	古墳	古墳	15	黒曜石製剝片, 石鏃

第2図　大島村内遺跡一覧

において大きな役割があったことは間違いない。さらにこの島は防衛上でも重要な役割を果たしている。『肥前国風土記』によると肥前国につくられた20箇所の烽の内８箇所が松浦郡につくられており，豊後国が全部で５箇所であったのと比べるとはるかに多い烽がつくられている。烽がどこに設置されたかは現在のところ定かではないが，白村江の戦い後対馬・壱岐に防人と烽が置かれ太宰府には水城が築かれたことを考えると的山大島にも烽が置かれたことは十分に考えられる。また元寇後の記録として，『来島文書』には「壱岐島より始めて島々高き所に火を立てらるべきの間，大島には壱岐を見て，その時をたがえず，たきぎにとりつみてあまたたくべきなり，たがいに火のひかり煙を見てたかるべし，大島の火を見て鷹島にたきつぐべき由，相ふれ畢んぬ。異国用心大事也，更々緩怠の条有るべからず候言々。永仁二年三月六日」とあり永仁２（1294）年，壱岐から大島，鷹島の烽を受けて九州の海岸の防御の強化をおこなうよう肥前国守護の北条定宗から大島又二郎あてに文書が出されている。烽火台の場所としては的山大島のほぼ中心部にある標高195mの番所岳について，『大島乃歴史』に「文永の役後，鎌倉幕府の命によりまして，異国船，即ち外国船監視の遠見番所として，特に日本に於ける西国防備の第一線基地として重要な任務をおびた場所でございまして，明治４，５年廃止になりますまで，数百年間遠見番所の任務を果たしてきたところでございます。」と書かれてあり，現在の段階では番所岳にその烽火台があったと考えられている。

以上のように的山大島は古くから，航海技術に優れた人々の存在や外交及び防衛において重要な役割を果たしてきたことが遺跡や様々な史料から伺い知ることができる。さらに，江戸時代になると周辺海域で捕鯨が盛んにおこなわれるようになり，的山大島でも鯨組が組織され明治初期まで操業が続けられていた。また，今回の発掘ではニホンアシカの骨一体分及びクジラ類等の獣骨が土壙より出土している。詳細は後述の国立歴史民族博物館の西本先生にお願いするが，ニホンアシカは縄文時代に日本列島沿岸諸地域に広く生息していたと考えられており，対馬や五島列島周辺の海域もまたニホンアシカの生息域であったと考えられている。このようにまだ開発が進んでいない地域が多く存在する大島村には，国境近くの島嶼としての特徴を古くから伝えている。

【参考文献】

長崎新聞社　1984『長崎県大百科事典』
長崎県教育委員会編　1997『原始・古代の長崎県』資料編Ⅱ
大島村郷土誌編纂委員会編　1989『大島村郷土誌』
下川達彌　1985「長崎県北松浦郡大島村の考古遺跡－旧石器資料の紹介－」　『長崎県北松浦地方の文化－松浦市，吉井町，大島村，特定地域の基礎文化調査報告書Ⅴ－』長崎県立美術博物館
樋口隆康・釣田正哉　1951「平戸の先史文化」『平戸学術調査報告書』京都大学平戸学術調査団編
大島村教育委員会　1956『大島村乃歴史』
宮路淳子　1998「宮下貝塚出土の動物遺存体」『宮下貝塚』富江町教育委員会
村川逸朗　1992『大根坂遺跡』大島村教育委員会

Ⅳ　平成９年度の調査概要

１　調査の方法

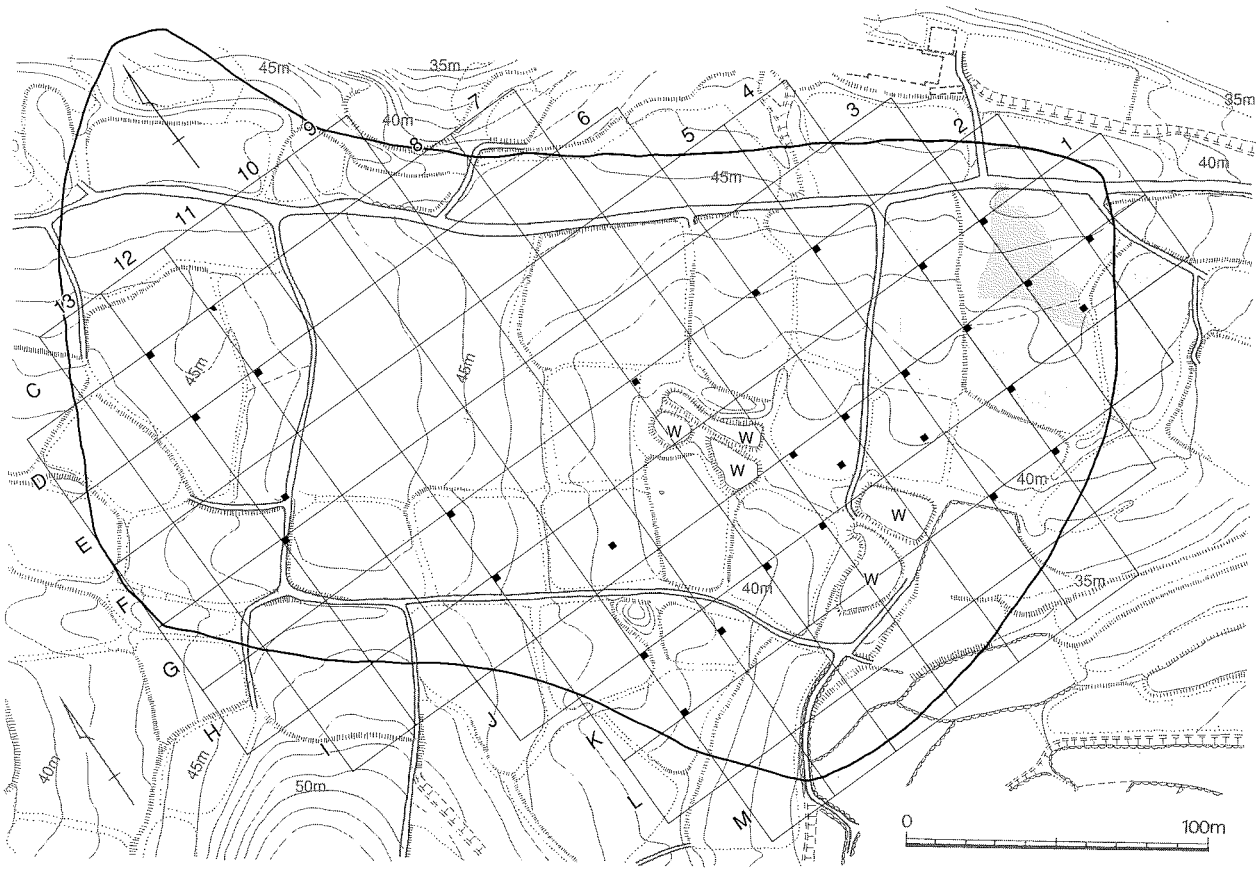
調査期間は平成９年９月29日～10月17日で，調査面積は140㎡である。遺跡の範囲内で圃場整備の対象となっている区域を25mのメッシュをかけ，東から西に１～13，北から南にＡ～Ｌとした。基本的に試掘壙は２ｍ×２ｍの範囲で各区に１箇所ずつ設定したが，明らかに削平されている場所は対象から外し，地形や遺物の出土状況に応じて試掘壙の数を増やしたり試掘壙の拡張を行った。試掘壙は合計33箇所設定した。

２　土　　層

本遺跡の北西部（Ｄ～Ｇの11・12）は低位溶岩台地の最頂部に当たり，土壌の流出が激しいためほとんどが地表から20～30㎝で玄武岩の基盤に達した。

中央部及び北西端（Ｈ・Ｉの７～13）は土壌が厚く１ｍ以上に達する箇所があったが，すべて第１層の流れ込みや盛土と考えられ，包含層や遺構は確認されなかった。

遺跡のほぼ中央にある溜池の南東部の試掘壙Ｊ５・Ｊ６①・Ｊ６②からは弥生土器片が包含層とみられる層から出土している。Ｊ５の包含層は地表から約30㎝下のところに厚さ30～40㎝の範囲で確認された。Ｊ６①及びＪ６②では地表から約20㎝下のところに厚さ15～20㎝の範囲で確認された。



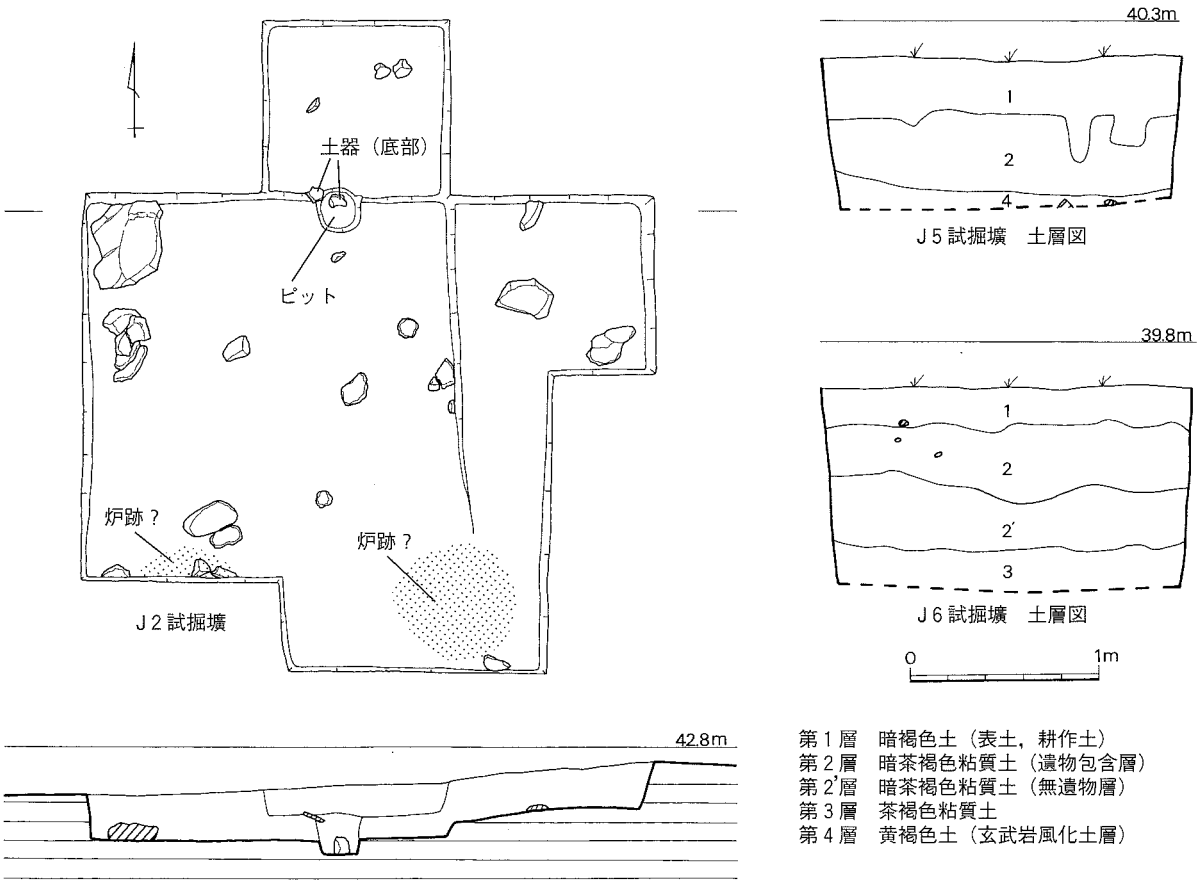
※Wはため池

第３図　遺跡範囲および試掘壙配置図（Ｓ＝１／2,500）

3 遺　　構

試掘壙Ｉ２・Ｊ１・Ｊ２①・Ｊ２②では，地表から約20cmで基盤に達したが，その基盤に掘り込まれたピットが確認された。特にＪ２①では直径約25cm，深さ約20cmのピットが見つかり，その中から弥生土器の底部片が出土した。ピット中の土質は暗茶色粘質土で粘性は強い。第１層の表土下が第４層の地山であることから，遺物包含層は削平されたものと考えられる。

このピットから南へ２ｍのところに直径約60cmで円形の炉跡とみられる焼跡が見つかった。焼跡には黒色の炭化物が多量に含まれてあった。さらにここから西へ１ｍのところにも同様の焼跡が見つかった。しかし平成10年度の本調査では，この周囲に石組等の遺構は見つからず，炭化物を多量に含んだピットであるだけで詳細は不明であった。



第４図　平成９年度範囲確認調査　出土遺構および土層図（Ｓ＝１／40）

V　平成10年度の調査概要

1　調査の方法

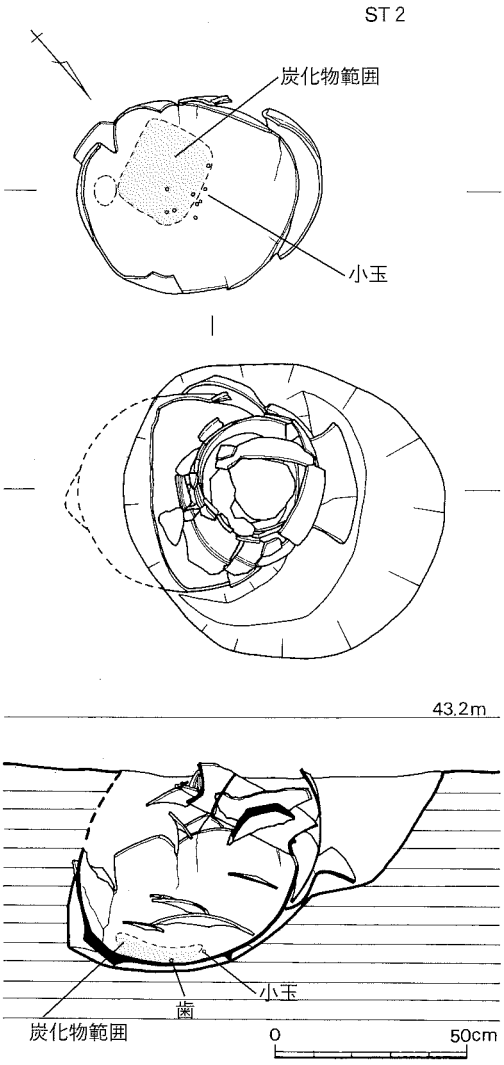
調査期間は平成10年９月28日～10月30日で，調査面積は約1,400m²である。表土剥ぎを行った後，国土座標(ｘ＝52300，ｙ＝1740）を基準として，10m四方のグリッドを設定し掘り下げを行った。

2　土　　層

全体的な層位は平成９年度試掘調査の第１層にあたる表土（耕作土）と第４層にあたる玄武岩風化土層（地山）の２層からなっている。

表土は深さ約20～30cmで，耕作部分と機械により踏み固められた部分とに分けられるが土質は同じである。表採として土器片や石器片が数多くみられることから，第１層と第４層の間には遺物包含層があったと考えられるが，今年度の調査が低位溶岩台地の最頂部分にあたり土壌流出と基盤整備による削平のため，そのほとんどが消失しているものと考えられる。

第５図　平成10年度・平成11年度調査区グリッド配置図（Ｓ＝１／1,000）



第６図　甕棺墓実測図①（Ｓ＝１／20）

調査区域の東側には，部分的に表土の下に耕作土と地山の土が混じり合った層が入っているところがあった。これは昭和40年代に行われた基盤整備時の攪乱層であると見られ，遺物はほとんど含まれていなかった。

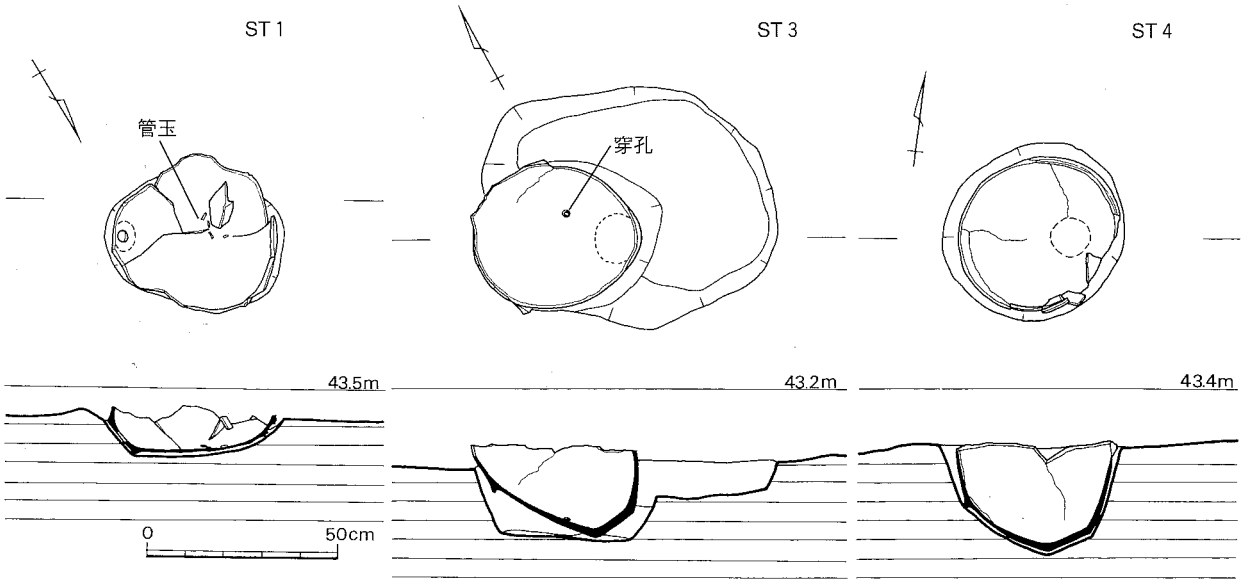
３　遺　　構（付図参照）

ａ　甕棺墓（ＳＴ）

調査区北東側は削平が著しく，甕棺墓が検出されたのは主に北西から南寄りにかけての部分で，10基を確認した。２号・３号・４号・10号甕棺墓のグループと，５号・６号・７号・８号甕棺墓のグループに大別できる。１号甕棺墓は最北端に位置するが，これは今回調査できなかった道路部分以北にも墓域が広がりをもつ可能性を示唆している。９号甕棺墓は平成11年度調査区の23号甕棺墓周辺に位置し，こちらとの関連で考える必要があるかもしれない。

１号甕棺墓（第７図ＳＴ１，図版４）

調査区の最北端に１基単独で占地する。上棺が甕で下棺が壷の組み合わせであるが，上甕は内側に赤化粧粘土を施した口縁部のみで，下壷は胴部中位から底部が残存する。副葬品として管玉４個が甕の壁面直上から出土した。底部中央には径３cmほどの孔が施される。

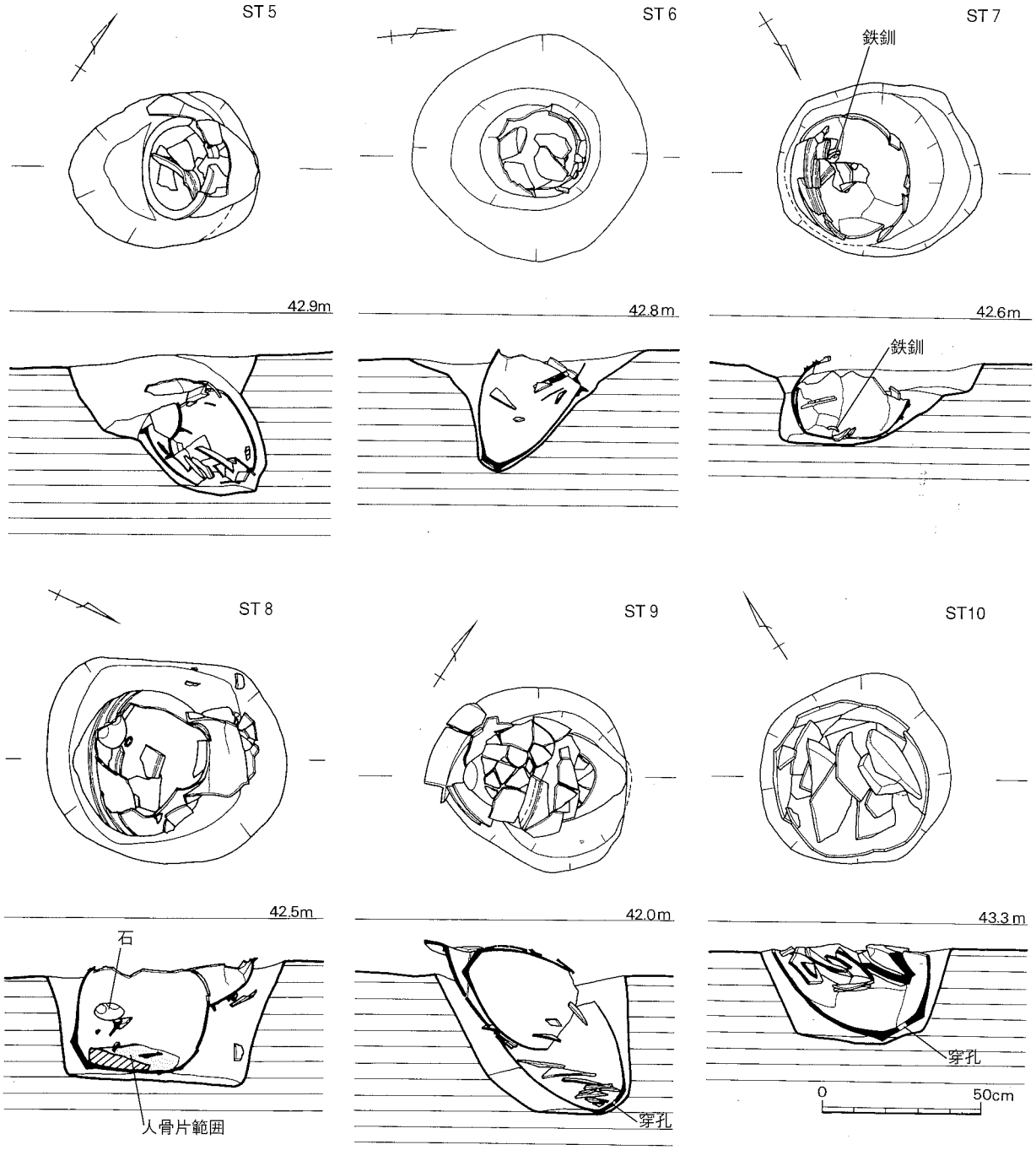


第７図　甕棺墓実測図②（Ｓ＝１／20）

明確な墓壙は確認できないため，墓壙に沿うように甕棺は埋置されたものと思われる。

2号甕棺墓（第6図ＳＴ２，図版４）

調査区の北西寄りの一群の中に位置する。上棺は赤色顔料で塗彩した壷で，口縁部～肩部付近を打ち欠いたのち，下棺の壷の口縁部分を覆うように被せていたのがわかる。下壷は比較的よく残存する。中からはガラス小玉が炭化物や歯に混ざって出土した。墓壙は二段掘りになっており，南東の小口部分に横穴を掘る。下壷を据えるのに，上壷の口縁部を肩部の下に敷いて支えとし，埋置角度を調整している。



第８図　甕棺墓実測図③（Ｓ＝１／20）

3号甕棺墓（第7図ＳＴ３，図版４）

２号甕棺墓に近接した場所にある。上甕と下甕の大半が削平され，遺存状況はよくない。下甕の胴部下位に穿孔がみられる。墓壙は二段なっているが，下甕の挿入方向と異なるため，本来の在り方とは言い難い。後からピットが切り込んだ可能性もあろう。

4号甕棺墓（第7図ＳＴ４，図版４）

２号・３号甕棺墓より６～７ｍ東方に位置する。下壷の胴上部まで完全に削平され，胴中部～底部しか残存しない。下壷に穿孔はなく，人骨等もみられない。墓壙は甕をギリギリに据え置く程度しか掘り込まれておらず，埋置角度をとるためのものかと思われる。

5号甕棺墓（第8図ＳＴ５，図版４）

調査区の中央付近に位置し，これまでの甕棺群とは南東に16mほど離れた地点にある。６～８号甕棺墓は５号甕棺墓に連なり，南西方向に埋置されている。５号甕棺墓は上甕を欠損し，口縁部のみが下甕内部に落ち込んでいた。下甕は二段に掘り込まれた墓壙に斜め方向で挿入される。ただし下甕の底部は欠けており，当初から打ち欠いた甕を埋置したのであろうか。特異な甕棺墓である。

6号甕棺墓（第8図ＳＴ６，図版４）

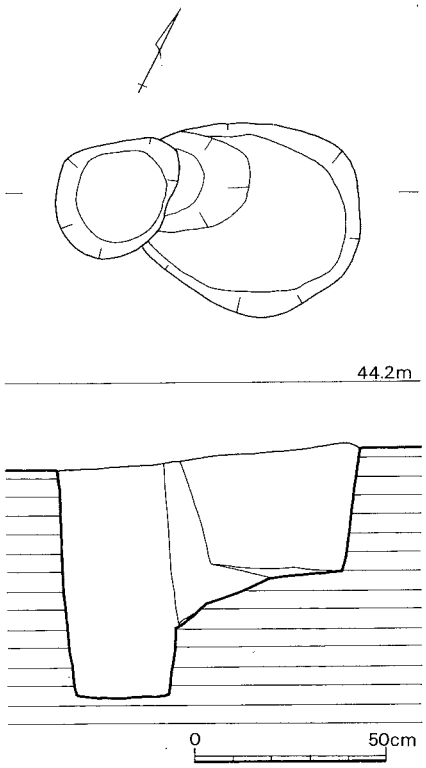
５号甕棺墓の南に隣接して位置する。やはり上甕の一部を欠損するものの，口縁部が遺存状態を保っていたため，接口式の甕棺墓であったことがわかる。下甕は比較的残りがよく，口縁部外面に赤色顔料の塗布がみられる。穿孔は施さない。墓壙は下甕を斜めに挿入するため，二段に掘り込まれていた可能性もある。

7号甕棺墓（第8図ＳＴ７，図版５）

６号甕棺墓から３ｍほど南西に位置する。上棺と下棺の壷上半部を削平されて欠失し，遺存状態はあまり良くない。それでも人骨の砕片に伴って鉄釧片が出土した。下壷は胴部中位に赤色顔料の塗彩がみられたが，穿孔はなかった。墓壙は二段掘りで，底部を据えるため南東の小口部分にやや横穴を掘る。

8号甕棺墓（第8図ＳＴ８，図版５）

７号甕棺基の南に隣接した場所にあり，上部は削平を受けている。下棺に壷を用い，口頸部は意識的に打ち欠いている。上甕は口縁部内外面に赤化粧粘土を施し，下甕の口頸部を覆うように被せられ，埋葬の状態を保っている。全面に赤色顔料が塗布される下甕の内部からは人骨の砕片がみつかっているが，部位を特定できたのは歯冠のみである。人骨と同レベルに丸石３個が置かれていることは興味深い。墓壙は断面が逆台形状を呈し，下壷を支えるような配慮はなされていない。



第９図　石蓋土壙墓実測図（Ｓ＝１／20）

9号甕棺墓（第８図ＳＴ９，図版５）

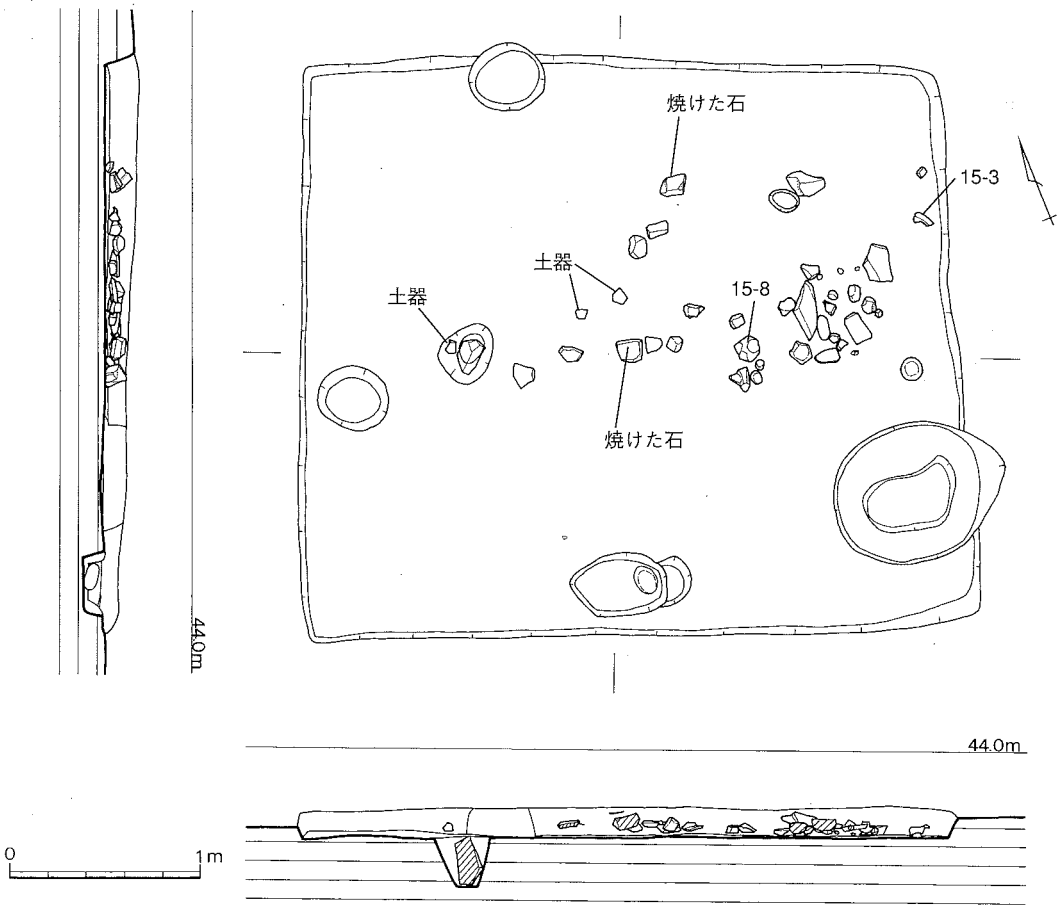
５～８号甕棺墓の一群とはかけ離れた場所にあり，８号甕棺墓から18mほど南に下った地点に位置する。別の一群に属するものと思われる。

この地区は削平を免れたのか，甕棺墓の遺存状況は比較的良好である。口縁部を打ち欠いた上甕を，下甕の口縁部に挿入する呑口式の構造をもつ。その際，挿入した上甕が不安定にならないように，別の中型甕の口縁～胴部上半の破片を利用している状況が窺える。

下甕の口縁部と接するように，支えとなる別甕の胴部を敷き，上甕の挿入を容易にすると同時に上甕を固定する役割も果たしている。下甕の底部中央には径１cmの孔が施されていた。墓壙は斜め方向に掘り込まれ，二段掘りにはなっていない。

10号甕棺墓（第８図ＳＴ10，図版５）

２～４号甕棺墓の一群の中にあり，２号甕棺墓の北側に隣接する。上甕は削平され，下甕も一部を欠損するなど遺存状態は良くない。下甕の上面に胴部片がまとまって出土しているが，破片が表裏交互に揃えられたような感があり，人為的または意識的に投棄された可能性が高いと思われる。下甕の底部中央には径1.5cmの穿孔が施される。墓壙は断面逆台形状をなし，下甕の胴部径よりはやや広めに掘って埋置角度をとっている。



第10図　１号住居跡実測図（Ｓ＝１／40）　※図中の番号は挿図番号ー遺物番号を表す

b　石蓋土壙墓（ＳＧ１）（第９図）

二段掘りの土壙で，南西小口の上面に厚さ３cmほどの板状石を有することから，調査者は石蓋土壙墓と判断した。長さ80cm，深さ65cmを測る。土壙内からは被熱した骨の一部と炭化物が出土している。

c　１号住居跡（ＳＣ１）（第10図，図版２）

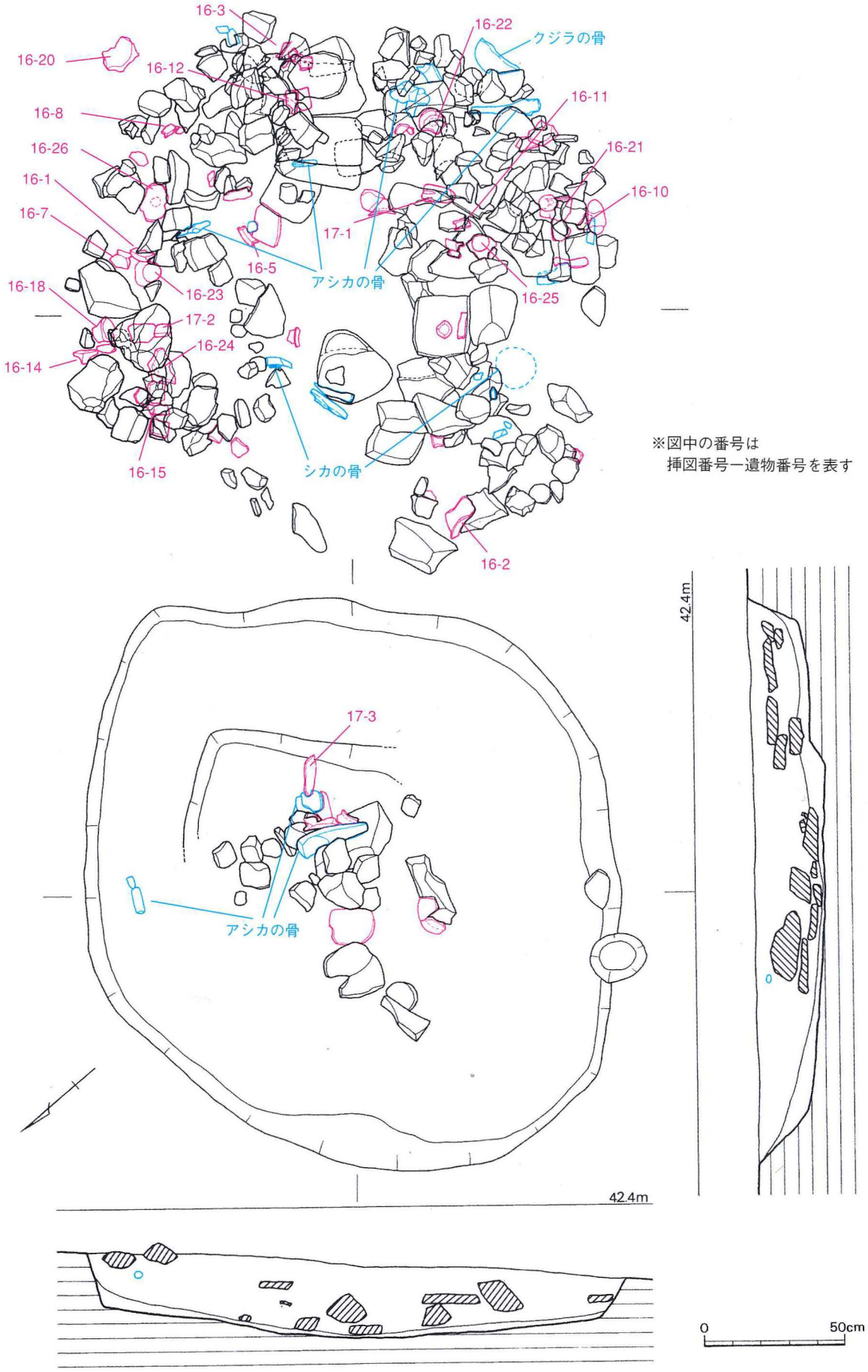
調査区中央のやや北側で地山に掘り込まれた約３ｍ四方の方形をした住居跡が検出された。ほとんどの部分が削平を受けていると見られ，深さは数cm～15cm程度であった。ベルトを残しながら掘り下げる段階で弥生土器片等が検出され，床面からは焼けたものと見られる角礫と少量の炭化物も確認されたが炉跡は確認されなかった。土器は弥生時代中期～後期のものが含まれるが，住居が方形であることから遺構の時期は弥生中期後半頃であると考えられる。また，住居内にはピットが３箇所および住居を切るように２箇所のピットも検出されたが，その性質は不明である。

d　１号土壙（ＳＫ１）（第11図，図版２）

調査区西側にて，玄武岩風化土（黄褐色土：地山）に掘り込まれた直径約２ｍのほぼ円形をした土壙が検出された。また土壙に伴うと考えられる直径20cm前後の柱穴が周辺に数基確認された。遺跡内のその他の遺構に比べ，あまり削平を受けていないと考えられる。検出時は，黒褐色土のほぼ円形をした中に数個の弥生土器底部，礫が出土している状況であった。特に土壙の北側では底部を20cmほどの３個の角礫で，３方角（東・西・南）を囲んでいる部分が確認された。

ベルトを残しながら掘り下げると，黒褐色土中に多数の礫，数種の獣骨，土器，石器，結晶片岩などが含まれ，また炭化物や被熱礫も確認された。土壙の深さは20～30cmほどで，地山を確認するまで前述した遺物などが含まれていた。

土壙内の獣骨，周辺の柱穴，角礫で囲まれた部分などから，何らかの祭祀行為の可能性が考えられる。出土遺物からみると，弥生時代中期中頃～後半のものと推測する。



第11図　1号土壙実測図（S＝1／20）　＊赤は出土遺物　青は骨を表す

4　遺　　物（第12図～第21図，図版９～図版16）

a　土器（第12図～第16図，図版９～図版15）

i　甕棺（第12図，第13図，図版10～図版12）

１号甕棺（第12図ＳＴ１，図版10）

上甕は逆Ｌ字状をなす口縁部である。胴部にかけてふくらみをもつせいか，内側にやや突出するような感がある。長くのびた口縁端部は垂れ気味となる。口縁部の内外面には赤橙色の化粧土（Slip）が塗られている。

下棺は壷で，口頸部を削平され欠失する。胴部最大径はやや上位にあり，シャープな２条のM字突帯を有する。底部にかけては急にすぼまり，均整がとれている。底部中央には内側から打ち欠かれた穿孔を施す。調整は丁寧なナデで，胎土に金ウンモが目立つ。中期後半頃に比定されよう。

２号甕棺（第12図ＳＴ２，図版10）

上棺・下棺ともに壷で，上壷は口縁部～肩部を打ち欠かれ，胴部中位～底部とは別に出土した。口縁部は大きく外反して開くもので，端部に斜めの刻目，つけねには三角突帯を施す。胴部中位の最大径付近にも刻目を付けた三角突帯を巡らす。底部はやや凸レンズ状をなす。一部判別し難いところはあるが，内外面とも赤色顔料が塗彩されていたものと思われる。

下壷は口縁部を欠く。頸部はつけねにコ字突帯を貼付し，そのまま上方に長くのびる。胴部は上位に最大径を有し，だれた台形状の突帯が中位より下に付く。底部にかけてはややくびれ気味で，平底となる。胎土に金ウンモはほとんど目立たない。胴部突帯の内面にススが帯状に付着しているのが特異である。焼成時の歪みが大きく，全体にバランスが悪い。弥生後期中葉頃か。

３号甕棺（第12図ＳＴ３，図版10）

下甕は胴部上半を欠失し，下半部のみ遺存する。胴部中～下位に分厚い台形状の突帯を有する。突帯は鈍く下に垂れており，貼付も粗雑である。胴部下位に内側から打ち欠いた穿孔が施される。底部は平底ないし凸レンズ気味となる。甕棺の時期は弥生後期中葉か。

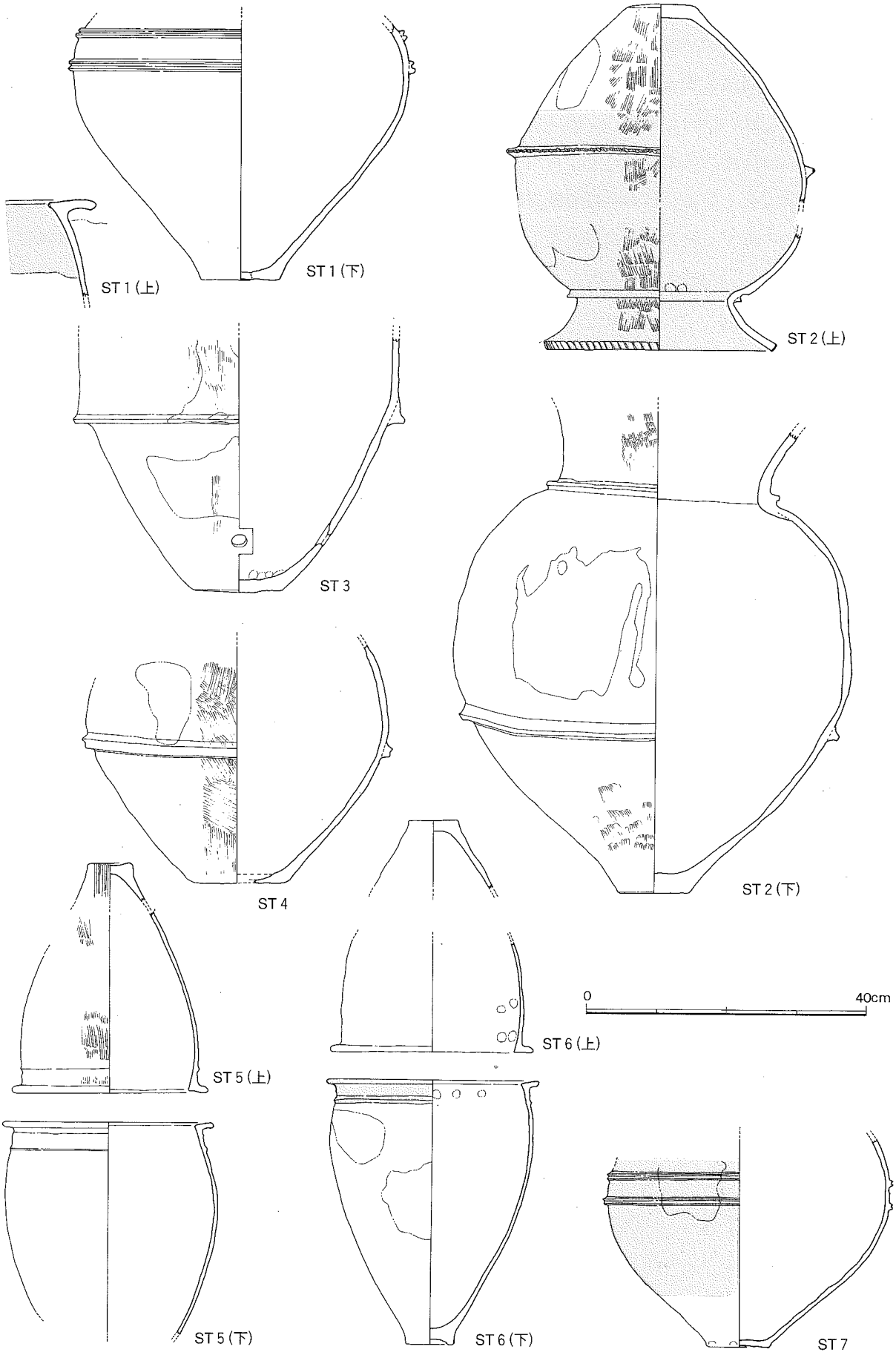
４号甕棺（第12図ＳＴ４，図版10）

下棺には壷を用い，やはり口縁部を欠失する。胴部中位やや下に分厚い台形状突帯を巡らす。底部にくびれはほとんどなく，そのまま平底となる。底部中央の器壁がうすく，打ち欠きが施されたかと錯覚する。胎土に角閃石が目立ち，砂粒も粗い。全体のつくりに粗雑化傾向がうかがえる。弥生後期前半頃か。

５号甕棺（第12図ＳＴ５，図版10～図版11）

上甕は逆Ｌ字状口縁を持ち，端部はやや肥厚する。口縁下に１条の低い三角突帯を有する。胴部は若干のふくらみをもちながら，浅い上げ底気味の底部にいたる。外面にススの付着が見られることから，日常容器を転用したものである。

下甕も口縁部は逆Ｌ字状をなし，端部はやや肥厚する。口縁下に１条の鈍い三角突帯を施し，胴部はふくらみが中位にある。底部は当初から欠失していた。外面にはススの付着が顕著で，上甕同様に



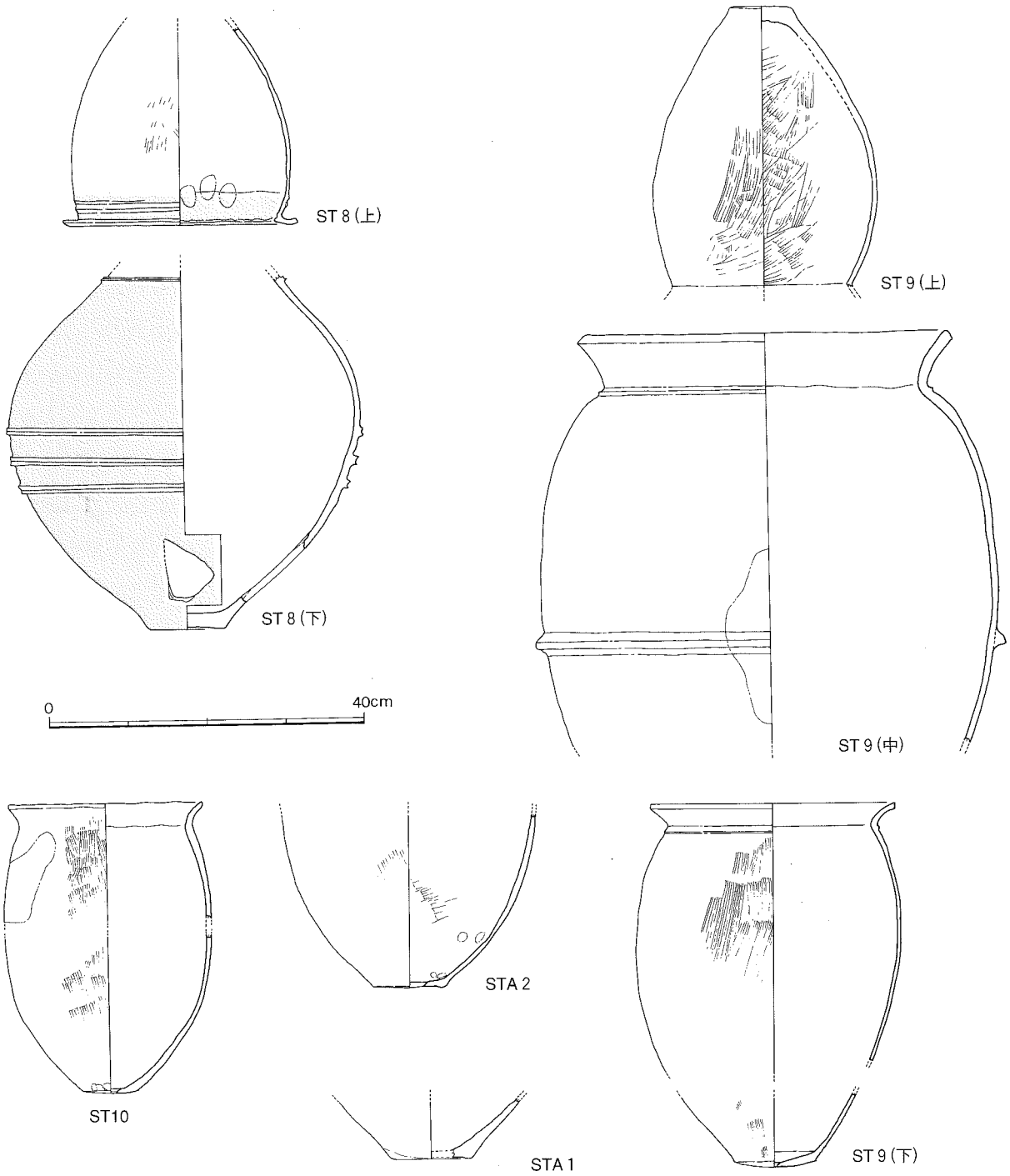
第12図　甕棺実測図①（S＝1／8）

日常容器を転用したのが明らかである。弥生中期中頃に比定できよう。

6号甕棺（第12図ＳＴ６，図版11）

上甕は逆Ｌ字状の口縁を呈し，上面はほぼ水平をなす。端部は肥厚気味で，胴部は張ることなく底部に移行する。底部は底面中央にくぼみがみられ，上げ底の名残をとどめる。胎土に金ウンモが目立ち，器壁は薄く仕上がる。日常容器の転用である。

下甕はやや内傾する逆Ｌ字状口縁をなし，外面には赤色顔料で塗彩される。口縁部下に１条の鈍い三角突帯を有す。胴部最大径は上位にあり，ふくらみをもちながら急速にすぼんで底部に至る。底部

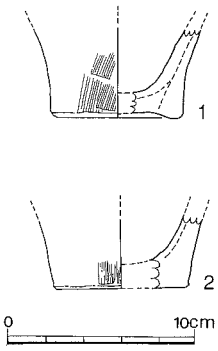


第13図　甕棺実測図②（Ｓ＝１／８）

は低い上げ底をなす。上甕同様に胎土に金ウンモが多く見られ，器壁も薄い。日常容器の転用品である。時期的には５号甕棺と同じかやや古い傾向がうかがえ，弥生中期中頃と思われる。

７号甕棺（第12図ＳＴ７，図版11）

下棺の壷胴部のみが遺存する。１号甕棺に似るが，胴部最大径はやや中位に下がり，赤色顔料が塗布される。２条のM字突帯はやや鈍く，退化傾向がうかがえる。底部は平底をなす。胎土は精良で，弥生中期後半のものである。



第14図　石蓋土壙墓出土土器（S＝1／4）

８号甕棺（第13図ＳＴ８，図版11）

上甕は逆Ｌ字状口縁をなし，端部は下に垂れる。口縁部下には１条の三角突帯を施すが鈍いもので，痕跡的なものにとどまる。むしろ突帯部分の強いヨコナデでできた稜が，突帯のような錯覚を与える。胴部は張り出し，最大径はやや中位に下がる。口縁部の内外面には赤橙色の化粧土（Slip）が施されていた。胎土や焼成は精良な方である。

下甕は口頸部が打ち欠かれ，胴部以下が遺存する。頸部付け根に１条のM字突帯，胴部中位やや下には３条の鈍いM字突帯を巡らす。胴部下位には内側から三角形の大きな穴を穿つ。底部は若干上げ底気味の平底である。胴部に赤色顔料を施した糸島系の土器であろう。時期は概ね弥生中期後半頃に比定される。

９号甕棺（第13図ＳＴ９，図版11～図版12）

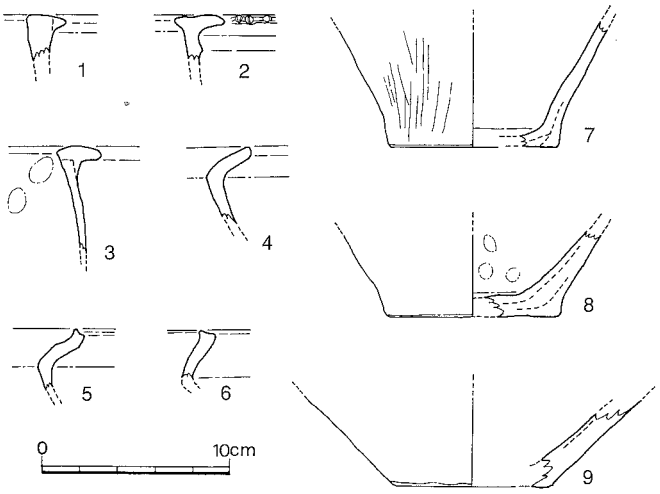
３連甕棺である。上甕は口縁部を打ち欠くものの，く字状を呈するか。胴部は大きく張り出し，中位付近に最大径を有する。底部は平底だが，凸レンズ状に移行する過渡期的様相を見せる。日常甕の転用品である。

中甕はわりと大型のもので，胴部下位～底部を欠く。口縁部は急角度で上方に伸びたのち反するもので，胴部との境に１条の三角突帯を有する。胴部は最大径が上位にあり，あまり張り出すことなく長胴化する。中位付近には鈍い台形状の突帯が下向きにつく。

下甕は口縁部がく字状をなし，端部は端正な面をつくる。胴部との境は形骸化した三角突帯が痕跡的につく。胴部は中位付近にふくらみをもちながら長胴化する傾向をみせる。底部は凸レンズ状を呈し，中央には穿孔が施される。中甕は橋口編年のＫⅣｂ式の特徴を有し，上下甕は底部形状が平底から凸レンズ底への移行段階であることから判断して，弥生後期前半～中頃に比定できよう。

10号甕棺（第13図ＳＴ10，図版12）

甕の口縁部はく字状を呈し，端部は丸くおさめる。胴部との境のくびれはあいまい



第15図　１号住居跡出土土器（S＝1／4）

なものとなり，内面の稜も不明瞭である。胴部は張り出しをもたないまま長胴化し，最大径もやや下位に下がる。底部は凸レンズをなし，中央には内側から打ち欠いた穿孔を有する。9号甕棺の下甕より退化傾向がみられることから，弥生後期中頃～後半の部類に入るか。

その他（第13図ＳＴＡ1，ＳＴＡ２）

ＳＴＡ１，２は調査者がそれぞれ甕棺かどうか判別できなかった遺構をさす。ここでは遺物だけを掲載した。ＳＴＡ１は壷の底部，ＳＴＡ２は甕の胴部～底部である。ＳＴＡ２は長胴化した胴部に，平底の底部がつく。底部中央に穿孔がみられ，10号甕棺とほぼ同時期のものと判断してもよいだろう。ただし，ＳＴＡ１については遺物だけでは判断しがたい。

ii　石蓋土壙墓出土土器（第14図）

甕（１・２）　１はやや上げ底で，２は完全な平底を呈す。底部のくびれに古い要素を残すものはあるが，ほぼ弥生中期中頃～後半の時期が考えられよう。ともに覆土からの出土である。

iii　１号住居跡出土土器（第15図）

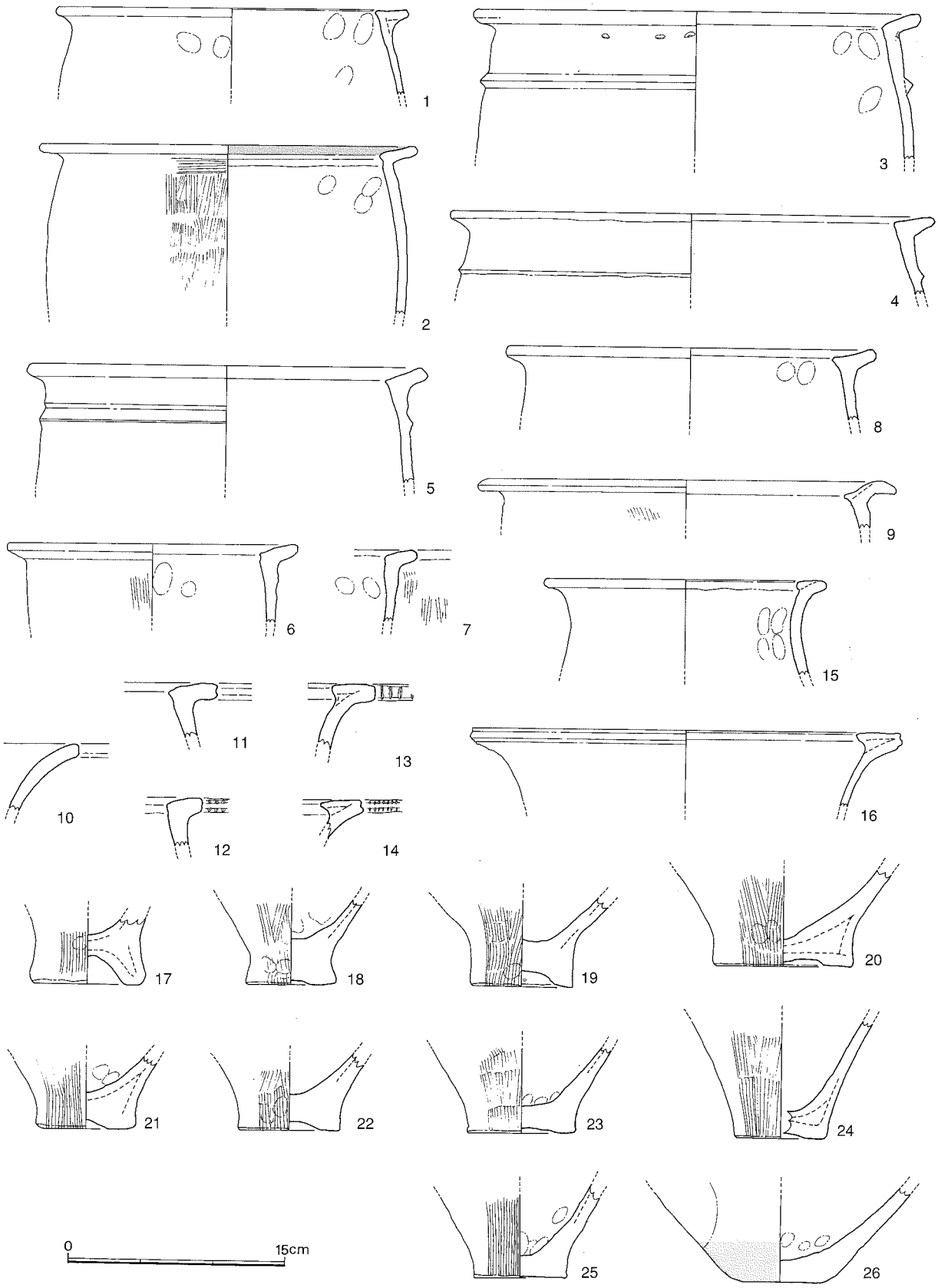
甕（１～７）　１は平坦な断面三角形の口縁部で，城ノ越式か。２は逆Ｌ字状口縁で端部には刻目を施し，内側へも突出をみせる。口縁部下には１条の三角突帯を有す。金ウンモを含む。３も逆Ｌ字状口縁で，上面は丸味を帯び，内側には突出しない。４は屈曲口縁で，端部は丸くおさめる。５・６も屈曲口縁で，端部は跳ね上がる。４～６は図がやや傾き過ぎか。７は粗いハケ目が残る胴部に，薄手の平底がつく。

壷（８・９）　胴部はナデ調整で，９は胴部にかけて大きく開く。３・８は住居跡の床面出土で，他は覆土中からの出土である。出土遺物からみて，住居跡の時期は弥生中期中頃以降かと推測される。

iv　１号土壙出土土器（第16図）

甕（１～９，17～25）　１は平坦な断面三角形の口縁部にみえるが，短い逆Ｌ字状口縁に粘土を付加したものである。内側にもわずかに突出がみられ，胴部は張る。２は内傾した逆Ｌ字状口縁で，平坦面に赤化粧粘土を塗る。ヨコナデのために内側へ小さく突出するような感がある。胴部はやや張る。３もやや内傾する逆Ｌ字状口縁である。短く伸びた端部を丸くおさめる。口縁部からやや離れたところに１条の三角突帯を巡らす。４は断面三角形の口縁部が長く伸びた逆Ｌ字状口縁をなす。やはり口縁部からやや離れた位置に１条の三角突帯を施す。５は内側に傾斜する逆Ｌ字状口縁で，内側にも小さく突出する。口縁下に１条の鈍い三角突帯を有するが，その上の稜は強いヨコナデによってついたものである。６・７も内傾する逆Ｌ字状口縁で，内側への突出は痕跡的なものとなり，浅くくぼむだけとなる。胴部はあまり張らない。８は逆Ｌ字状口縁の平坦部が内弯するもので，端部は丸くおさめ，内側にも明瞭に突出する。６～８は胎土に金ウンモを多く含む。９は発達した鋤先状口縁が内側に低く傾斜し，端部は下に垂れるものである。

17は底部がくびれ，高い上げ底をなす。18は分厚い上げ底でくびれを有し，底部裾のふんばりが強い。19も分厚い上げ底だが，まっすぐのびて裾部の発達はない。20は若干底部がくびれ，浅い上げ底



第16図　1号土壙出土土器（S＝1／4）

をなし，中央は兜巾状を呈す。裾部のふんばりは強い。21は分厚い底部で，中央をくぼませて上げ底に仕上げる。22もほぼ同様である。23は円盤状の底部に浅いくぼみを施して，上げ底状になす。24・25は細くしまった底部から胴部にかけてそのまま直線的に開く。24はやや上げ底状,25は完全な平底になる。

壷（10～16，26）　10は広口壷の口縁部か。大きく外反する単純口縁で，端部は面をなす。11は分厚い逆Ｌ字状口縁で，内側に小さく突出する。12も逆Ｌ字状口縁で，端部に刻目を有し，その上から浅い沈線を施す。内側への突出はなく，浅くくぼむだけになる。13～16は鋤先状口縁で，15のようにあまり発達せず，端部を丸くおさめる小型のものと,16のように内側に発達し，大きく開くものがある。13・14は後者で，13は面をなした端部に刻目を施し，14は刻目の上からさらに沈線を巡らす。ともに平坦面は赤色顔料が塗布される。

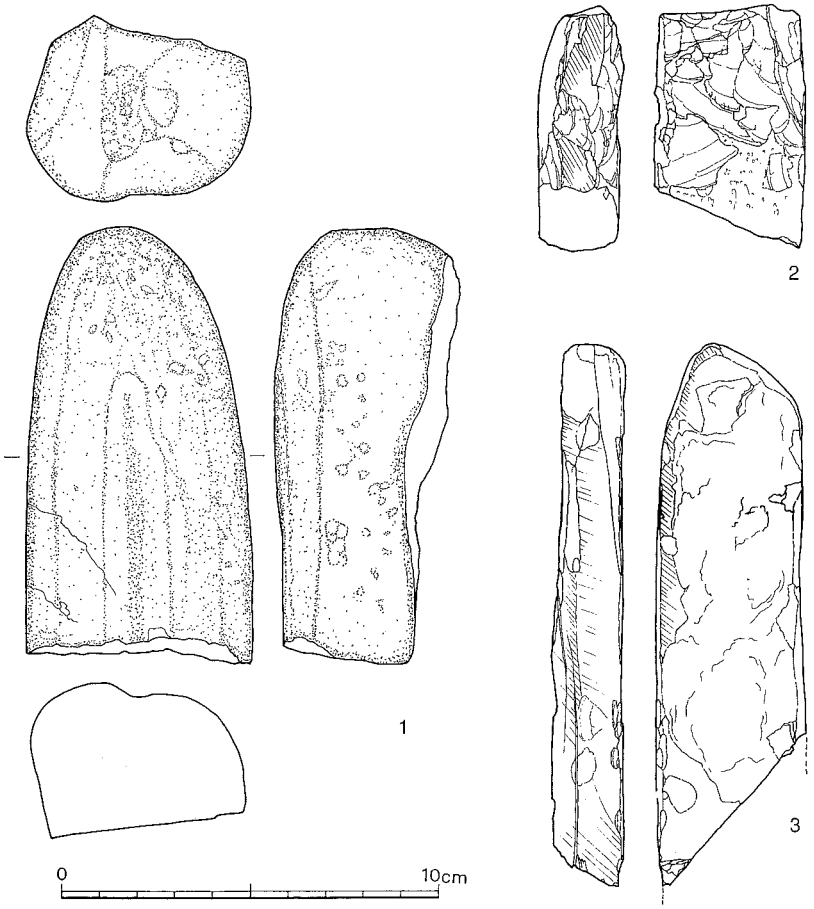
26は小さな平底で，底部の稜は不明瞭になる。底裾部付近に赤色顔料の塗彩が残る。

６・９・13・14・16・17・19・21は覆土からの出土で，それ以外の出土地点については第11図に示した。概ね弥生中期中頃～後半の時期が考えられよう。

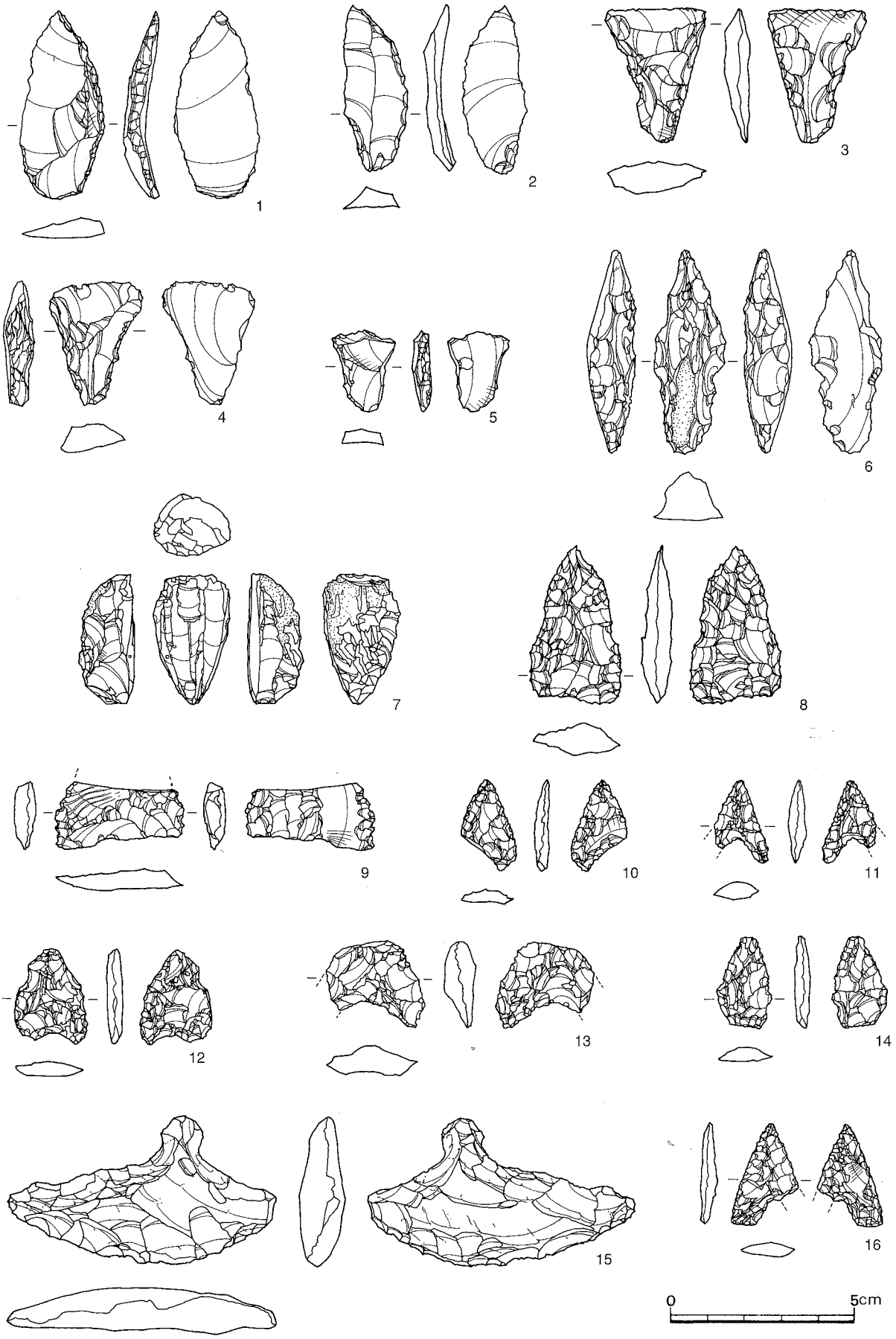
b　石器（第17図，第18図，図版16）

i　１号土壙出土石器（第17図，図版16）

１号土壙（須玖Ⅰ段階）より方柱状石斧２点，砥石が出土している。１は砂岩を使用し，長方形の側面に一条の溝が観察される。多くが欠損しているが，本来複数の研ぎ出し面が確保されていたものと考えられる。全体に磨き痕と敲打痕が見られ，複数の機能をもっていたと考えられる。今回の調査では鉄器として鉄鎌３点が確認されているが，本資料は溝をもつことから刺突具等の研磨具と考えたほうが妥当であろう。２は，扁平片刃石斧の頭部片，３は方柱



第17図　１号土壙出土石器（Ｓ＝１／２）



第18図　その他の石器（S＝2／3）

状片刃石斧の刃部破損品である。どちらも白色の凝灰岩を使用している。1号土壙にはこの3点の他，被熱痕のある磨石等が数点含まれる。1号土壙はアシカ・クジラなどの海獣のほか，鹿・イノシシなどの骨も確認され，極めて祭祀色の強い土壙である。ここに挙げた3点の石器はいずれも破損品であるが，この破損については，祭祀行為の一環としての意図的な破壊・日常生活で使用した際の破損品，の両方の観点を考慮する必要がある。特に埋納されたアシカの骨には，石器による解体痕が認められるとのことから，解体に供した道具を一括埋納した可能性が高いと捉えるべきであろう。鉄器の生産に関わると思われる砥石の出土や，弥生時代特有の方柱状片刃石斧の存在は，離島地域における弥生時代の生産用具が本土部と遜色がないことを示唆するものとして重要であるとともに，離島地域における弥生時代の祭祀形態の一端を考えるうえで石器のもつ意味を再考する必要があろう。

ii　その他の石器（第18図）

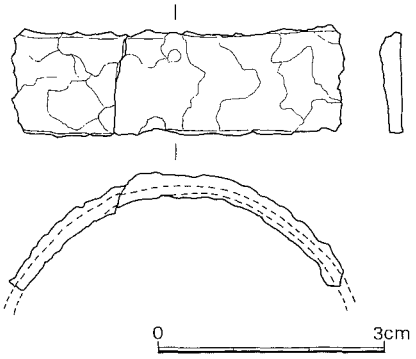
弥生時代の遺物の他に旧石器時代・縄文時代から弥生時代の石器が確認されている。旧石器時代の遺物としては，ナイフ形石器・台形石器・角錐状石器・細石核が出土している。本来この地域にも旧石器時代の良好な包含層があったものと判断されるが，北松玄武岩地帯特有の土の堆積が少ない地帯の一角にあることから，包含層はほぼ消滅したものであろう。黒耀石の多くは，松浦の牟田産を使用しているものと考えられる。縄文時代から弥生時代にかけての剥片石器も出土しているが，量的には少ない。8は黒曜石製の銛状の石器である。中央部には抉り状の加工も見られ，縄文後期に発達する銛頭状の石器に近似する。本遺跡で出土する海獣骨から，弥生時代の漁労具の可能性も否定できないであろう。9についても大形の銛状の石器の可能性が指摘できる。これらの石器が弥生時代のものとすれば，縄文後期に発達した漁撈用の石器が伝統的に弥生時代にも継承された可能性を示唆するものとして意義あるものであろう。10～14・15は石鏃を取り上げたが，どの石鏃も丁寧な平坦剥離を施している。その所属時期については先の8・9同様定かではないが，出土土器の割合から考えても弥生時代に属するものが多いと考えられる。1号土壙出土の石器とその他の石器について通観したが，極めて弥生色の強い石器と縄文時代の系統を引き継ぐ石器の2者が見られた。銛頭状の石器などについては，今後他の弥生時代の遺跡と比較すべきであり，縄文時代に発達した漁撈文化がはたしてどの程度継承されたのか，具体的に道具の変遷を捉えることが必要であろう。

c　その他の遺物（第19図，第20図，第21図，図版16）

i　鉄器

鉄釧（第19図，図版16）

幅1.3cm，厚さ1.5～2㎜の鉄板を円環状になした鉄釧である。断面は扁平な二等辺三角形を呈す。内径では5.0cm前後を測る。分析の結果，繊維などの付着物や象眼はみられなかった。出土した7号甕棺の年代観からすると，弥生中期中頃～後半に比定できる。



第19図　7号甕棺出土鉄釧（S＝1／1）

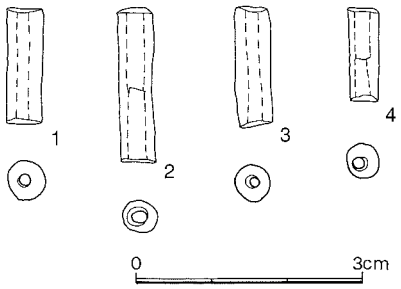
ii　玉類

管玉（第20図，図版16）

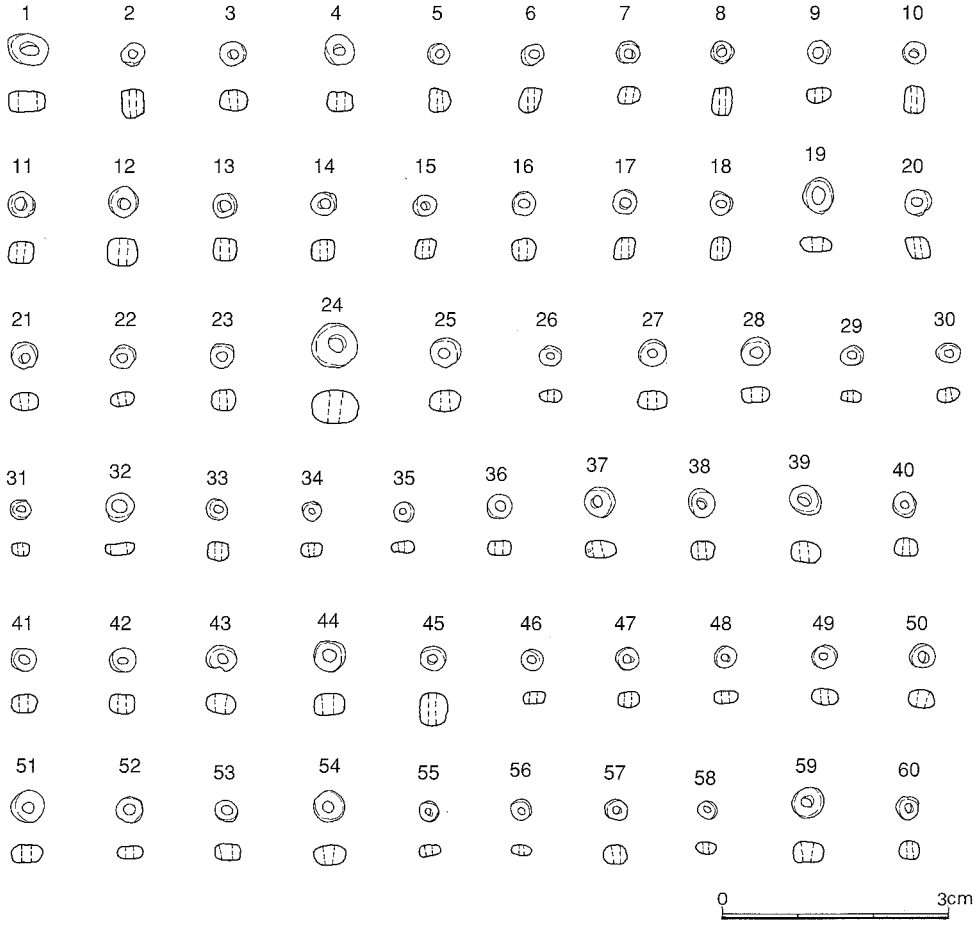
１号甕棺墓の下壷内から碧玉製の管玉が４点出土した。長さは1.2～2.0cmまであり，径は５㎜前後を測る。孔径は2.2～2.8㎜で，透過Ｘ線撮影により双方向から孔が穿かれたことがわかる。色調はほとんどが灰緑色を呈す。甕棺の時期から考えると，弥生中期中頃～後半の年代が与えられよう。

小玉（第21図）

ガラス製小玉はすべて２号甕棺墓の下壷内より炭化物に混在して出土した。採集できたのは60点である。大きさは径2.5～６㎜とまちまちで，規格性等はうかがえない。色調によって「淡青色系統と青紺色系統」に大別できるが，基本的には「鉛を含まないアルカリ珪酸塩系のガラス」という分析結果が出ている。甕棺の時期より判断して，弥生後期中頃のものと思われる。



第20図　１号甕棺出土管玉
（Ｓ＝１／１）



第21図　２号甕棺出土小玉（Ｓ＝１／１）

Ⅵ　平成11年度の調査概要

1　調査の方法（第５図）

平成10年度調査で検出された２・３・10号甕棺墓の周辺はさらに墓域が広がる可能性があるという判断から，排土置き場としていた北西部の200㎡については平成11年度の継続調査となった。また，平成９年度以降協議中であったＪ６試掘壙のある溜池周辺の750㎡も，今回の調査対象となった。

よって，当初の発掘予定面積は950㎡であったが，実際に調査を開始してみると予想を完全に覆すものであった。溜池周辺は若干の遺構らしき痕跡と数点の遺物が見られただけで，短時間に調査が終了したのに対し，排土置き場の方は予想外に遺構が広がりをもち，調査範囲の大幅な変更を余儀なくされた。平戸耕地事業所と大島村教育委員会を交えての協議の結果，掘削で遺構が失われる部分の4,950㎡について，本調査を実施することになった。

調査方法は平成10年度と同様，国土座標に従って10m四方のグリッドを設定し，ピット等の遺構の把握や遺物取り上げに用いた。主な遺構については，それとは別に略号を使用した遺構番号を付した。グリッドには座標のＸ軸に北から０～11の番号を，Ｙ座標に西からＡ～Ｍの記号を便宜上付して，それぞれのグリッド名とした。

2　土　　層

土層については基本的に平成10年度調査に準じる。基盤整備による土地の削平は著しく，旧地形をほとんどとどめない。ただし，今年度調査区が溶岩台地の最頂部からやや下った周縁部ということから，表土下の暗茶褐色土層の堆積は厚く，二次堆積である遺物包含層を形成している部分も一部ではみられた。それでも，表土を20～30cm剥ぎ取ると遺構の掘り込まれた黄褐色玄武岩風化礫層に達するのが大半で，遺構上面はかなり後世の影響を受けていることが容易に推測できる。

3　遺　　構

a　甕棺墓（ＳＴ）

調査区の各所に散在的にあり，群をなすものは少ない。11号～16号甕棺墓は遺跡の北端に位置し，平成10年度調査の２号～４号・10号甕棺墓と近接して，本遺跡の最高所である標高43m付近にまとまりをみせる。それ以外の17号～33号甕棺墓は10～20mの間隔をもって各所に広がり，墓域としてのまとまりはない。例外もあるが，基本的に２基を墓所の１単位となすところに特徴がある。標高は40.5～41.5m前後に占地する。個々の甕棺墓の主軸方位や埋置角度は一覧表にして掲載した。（表１）

11号甕棺墓（第22図ＳＴ11，図版５）

調査区の最北端に位置し，12号～14号甕棺墓と一群をなす。この一帯はかなり削平が著しかったとみえ，ピット等も極端に少ない。11号甕棺墓も大部分が削平を受け，下甕の胴～底部がかろうじて残存する程度である。ほぼ水平に近く埋置された甕棺内からは，副葬品等も確認できなかった。胴部下

位には穿孔が施されている。

12号甕棺墓（第22図ＳＴ12，図版６）

11号甕棺墓の西隣に位置し，削平により上甕と下甕の上半部を欠失する。遺存状態はよくない。埋置角度はややあり，墓壙は甕を据え置くのに必要最低限しか掘り込まれていない。

13号甕棺墓（第22図ＳＴ13，図版６）

11号甕棺墓の東隣に占地する。上部を完全に削平され，下甕の胴部～底部が遺存する。かろうじて上甕の一部とみられる破片が墓壙の掘り方に残っていた。これによると，口縁部を打ち欠いた上甕で下甕の口縁部を覆う，覆口式の構造をもつものと推測される。下甕の埋土上面に炭化物がみられたが，甕棺墓に伴うものかは判別し難い。穿孔は施されていないようである。

14号甕棺墓（第22図ＳＴ14，図版６）

13号甕棺墓の南に隣接し，11号・12号甕棺墓とも近接した位置関係にある。上甕と下甕の上半部を欠失し遺存状態はよくない。口縁部を打ち欠いた上甕の一部が下甕を覆うように残っており，覆口式であったことがわかる。粘土の目張りはみられない。下甕の底部付近に炭化物がみとめられるものの，人骨等の出土はなかった。墓壙は甕棺の形状に沿うように，隙間なく掘り込まれている。

15号甕棺墓（第22図ＳＴ15，図版６）

14号甕棺墓から５ｍほど南に離れた地点にある。上甕を全て欠失し，下甕のみ残存する。底部中央に穿孔を施す。出土遺物はない。主軸方位は14号甕棺とほぼ同じである。墓壙は甕胴部の形状と埋置角度を考慮してか，斜め方向に掘り込まれる。

16号甕棺墓（第22図ＳＴ16，図版６）

15号甕棺墓のすぐ東隣で，平成10年度調査の２号～４号・10号甕棺墓とも近接した場所に位置する。他と同様に上部を削平され，上甕の一部と下甕の胴部～底部が残存する。上甕は口縁部を打ち欠いたもので下甕を覆うように被せており，覆口式の構造をとる。粘土による目張りは施されていない。下甕の底に歯冠が残っていたが，炭化物やその他の遺物はみられなかった。墓壙は甕棺の湾曲に合わせてきっかり掘り込まれている。

17号甕棺墓（第22図ＳＴ17，図版６）

調査区のほぼ中央，標高41.5m付近に占地する。周囲はピット群で他に甕棺墓等の遺構は見当たらず，１基単独で所在し，これまでの甕棺墓群とは周囲の環境を異にする。上甕の一部を欠損するものの，総じて遺存状態は良好である。削平等の被害が最小限にとどまっているためであろうか。

当初，下棺の壺は口頸部を打ち欠いたものかと思われたが，内部より口縁部片と骨片が確認されたため，上甕で口縁部を覆った覆口式と判断した。上甕との接合部がずれているのは，削平時の衝撃で下棺の口頸部が折損したのではないかと考える。墓壙は斜めに掘り込まれ，本来の埋置角度はかなり大きかったのであろう。

18号甕棺墓（第22図ＳＴ18，図版６）

17号甕棺墓から西南西に８ｍ離れた地点に18号・19号甕棺墓は位置する。ピット群の周縁部にあた

り，標高は41.25m前後か。上甕と下甕口縁部は完全に削平され，下甕胴部～底部が残る。内部からは骨片が出土した。底部中央には穿孔が施される。墓壙は逆台形状を呈し，埋置角度は大きく直立に近い。埋甕のような埋置形態をとる。

19号甕棺墓（第22図ＳＴ19，図版６）

18号甕棺墓の東側に隣接する。削平を受けているわりには，比較的遺存状況は良好である。口頸部を打ち欠いた丹塗壺に上甕を被せる構造をなす。上甕の底部が壺の中に落ち込んでいるのは，削平時に混入したものであろう。打ち欠かれた壺の口頸部は，そのまま肩～胴部付近に置かれていた。口縁部が壺に接するよう向いているので，削平の影響を受けたと考えるには不自然である。何らかの祭祀行為に伴って，意識的に添えられたものか。壺の底部中央には穿孔が施され，骨片と炭化物が出土している。墓壙は斜め方向に掘り込まれているが，壺の胴下半～底部の形状ともぴったり合致しており，壺はほぼ原位置を保っているものと思われる。そうすれば,18号甕棺墓同様にほぼ直立埋置に近い状況が想定できよう。

20号甕棺墓（第23図ＳＴ20，図版７）

19号甕棺墓から東に19mほど離れた地点に20号・21号甕棺墓は位置し，標高は41.5m前後である。周囲には集石遺構である４号土壙や土器溜り等の遺構があり，ピット類も多い。20号甕棺墓は上部を完全に削平された状態で検出された。下甕の胴部～底部のみ遺存するが，残存部位で穿孔はみられない。墓壙は幾分斜め方向に掘り込まれ，下甕を据え置くのに周囲に石を配しているのが特徴的である。埋置角度は水平気味である。

21号甕棺墓（第23図ＳＴ21，図版７）

20号甕棺墓の東側に隣接する。上部を削平されたうえ，ピットの掘り込みによって破片の大半を欠失する。水平に埋置された？底部のみが残存し，上甕・下甕の区別はつかない。ここでは一応甕棺墓として扱うことにした。

22号甕棺墓（第23図ＳＴ22，図版７）

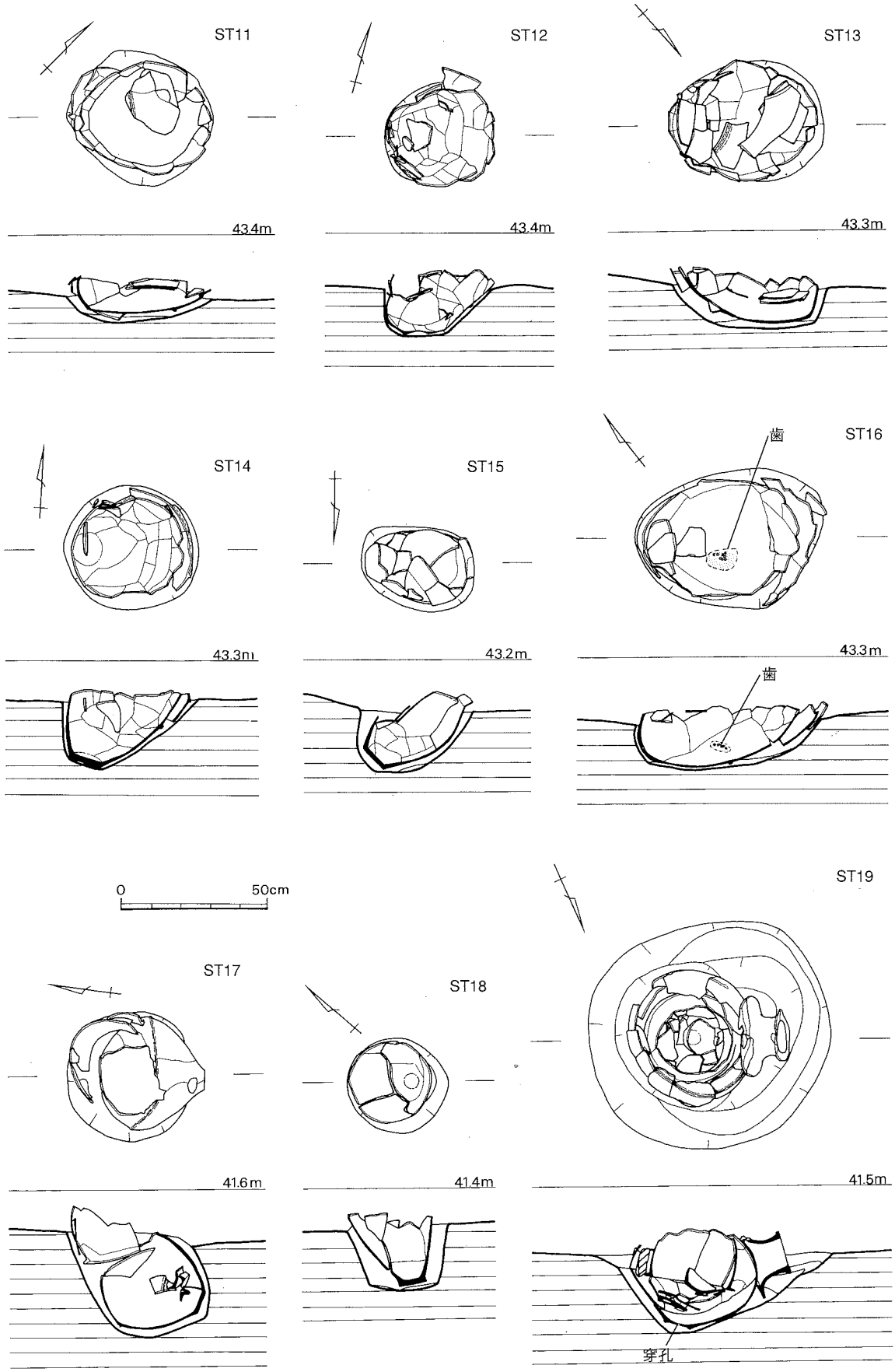
20号・21号甕棺墓から５ｍほど北西に位置する。21号甕棺墓と同様，かなり削平の影響を受けており，壺底部のみ残存する。底部中央に径1.5cmの穿孔があることから，下棺と判断できた。墓壙は底面の痕跡がうかがえる程度である。

23号甕棺墓（第23図ＳＴ23，図版７）

22号甕棺墓より北へ４ｍの位置に所在する。周囲には径２ｍほどの２号土壙・３号土壙があり，甕棺墓は他にない。一部を削平されているものの比較的遺存状況は良好で，甕を３個つなげた三連式の甕棺墓になっていることが判明した。下甕と底部を打ち欠いた上甕とは口縁部を合わせる接口式で，打ち欠いて底部のない上甕を覆うように別甕をさらに上から被せている。下甕の底部中央には穿孔が施される。墓壙は斜め方向に掘り込まれ，下甕を安置するのに口縁部の両脇に石が添えられている。

24号甕棺墓（第23図ＳＴ24，図版７）

調査区の南西端に位置する。周囲は削平が著しいのか，ピット等遺構は検出されていない。下甕の



第22図　甕棺墓実測図④（S＝1／20）

胴部～底部が遺存するにとどまる。出土状況や墓壙のあり方からすると，埋置角度は多少あったと考えられる。

25号甕棺墓（第23図ＳＴ25，図版７）

24号甕棺墓から８～10mほど北に位置し，標高は41m付近にあたる。畑の縁辺部にあたり，強く削平の影響を受けている。周囲は極端にピット等の検出遺構が少なく,25号・26号甕棺墓だけが近接してみられるにすぎない。25号甕棺墓は上甕が下甕の中に入り込むようにして検出された。上甕は口縁部が打ち欠かれ，胴部下半～底部は削平時に欠失したものか。下甕の残りはよく，胴部下位には穿孔が施される。内部には小児骨と歯冠がみられ，副葬品として管玉２個が出土した。墓壙は甕棺の形状に沿って斜めに掘り込まれ，埋置角度を大きくとる。

26号甕棺墓（第23図ＳＴ26，図版７）

25号甕棺墓の北側に隣接して築かれる。削平が著しく，上甕と下甕上半部を欠失する。下甕は底部中央に穿孔が施される。内部に幼児の頭蓋骨や歯冠がみられるなど遺存状態はよい。ただし副葬品等はなかった。墓壙は下甕の胴部形状に合わせて掘り込まれており，埋置角度はそれほど大きくはない。

27号甕棺墓（第23図ＳＴ27，図版８）

25号・26号甕棺墓より25mほど北西に離れた地点にあり，調査区の最西端にあたる。標高は40.5m付近で，今回発掘調査した甕棺墓では最も標高の低い地点に築かれた部類に属する。当初,27号甕棺墓のみが検出されていたが，その後周囲を精査するうちに30号甕棺墓も確認できた。

27号甕棺墓は上部を削平され，下甕は胴部下位～底部まで損壊を受けている。上甕の口縁部片は下甕の口縁部に接するような状態で検出されたことから，接口式の構造をとっていたことがかろうじてわかる。上甕の底部は下甕内に落ち込んでいた。下甕底部内面には炭化物が少量みられたが，骨片や副葬品はなかった。墓壙は逆台形状に掘り込まれ，下甕底部が原位置を保っているとすると，ある程度埋置角度をとっていたと思われる。

28号甕棺墓（第23図ＳＴ28，図版８）

調査区の中央やや東寄りに位置する。隣接して箱式石棺墓があり，南東５～６ｍ先には29号甕棺墓が築かれている。墓地が確認できるのはこの一帯だけで，最も近い墓地の一群でも18mほど離れた22号・23号甕棺墓しかない。周囲は表土下20cmで玄武岩の露頭がみられ，遺物包含層はなく，遺構のほとんどは軟質の岩盤を掘り込んでつくられている。

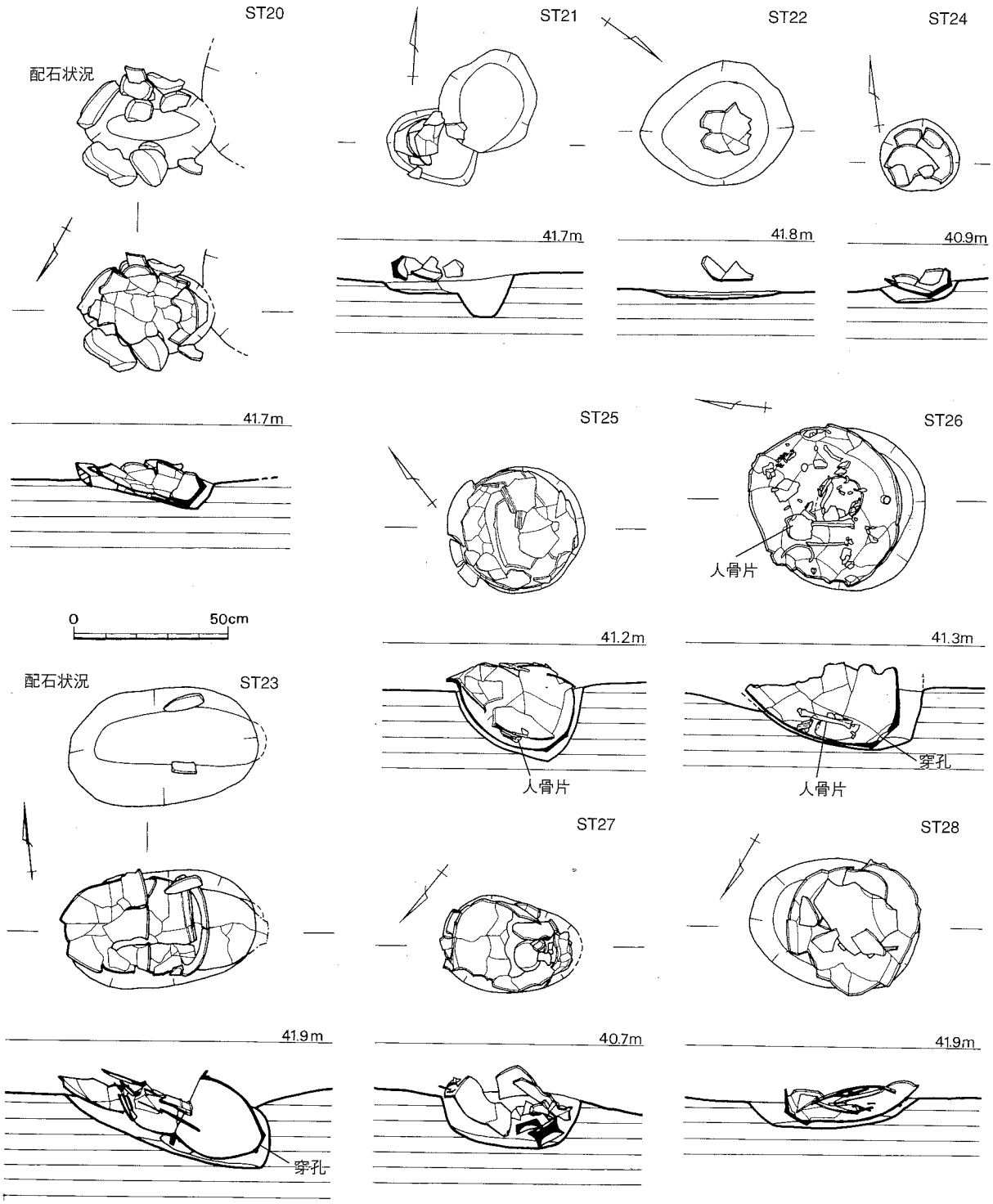
28号甕棺墓も他の甕棺墓と同じく，大半を削平によって欠失する。下甕の胴部～底部が残存するが，人骨や副葬品等はみられない。墓壙は下甕胴部の湾曲に合わせて掘り込まれているようである。埋置角度はそれほど大きくない。

29号甕棺墓（第25図ＳＴ29，図版８）

大部分が削平により欠失し，遺存するのは下甕の底部片しかない。底部中央に穿孔がみられるほか不明。墓壙も浅く，埋置角度も小さいと思われる。

30号甕棺墓（第25図ＳＴ30，図版８）

前述したように，27号甕棺墓の精査時に南西側に隣接してみつかった。削平の影響をあまり受けず，遺存状態は良い。上甕の代わりに石蓋をもつ。石蓋は厚みのある平石で，丹塗壺の口縁部を完全にふさいでいた。ただし，粘土等による目張りは施されていない。石の重みで壺の上半部はひしゃげていたものの，底部付近は原位置を保っている。壺の出土状況から判断して，墓壙は方形に近く掘り込まれていたものと思われる。底部中央には穿孔がうかがえた。



第23図　甕棺墓実測図⑤（S＝1／20）

31号甕棺墓（第25図ＳＴ31，図版８）

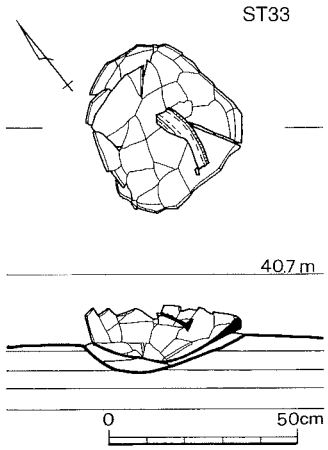
31号・32号・33号甕棺墓は調査区の最東端に位置し，28号・29号甕棺墓からも25m以上離れた場所にある。周囲に遺構はほとんどみられず，この辺りが遺跡の東限かと思われる。標高は40.5～40.75mを測る。玄武岩の露頭が著しく，表土も薄いため，耕作時の影響はかなり遺構面に及んでいる。31号甕棺墓は上甕と下甕口縁部を欠失する。下甕の胴部下位には穿孔がみられた。墓壙は下甕の形状に合わせて斜め方向に掘り込まれており，埋置角度をとっている。

32号甕棺墓（第25図ＳＴ32，図版８）

31号甕棺墓の北隣にあり，やはり下甕胴部～底部しか残存していない。これは埋置角度が大きく，ほぼ直立埋置に近いことにも関係があろう。18号・19号甕棺墓のように，埋甕的な埋置形態が考えられる。下甕底部中央には穿孔が施されるほかは，骨片や炭化物はなかった。別に壷の胴部片が出土していることから，上棺は壷であった可能性がある。

33号甕棺墓（第24図ＳＴ33，図版８）

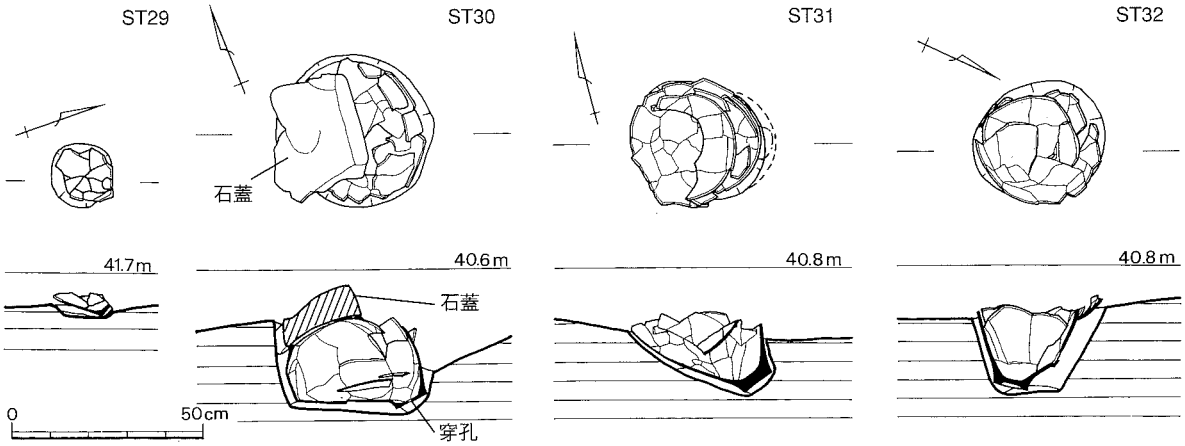
31号甕棺墓から南西２mの地点に位置する。上部を削平され，下棺の壺胴部～底部が遺存する。これとは別の甕の口縁部片が伴出しており，上棺は甕を用いてあったのであろう。墓壙は壺の胴部形状に沿って掘り込まれ，埋置角度はほぼ水平に近い。穿孔等はみられなかった。



第24図　甕棺墓実測図⑥（Ｓ＝１／20）

ｂ　箱式石棺墓（ＳＡ１）（第26図，図版３）

甕棺墓が主体をなす本遺跡では唯一の石棺墓で，28号甕棺墓の南西に隣接して位置する。棺材はほとんど抜き取られており，石材の支えかもしくは剥離したと思われる玄武岩質の板状石のみが痕跡をとどめる。棺床面までの深さはわずか５cmしかなかった。南東小口部分の棺床面が浅く掘り窪められていることから，こちらが頭位方向かと思われる。墓壙の掘り方から石棺の規模を推定すると，主軸長が145cm，



第25図　甕棺墓実測図⑦（Ｓ＝１／20）

北西小口幅が55cm，南東小口幅が45cmか。東西の側壁には厚さ７cm前後の板状石を２～３枚使用していたものと推測する。副葬品はなく，覆土中に弥生中期の土器がみられる程度で，正確な築造時期は不明である。

c　２号住居跡（ＳＣ２）（第27図，図版３，図版９）

調査区の南端に位置し，丘陵頂部にある１号住居跡からは50m以上離れている。周囲にはピット等遺構が少なく，緩やかに傾斜する南西方向にかけて全体的に削平を受けていることがわかる。住居跡は南北の長辺が6.5～6.6m，東西の短辺が5.4～5.5mを測り，平面プランは不整形な長方形をなす。四辺はそれぞれ平行ではなく，いびつな台形状というべきか。

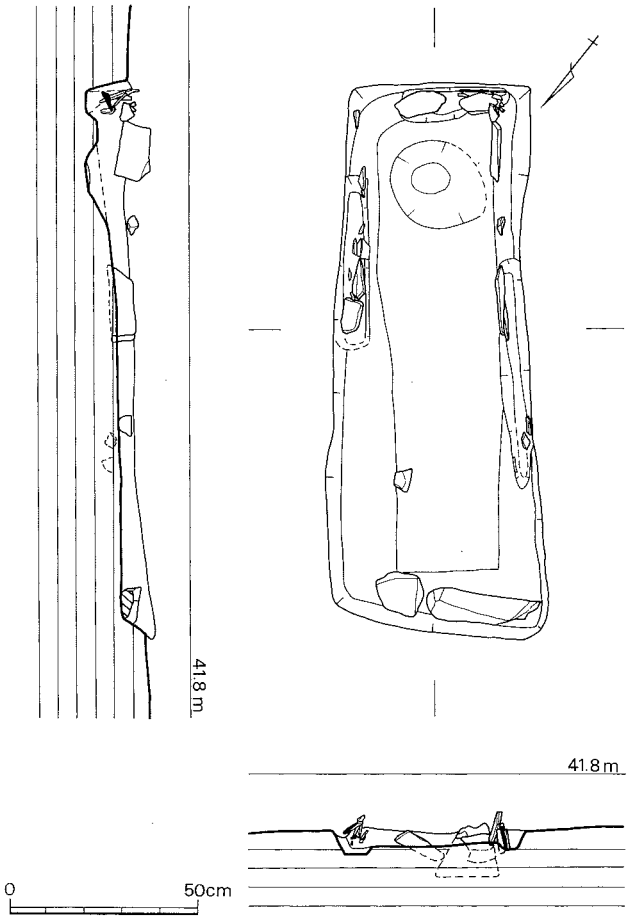
壁面は最も残りのよい北東側で25cmほど遺存していたが，削平の著しい南～南西にかけてはほとんど残っていない。ベット状遺構や貼床についても確認できなかった。比較的残りのよい北半部では幅10cm，深さ５cmの壁周溝が数条あり，複数回の建て替えがあったことをうかがわせる。周溝が途切れているのは，これより南西側の部分で削平が床面まで及んだためと考えられる。

炉跡については，住居跡の中央に長径50～60cmのピットがあるものの，炭化物や焼土を伴わないことから判断できなかった。住居跡床面の数ヶ所でスポット的に炭化物や焼土がみられたが，何を意味するものかはわからなかった。

住居跡内のピットは深さが20cmにも満たないものが多く，確実に柱穴とよべるものは少ない。主柱穴も深くしっかりしたものがないため，今ひとつ判然としない。

住居跡の南東壁中央にはやや大形のピットがある。石皿や磨石等の遺物が集中してみられたことから，屋内土壙として用いられたのであろう。土壙は長径80cm，短径70cmの楕円形を呈す。また，住居跡の南隅にも石皿や磨石等の大形の石材がみられ，前述の屋内土壙と同様な使われ方がなされていたものと思われる。

この他，住居跡東壁付近の床面直上では古墳時代初頭の土師器類がまとまって出土した。住居の廃絶時期もこのころに求められよう。住居跡内には弥生中～後期の土器類も出土しているが，いずれも覆土中からで，周辺地形からみて自然流入の可能性は

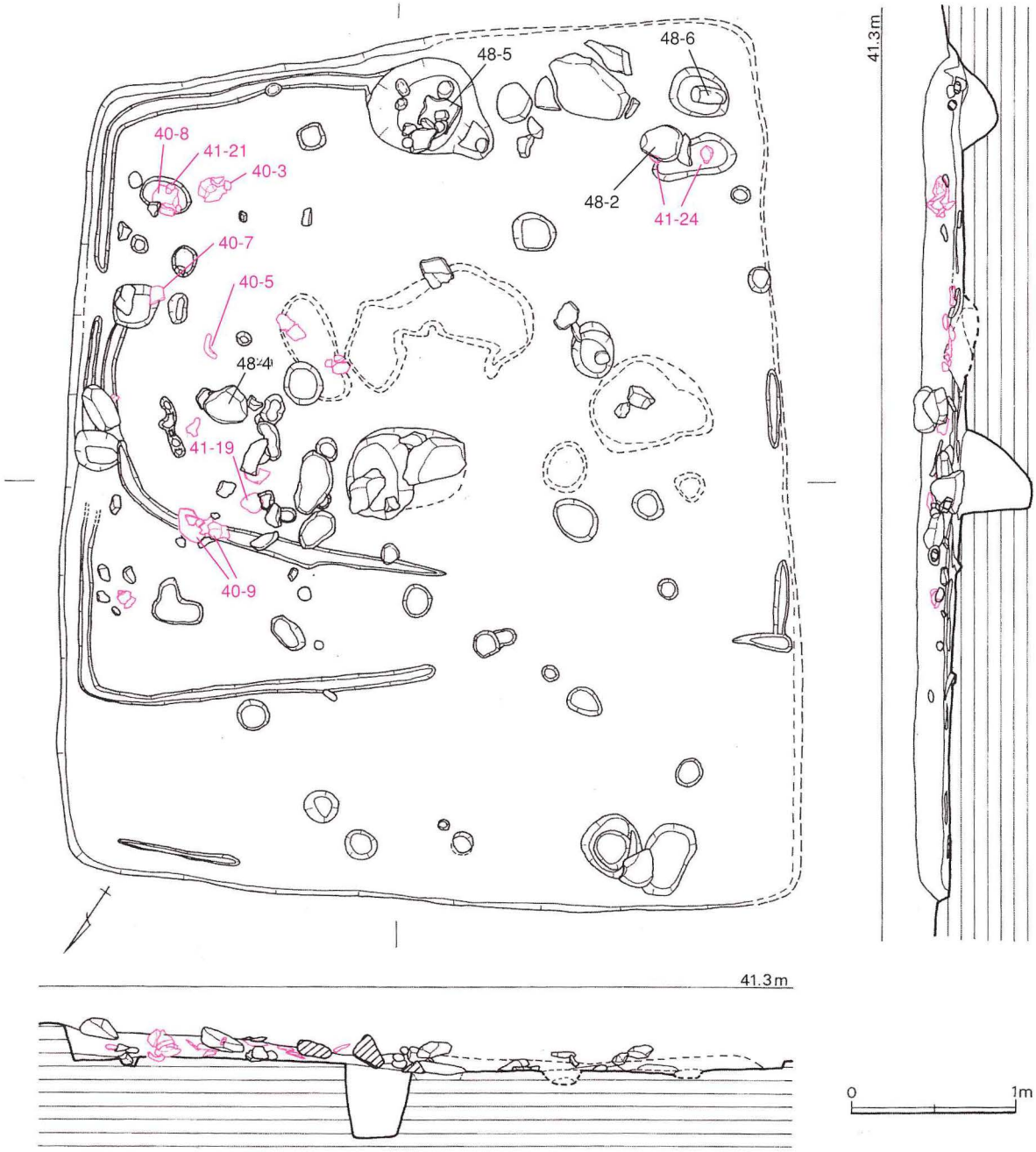


第26図　箱式石棺墓実測図（Ｓ＝１／20）

否定できない。本遺跡の成立時期から考えても，築造は弥生中期以降とするのが妥当であろう。

d　２号土壙（ＳＫ２）（第28図，図版３）

調査区のほぼ中央に位置し，周囲には９号甕棺墓や23号甕棺墓がある。平面形は不整な楕円形を呈す。長軸2.1m，短軸1.65m，深さ50cmを測る。逆台形状に掘り込まれ，中央付近はややくぼむ。遺物は底面から10cmほど上のレベルでまとまって出土した。弥生中期の須玖式土器が中心で，他に円礫や敲石等の石器類も混在する。中央から南東部にかけて大きな礫石が数個みられたが，意識的に配置



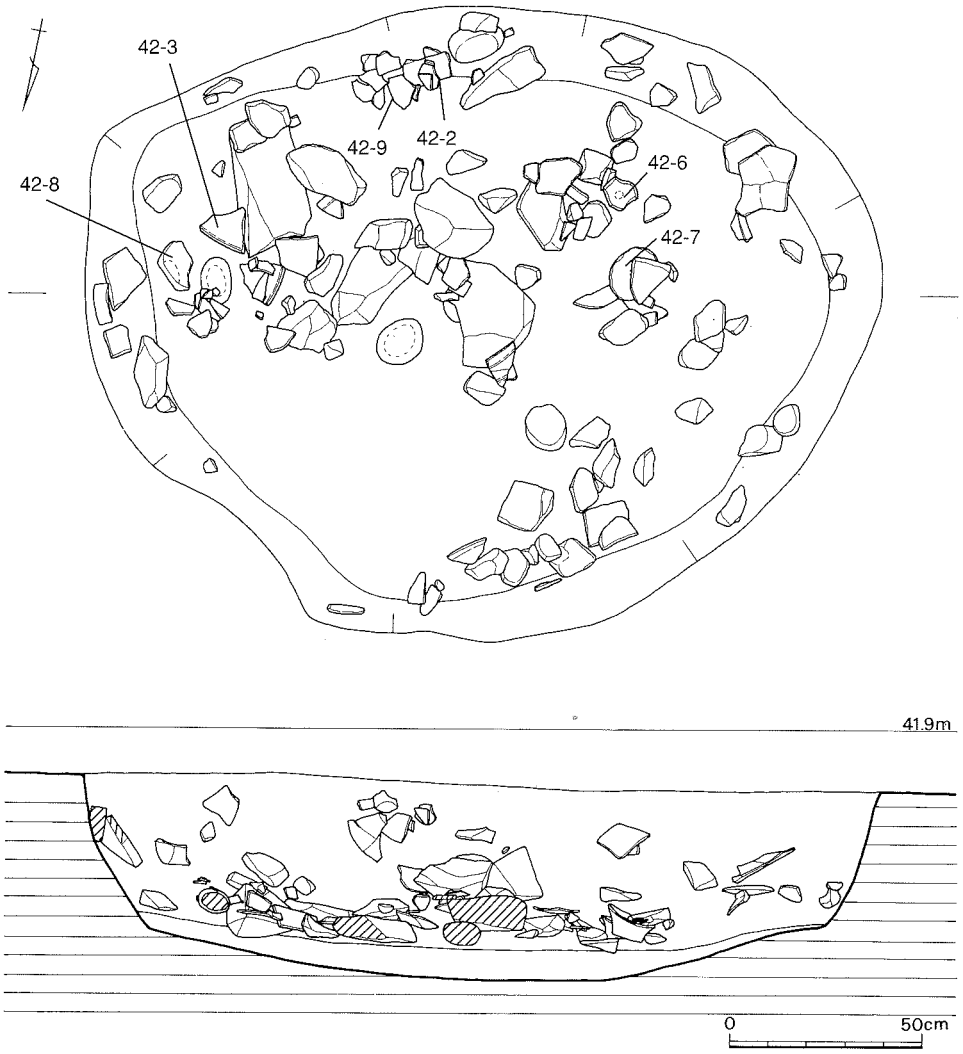
第27図　２号住居跡実測図（Ｓ＝１／40）

※図中の番号は
挿図番号ー遺物番号を表す

したような形跡はない。遺物は投棄されたような状態で出土していることから，少量の骨や炭化物の混入はあるものの，甕棺墓に伴う祭祀土壙とは考えにくい。

e　３号土壙（ＳＫ３）（第29図，図版３）

２号土壙に隣接して３号土壙がある。平面プランはほぼ円形で，直径は２ｍ前後。深さは20～25cmを測り，２号土壙よりも浅い。逆台形状に掘り込まれた底面はほぼフラットになる。土壙内のピットは後から掘り込まれたものである。出土遺物は２号土壙に比べ極端に少ない。底面直上で敲石と平石がみられる他は，覆土中に弥生中期の土器片がみられる程度である。骨片や牙類，炭化物の出土はあるものの，遺構に伴うものかは不明。２号・３号土壙の新旧関係は問えないが，同じような性格を有する一連のものとして検討する必要があるかもしれない。



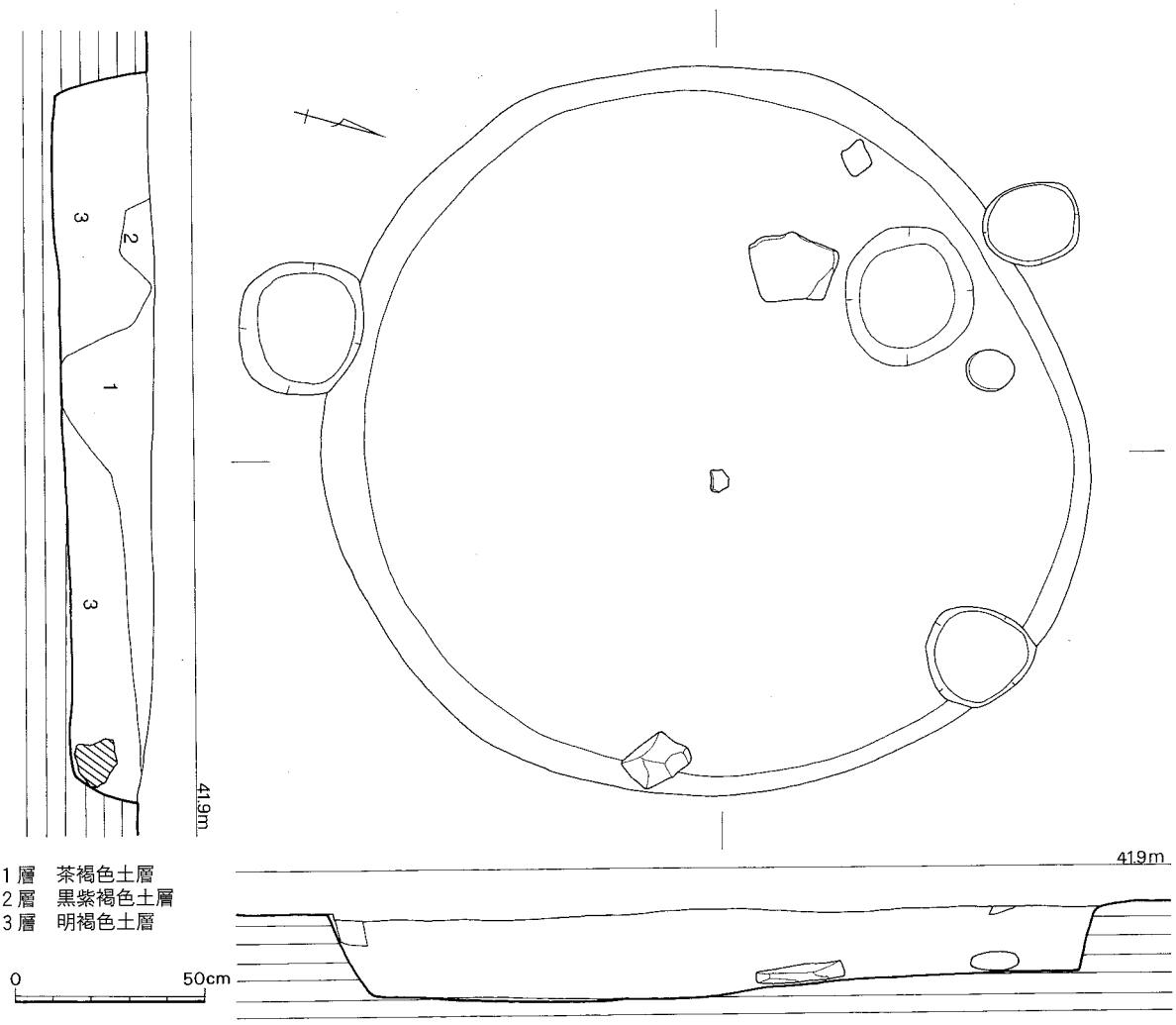
第28図　２号土壙実測図（Ｓ＝１／20）　※図中の番号は挿図番号一遺物番号を表す

f　4号土壙（ＳＫ４）（第30図，図版３）

２号・３号土壙より14～15m南側に４号土壙がある。平面形は３号同様に円形プランで，直径は2.4～2.5mを測る。深さは10～15cmと他の土壙に比してかなり浅く，削平の度合いによるものか判然としない。底面はほぼ平坦で，その直上付近から多数の礫に混在して少量の土器片が出土した。遺物のほとんどは弥生中期に属する。圧倒的に礫の量が多く，他とは明らかに性格の異なる不明集石遺構とすべきか。土壙内のピットは後から掘り込まれたものである。

g　5号土壙（ＳＫ５）（第31図，図版３）

４号土壙から26～27m東側に位置する。南西のピットを切って５号土壙が掘り込まれる。平面形は円形を呈し，直径は2.1m，深さは35～40cmを測る。断面は凸レンズ状で，中央付近が周囲よりややくぼむ。この部分には大小の礫石の集中がみられ，遺物は投げ込まれたような状態で出土している。土器は弥生中期の須玖式が中心で，敲石や円礫，骨片や炭化物も混在する。遺物の出土状況等，2号土壙によく似ており，廃棄土壙かと思われる。



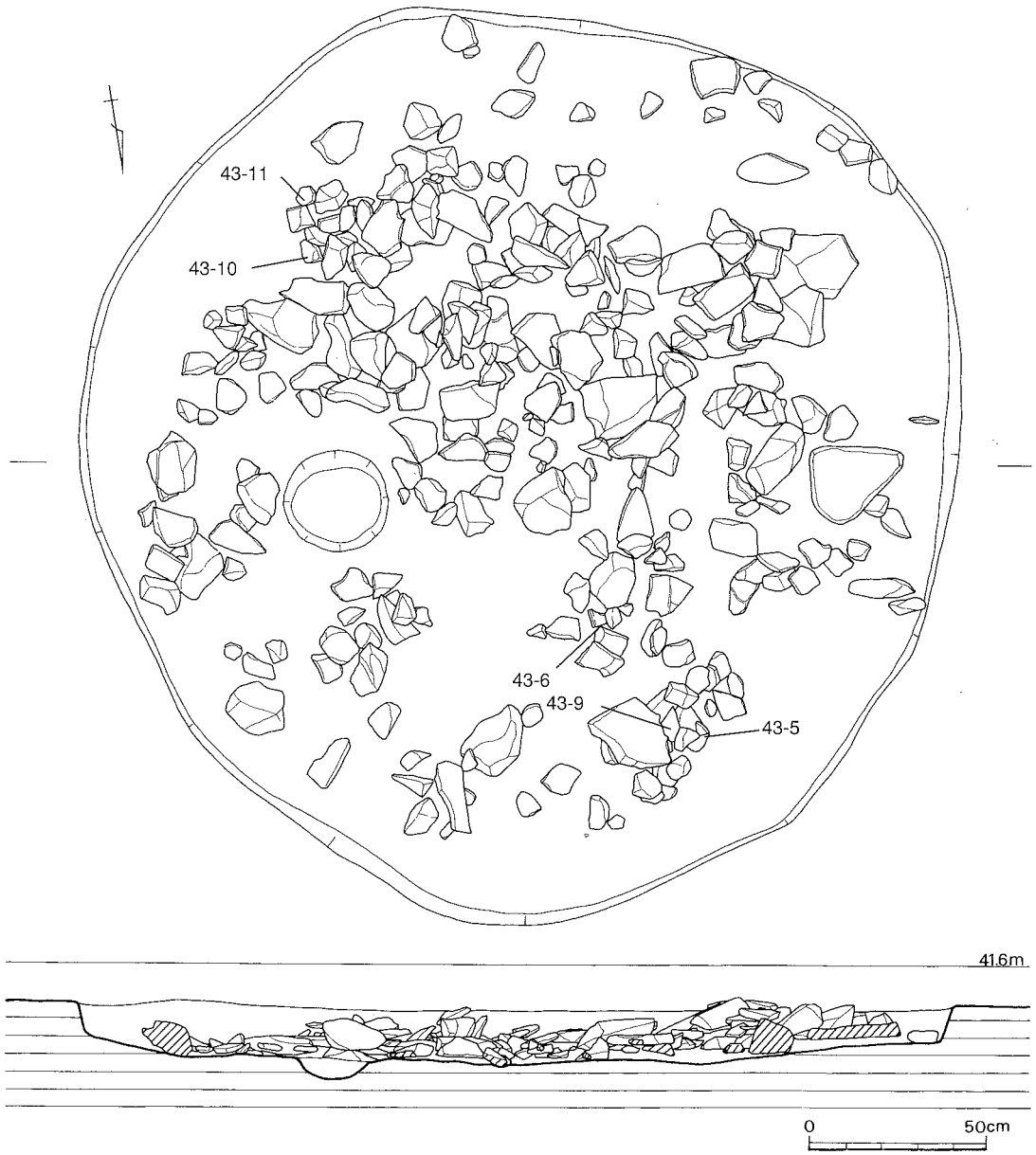
第29図　３号土壙実測図（Ｓ＝１／20）

h　土器溜り（ＳＶ１）（第32図）

２号・３号土壙と２号住居跡の北片を結ぶラインには，地形図には表れない僅かなくぼ地が形成されている。土器溜りはちょうどこの部分の中間に位置し，2.5m×2.1mの範囲に遺物が散見された。台石や敲石・磨石等の石器に混在して，弥生中期の土器が出土するほか，ナイフ形石器や台形石器，柱状片刃石斧など，明らかな流込みの遺物もみられる。台石や礫石器の出土からすると，何らかの作業場として利用されていたことも考えられる。

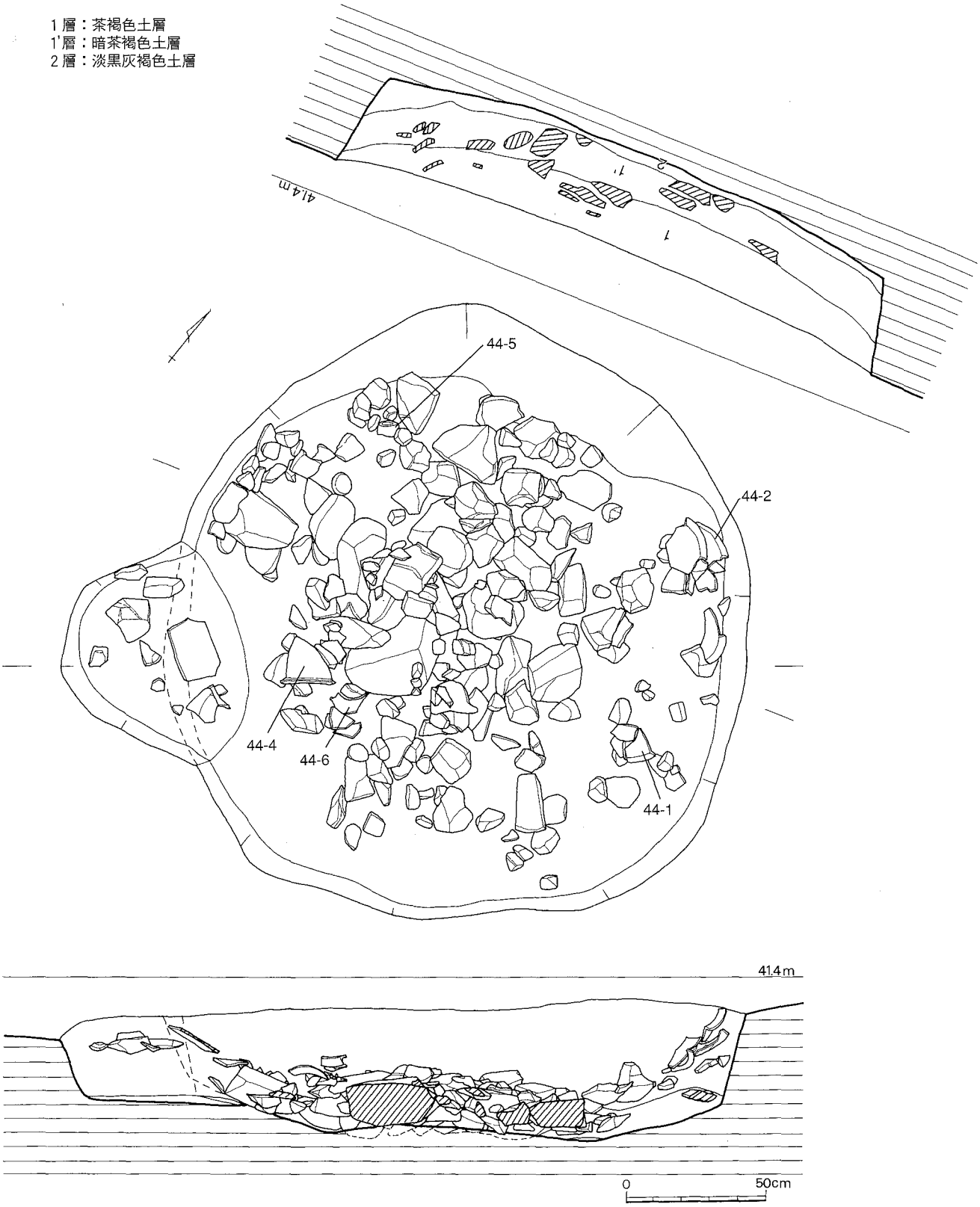
i　不明石組ピット（第33図，図版２）

Ｈ８区とＨ９区には石を組んだと思われる不明な大型ピットがそれぞれある。



第30図　４号土壙実測図（Ｓ＝１／20）　※図中の番号は挿図番号一遺物番号を表す

1層：茶褐色土層
1'層：暗茶褐色土層
2層：淡黒灰褐色土層



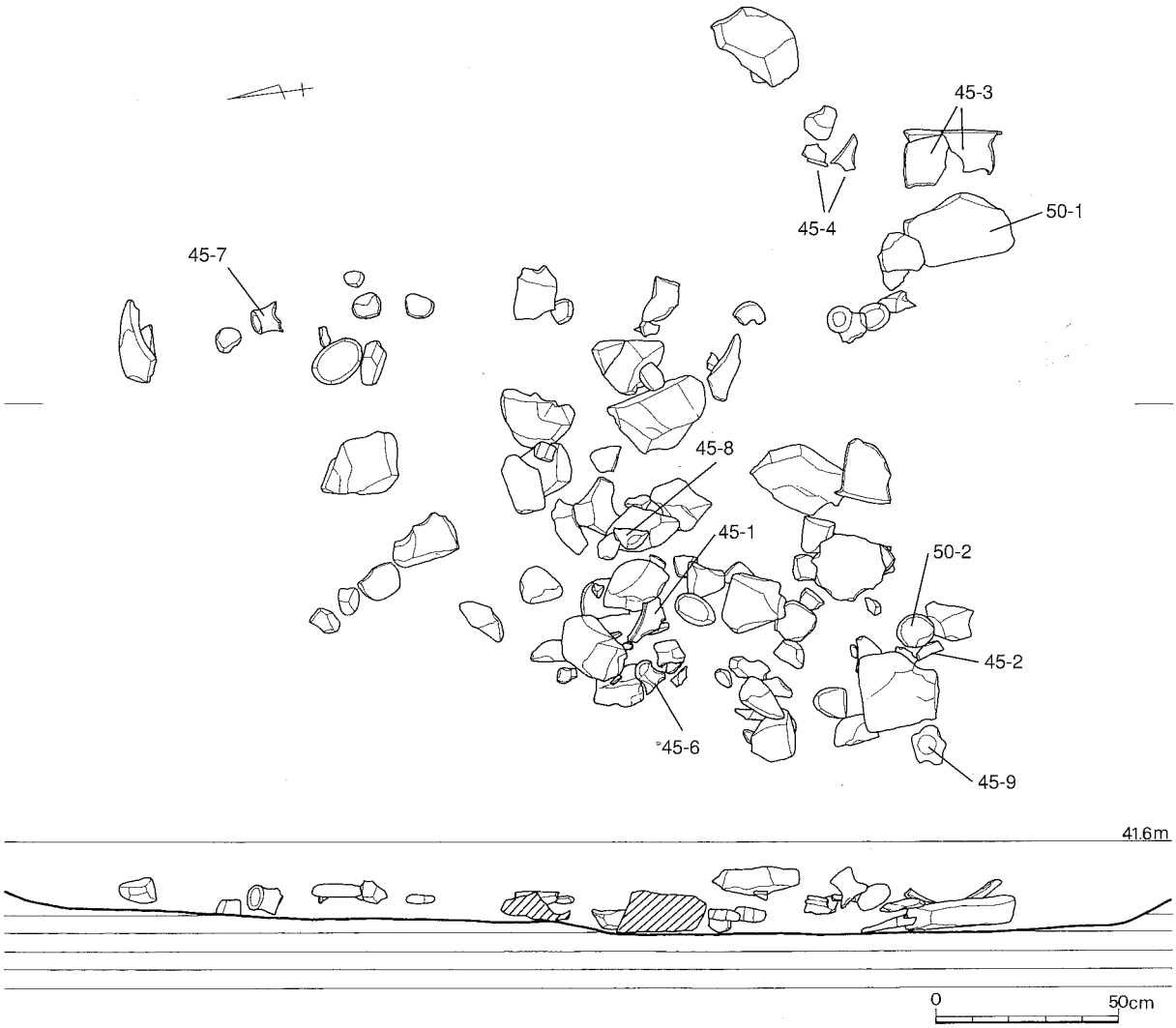
第31図　5号土壙実測図（S＝1／20）

※図中の番号は
挿図番号ー遺物番号を表す

Ｈ８区Ｐ６は直径が1.25mの不整円形を呈し，深さは35cmを測る。逆台形状に掘り込まれたピットの底面はゆるく傾斜する。石はその底面に角礫の長辺を内側にして円形に配してあり，一部は二段に積み重ねる。石で囲った内側には直径25～35cmのスペースをつくり出す。覆土より弥生中期の土器片や丹塗土器が出土した。柱のようなものを石で支えるような施設かと推測される。

Ｈ９区Ｐ14も直径が1.1m前後の不整円形で，三段掘りになっている。深さは最深部で55cmを測る。石は二段目のピットの壁面に沿うように置かれ，その内側にはさらに直径20～30cmのピットが施される。上部の石も中央のピットを取り巻くように配している。覆土からは弥生中期の遺物が出土した。Ｈ８区Ｐ６同様，柱の周りに石を詰めて固定していたかのような感がある。

Ｈ８区Ｐ６とＨ９区Ｐ14の中心間の距離は2.85mを測る。ただし，これらに対応するようなピットや施設が付近にはなく，どのような性格の遺構であるのか判然としない。



第32図　土器溜り実測図（Ｓ＝１／20）

※図中の番号は
挿図番号ー遺物番号を表す

j　Ｇ７区大型ピット（第34図，図版２）

Ｇ７区にはＰ10・Ｐ12・Ｐ33の３基の大型ピットがある。

Ｐ10は直径1.15mの円形で，その中に直径27cmの柱痕をもつ。底面は柱痕部のみさらに一段掘り下げており，最深部までは85cmを測る。覆土からはく字口縁部と丹塗土器片などが出土した。

Ｐ12は直径0.7～0.75mの円形ピットで，深さ55cmを測る。柱痕はみられない。覆土から弥生中期の土器片が出土している。

Ｐ33はＰ10とほぼ似通っている。平面が直径1.3mの円形を呈し，中央に直径35cmの柱痕を有する。柱痕部の底面が一段掘り下げられ，深さは60cmを測る。覆土からは弥生中期から後期にかけての土器類や高杯脚部が出土した。

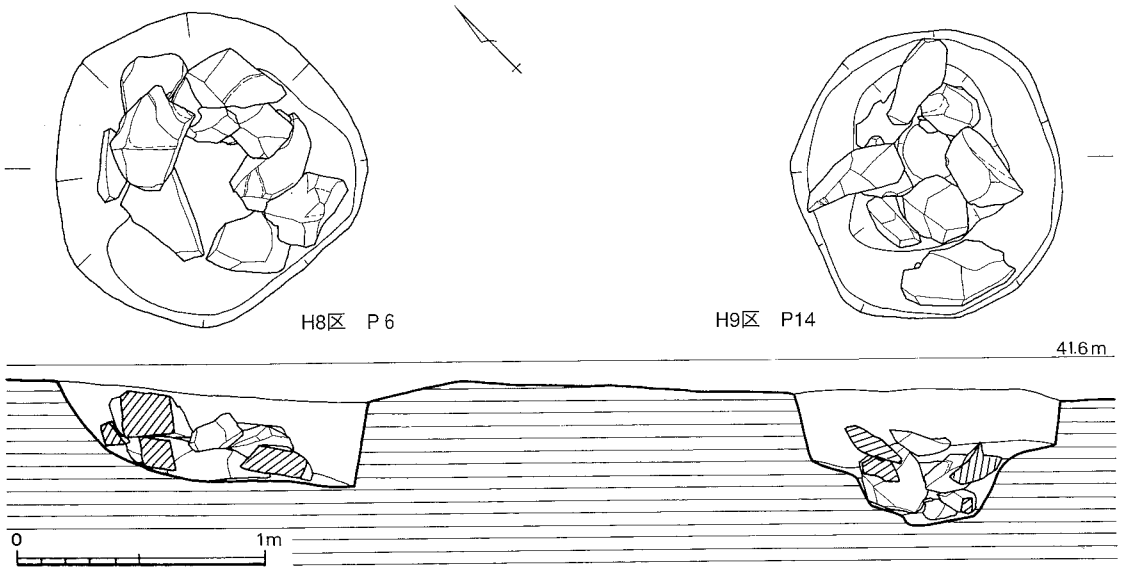
Ｐ10とＰ33の柱間は5.4m前後あり，距離がやや離れすぎの感がある。前述の不明石組ピット同様，これらに対応するピットは他になく，建物遺構とは考えにくい。ピットの規模が小さく柱痕を持たないＰ12はあるが，除外して考えたほうがよさそうである。今のところ性格不明遺構としておく。

k　その他の遺構（第35図）

i　ＳＸ１（第35図ＳＸ1，図版３）

ＳＸ１は31号・32号・33号甕棺墓に近接した場所にある土壙墓である。検出時にはすでに骨が露出していたものの，明確な掘り方がなかったため土壙墓との認定ができなかった。よって墓壙規模は推定値であるが，長さ1.35m，幅1.15mを測る。

調査の結果，頭位を北西に向けた人骨が仰臥屈葬で葬られていたことが判明した。人骨の右脇腹付近に「まさご石」と称される円礫が供えられる以外，伴出遺物はない。土壙墓の時期については，人骨の遺存状態がよすぎるという疑問は残るが，周囲の甕棺墓から判断して弥生中期中頃から後半ぐらいか。



第33図　不明石組みピット実測図（Ｓ＝１／30）

ii　Ｄ３区Ｐ21（第35図Ｄ３区Ｐ２１）

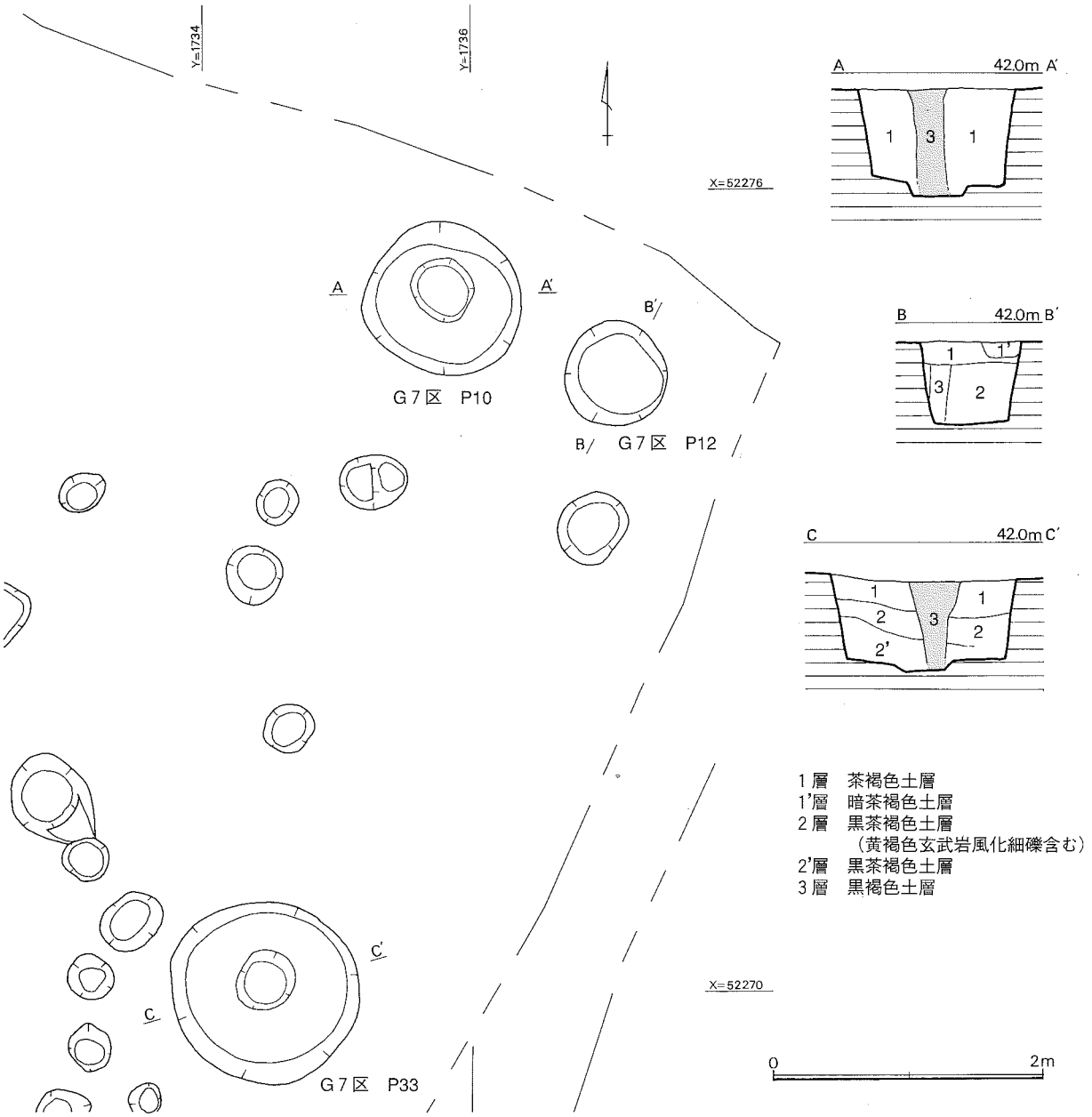
長さ83cm，幅58cmのすり鉢状をなすピットで，上部はかなり削平を受けている。覆土からは壷の底部片と甕の口縁部片等が出土したが，土器を埋置した形跡はうかがえなかった。

iii　Ｈ10区Ｐ５（第35図Ｈ10区Ｐ５）

76cm×56cmの不整方形をなすピットで，内部に石皿が据え置かれていた。石皿は２枚の平石の上にきちんとのせられており，他に出土遺物がないことから特殊遺構と考える。

iv　Ｄ４区Ｐ１（第35図Ｄ４区Ｐ１）

直径65cm前後のほぼ円形を呈するピットである。二段掘りになっており，深さは20cmを測る。平たい礫石と獣骨が検出され，覆土に弥生中期の丹塗土器が含まれていたことから着目した。周囲には他

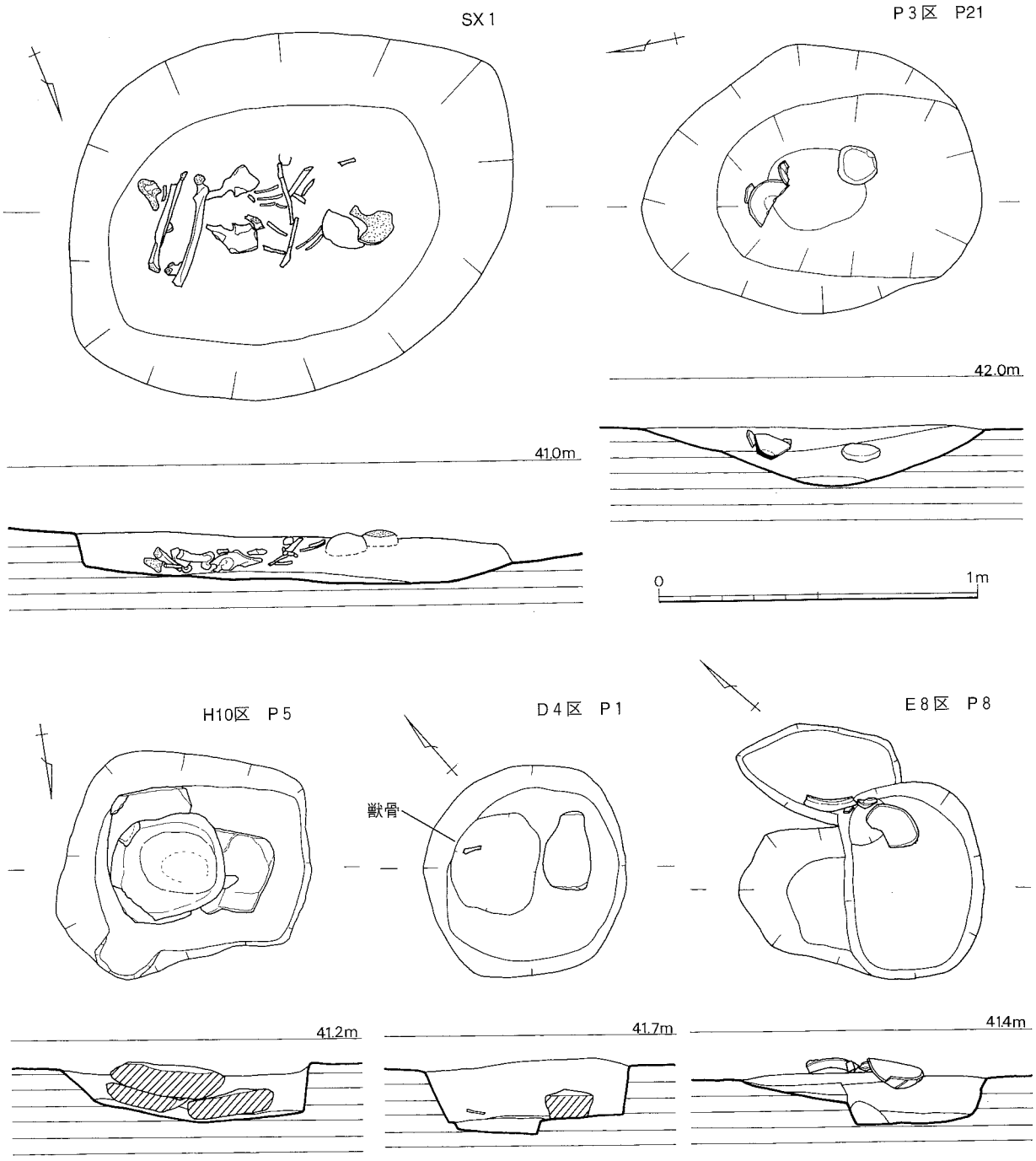


第34図　Ｇ７区大型ピット実測図（Ｓ＝１／50）

にも直径80cm～90cmのしっかりした円形ピットが規則的に３基並んでおり，これらを掘立柱建物跡と仮定するならば，１間×１間の桁行4.0m，梁行1.8mを測る。

v　Ｅ８区Ｐ８（第35図Ｅ８区Ｐ８）

19号甕棺墓に隣接した場所にある。ピットから浮いた状態で，弥生中期の丹塗壷胴部片と甕の口縁部片が出土した。ただし，複数のピットが切り合い関係にあり，どの遺構に伴うものかは紛らわしい。焼土・炭化物・骨類はみられなかったが，埋葬施設に近接することから祭祀遺構と判断した。



第35図　その他の遺構（S＝1／20）

4　遺　　物（第36図～第54図，図版９～図版16）

a　土器（第36図～第47図，図版９～図版15）

i　甕棺（第36図，第37図，図版12～図版15）

11号甕棺（第36図ＳＴ11，図版12）

下甕の胴底部に加え，口縁部片が出土している。同一個体と思われる。口縁部は大きく外反し，面取りした端部を上下につまみ出す。特に上方にのびた端部は直立し，短い複合口縁のようになる。胴部は明瞭な張り出しをもたないまま長胴化し，凸レンズ状の底部に至る。胴部下位には刻目を施したコ字形突帯が１条巡り，その下方に内側から打ち欠いた穿孔を有する。甕棺の時期は底部の形状から橋口編年のＫＶｃ期前後，弥生後期後半頃と考える。

12号甕棺（第36図ＳＴ12，図版12）

下甕の下半部のみ遺存する。11号甕棺同様，長胴化した胴部に不安定な平底がつく。胴部のやや下位に形骸化したM字突帯ないし幅広の低い突帯を施す。突帯の内面には黒いタール状のものが付着していた。胎土に金ウンモが目立ち，器壁もこの大きさにしては薄く仕上がる。橋口編年のＫＶ期，弥生後期中頃に相当するか。

13号甕棺（第36図ＳＴ13，図版12）

下甕の口縁部を欠失するものの頸部はしまり，胴部との境に粗い刻目のついた三角突帯を巡らす。胴部は最大径をやや上位に有し，全体形は卵形を呈す。胴部下位にも粗い刻目のコ字突帯が下向きに施される。底部は裾部の稜がほとんど失われた凸レンズ状をなす。胴部の特徴から後期前半の時期が想定されようが，底部形状を考慮して後期中頃以降のものと判断する。

14号甕棺（第36図ＳＴ14，図版12）

上甕は胴部片のみ遺存した。刻目を施したコ字突帯が巡る。

下甕は胴上半部を欠失する。全体形はうかがい知れないが，胴部中位付近に最大径をもつ卵形をなすものと思われる。刻目のないコ字状突帯は胴部下位に貼付される。底部は凸レンズ状を呈し，外中央には穿孔ではなく径1.8㎜ほどの円形くぼみが施される。内面胴部下位～底部付近には黒いタール状のものが付着する。胎土には金ウンモが顕著に見られる。時期は13号甕棺と同じかやや古い，弥生後期前半～中頃であろうか。

15号甕棺（第36図ＳＴ15，図版13）

下甕は直線的に立ち上がるく字状口縁をもつ。口縁端部は面をなし，内側の稜はやや不明瞭である。胴部は張り出し，最大径は上位にある。底部は平底で，中央には内側から穿孔が施される。弥生後期前半に比定されよう。

16号甕棺（第36図ＳＴ16，図版13）

上甕は破片のため，下甕のみを掲載した。口縁部を欠失するが，打ち欠きによるものか削平によるものか判別できなかった。胴部は丸味を帯びた卵形をなす。最大径は中～上位にあり，そのやや下に刻目を施したコ字状突帯が下向きにつく。上位にも別の突帯を貼付していた痕跡がうかがえた。底部

は凸レンズ状を呈する。橋口編年のＫＶｃ期前後が考えられ，後期後半期のものであろう。

17号甕棺（第36図ＳＴ17，図版13）

上甕は逆Ｌ字状の口縁部をもち，上面は平坦かやや内傾する。口縁下には鈍い三角突帯を１条巡らせ，胴部はあまり張らずに底部へ向かう。胴部中位付近には楕円形の穿孔がみられる。胎土に金ウンモを含み，器壁も薄く仕上がる。

下棺は広口壷で，比較的残りは良い。鋤先状を呈する口縁部は内側への突出が小さく，肥厚した平坦口縁に近い。短い口頸部はつけねで締まり，そのまま上方にのびて開く。なで肩の胴部は最大径がやや上位にあり，シャープな三角突帯を１条巡らす。赤色顔料の塗彩は口頸部内外面と胴部中位にみられる。中期前半～中頃の時期が考えられよう。

18号甕棺（第36図ＳＴ18，図版13）

下甕の口縁部を欠失する。胴部はあまり張らない砲弾形を呈し，底部付近でややくびれて平底の底部がつく。底部中央には内側から楕円形の穿孔が施される。胎土には金ウンモを含む。甕棺の時期は中期中頃か。

19号甕棺（第37図ＳＴ19，図版13）

上甕はやや内傾する逆Ｌ字状口縁を有し，内側へも鋭く突出する。口縁部下は強いヨコナデで鈍い稜がついたようにみえる。胴部はあまり張らないで平底の底部にいたる。胎土は精良なもので，金ウンモの混入が目立つ。内面は丁寧なナデ調整が施される。器壁が薄く，胴部下位～底部にかけては剥落する部分もみられた。

下棺は発達した鋤先状口縁をもつ壷で，端部はやや垂れ気味となる。口頸部はくびれを有し，直上方向にのびた後に大きく外反する。胴部とのつけねにはシャープな三角突帯をもつ。扁球形の胴部は最大径が中位にあり，しっかりとしたつくりのＭ字突帯を２条巡らせる。底部付近でふたたび締まり，平底の中央には内側から穿孔を行う。つくりは非常に丁寧でしっかりしており，赤色顔料は外面全体に施されている。時期的には弥生中期中頃～後半のものであろう。

20号甕棺（第37図ＳＴ20，図版13）

下甕は口縁部を欠失し，胴部以下が残る。胴部はほとんど張り出さないですぼまる。底部付近のくびれは弱く，平底ないし浅い上げ底気味の底部がつく。中期中頃～後半のものか。

21号甕棺（第37図ＳＴ21，図版14）

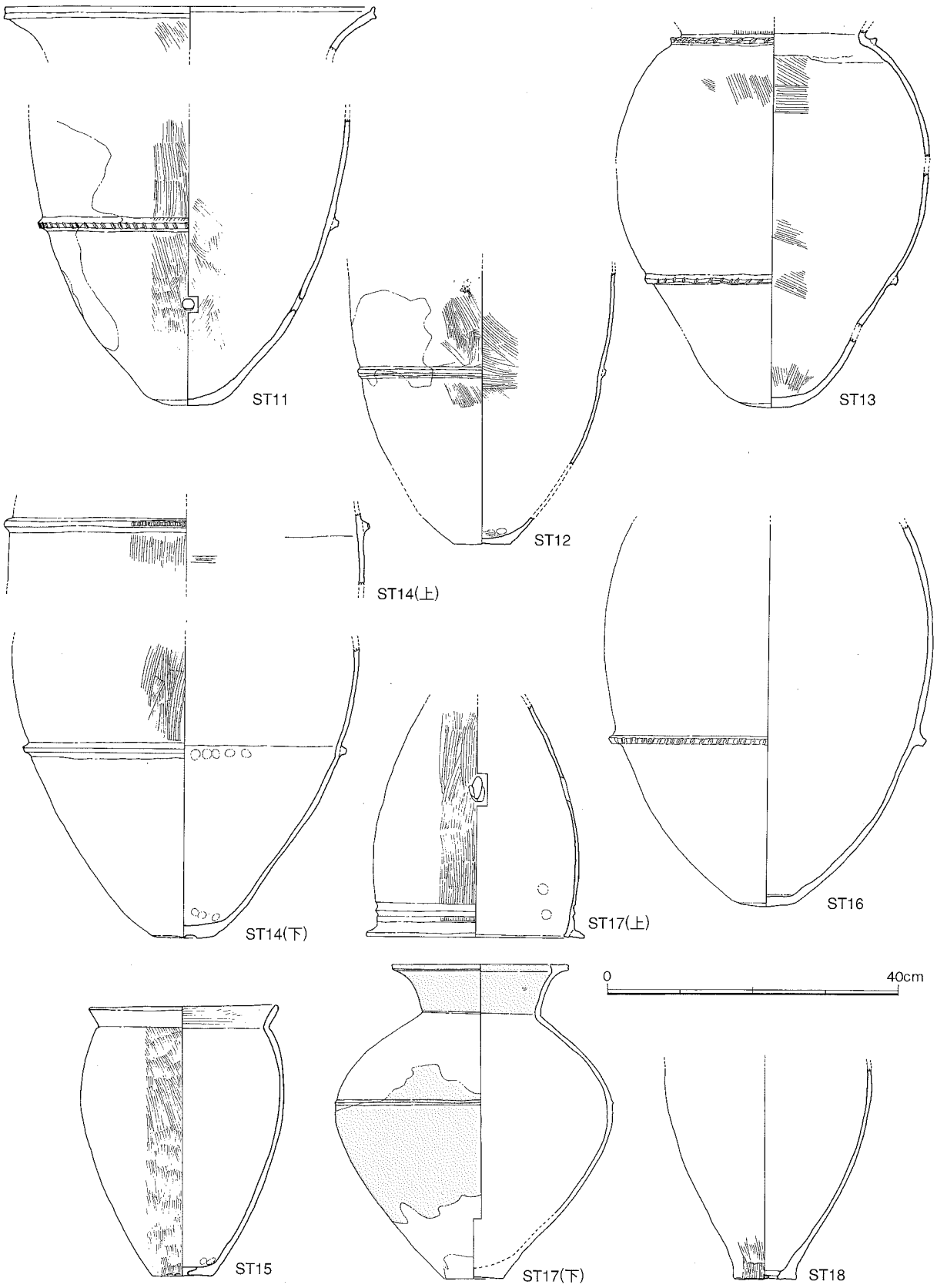
甕の胴部下半～底部である。浅い上げ底をなす底部は小さく，そこから直線的に胴部がのびる。底部付近にくびれはみられない。胎土は粗く，角閃石が目立つ。中期中頃のものか。

22号甕棺（第37図ＳＴ22）

平底をなす壷の底部である。厚みがあまりなく，中央部に内側から打ち欠いて穿孔が施される。中期中頃～後半のものかと思われる。

23号甕棺（第37図ＳＴ23，図版14）

上甕は底部を欠く。口縁部は丸味をもって屈曲し，内面の稜は不明瞭なものとなる。胴部はやや張



第36図　甕棺実測図③（S＝1／8）

るようである。胎土は粗く，調整は外面がハケ目，内面はナデを施す。

中甕も底部は打ち欠かれる。逆L字状の口縁部は内傾し，端部を丸くおさめる。口縁下には鈍い三角突帯を巡らす。胴部はやや張る程度で，最大径はやや下がる。胴部中位にススの付着がみられ，日常容器の転用かと思われる。

下甕はほぼ完全に遺存する。逆L字状を呈する口縁部はほぼ平坦につくられ，肥厚した端部は丸くおさめる。口縁部下の三角突帯は鈍いものとなる。胴部はあまり張らず，くびれをもたない底部にいたる。底部は薄手の平底をなし，中央には穿孔が施される。いずれも弥生中期中頃のものと考えられよう。

24号甕棺（第37図ＳＴ24，図版14）

甕の口縁部を欠く。胴部は張りが目立ち，最大径はやや下がる。底部は平底となる。中期後半頃のものか。

25号甕棺（第37図ＳＴ25，図版14）

上甕は底部を削平により欠失する。口縁部は意識的に打ち欠かれるものの，く字状を呈していたと推測され，内側に不明瞭な稜が残る。口縁部のつけね付近はやや肥厚し，形骸化した三角突帯の痕跡かと思われる。胴部はあまり張り出す様子はない。外面は粗いハケ調整を行う。

下甕は全体に胴部の張りが目立ち，丸味を帯びる。口縁部は屈曲してく字状をなし，端部を肥厚させて跳ね上がり口縁に仕上げる。胴部との境には上向きの三角突帯を巡らす。胴部最大径は口径を上回り，下位には内側から穿孔が施される。底部は厚手で不安定な平底をなす。全体につくりがしっかりしており，時期は弥生後期初め頃に求められよう。

26号甕棺（第37図ＳＴ26，図版14）

下甕の胴上半部は削平で欠失する。丸味をもった胴部は中位付近にコ字状突帯が１条巡る。胴部径に比して底部径は小さく，しまりのない平底がつく。底部中央には内側から穿孔が施される。橋口編年のＫⅣ期に相当すると思われ，弥生後期初め～前半頃に比定される。

27号甕棺（第38図ＳＴ27，図版14）

上甕は胴部下半を削平で欠き，上半部が遺存する。口縁部は丸味のあるく字状を呈し，上面は曲面をなす。口縁部の厚さは一様で，端部は丸くおさめる。内側の稜は鈍いものとなる。胴部の張り出しはあまりない。

下甕も屈曲するく字状口縁で，上面はやや丸味をもち，端部は肥厚する。胴部は張り出しがみられ，最大径は上位にある。胴部下半からは急にすぼまり，脚台のついた底部にいたる。黒髪式の影響か。胎土に金ウンモや角閃石を含む。時期的には弥生中期末～後期初め頃が考えられる。

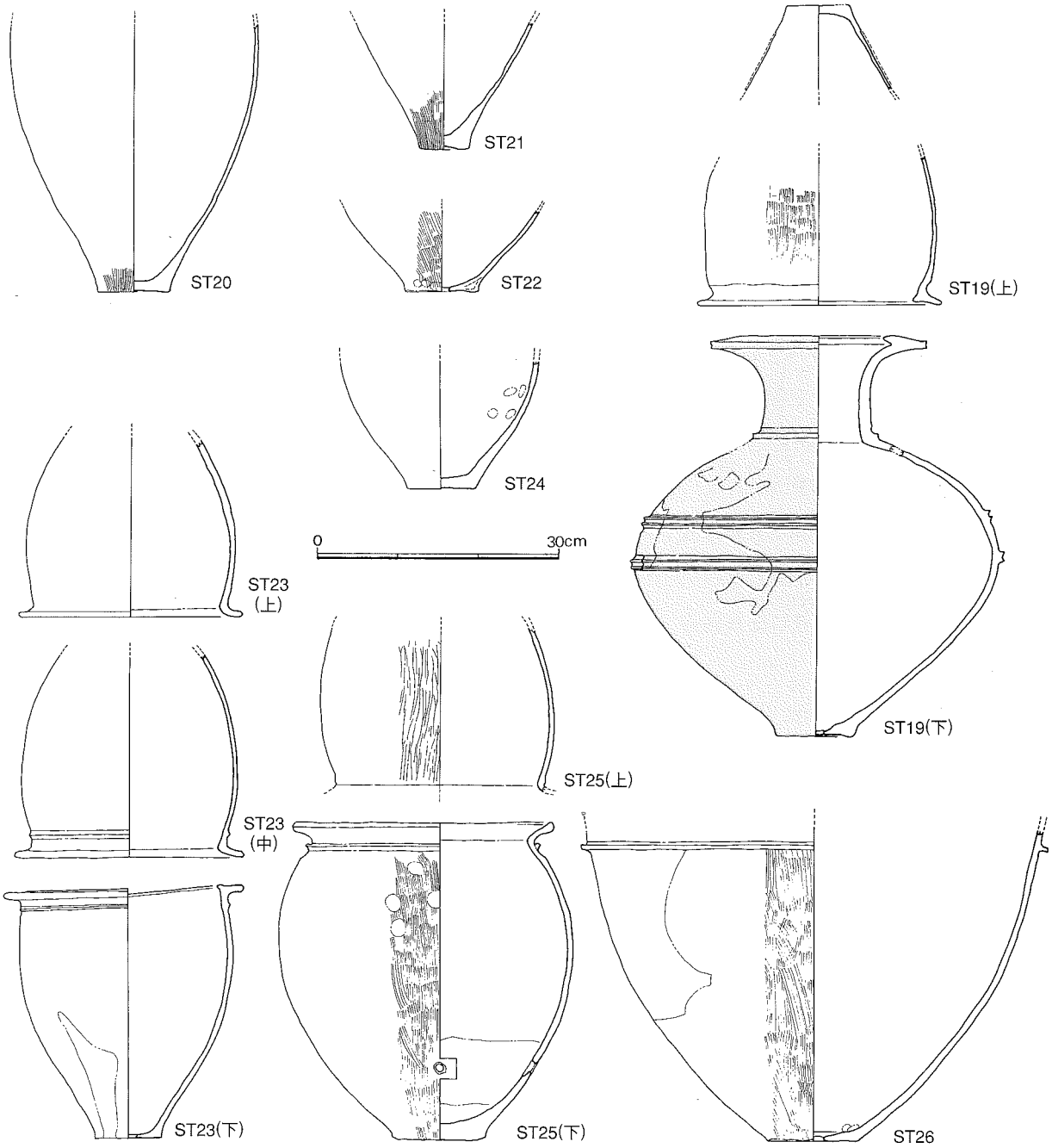
28号甕棺（第38図ＳＴ28，図版15）

下甕の胴部～底部が遺存するほか，口縁部と思われる破片も出土している。頸部のつけねで締まり，そこから直線的に斜め上方へ開く口縁部は，端部を欠するも鋤先状をなすと思われる。突帯は複数みられ，頸部下位に１条，頸部と胴部の境に１条のコ字状突帯を付す。

胴部はかなり丸味が強く，最大径よりやや下位に２条のコ字状突帯を巡らす。底部はいったんすぼまり，不安定な平底もしくは凸レンズ状に作り出す。胴部径に比べて底部は極端に小さく作られ，中央には内側から打ち欠いて穿孔を施す。胎土に金ウンモがかなり目立つ。橋口編年のＫⅣｂ～ＫＶｂ期に相当すると思われ，弥生後期中頃のものか。

29号甕棺（第38図ＳＴ29，図版15）

下甕の底部である。平底をなす底部は薄く作られ，くびれを有することなくほぼ直線的に胴部にいたる。底部中央には穿孔がみられた。時期は弥生中期後半頃としておく。



第37図　甕棺実測図④（Ｓ＝１／８）

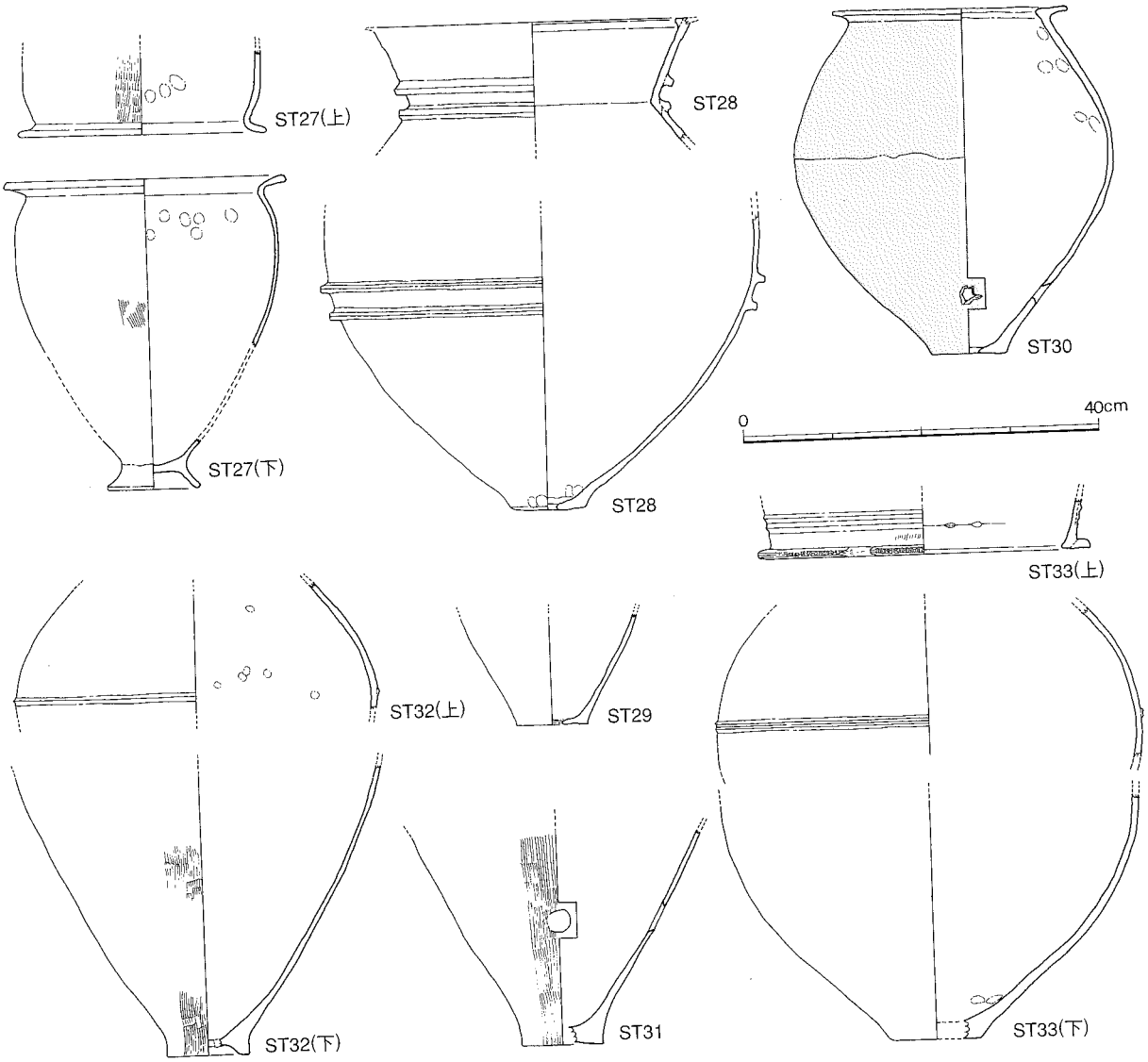
30号甕棺（第38図ＳＴ30，図版15）

単棺の石蓋甕棺で，ほぼ完全に復元できる。口縁部は逆Ｌ字状を呈し，やや内傾する。胴部のふくらみは強く，最大径は中位付近にある。胴部下位には外側から打ち欠いた孔がみられるが，穿孔になるかどうか判別し難い。平底の底部中央は明らかに穿孔が施される。外面は全体に赤色顔料が塗彩され，内面はススで黒く塗られていた。

器形的には糸島型祭祀用土器の逆Ｌ字形口縁甕に似る。口縁部の穿孔や突帯が全くみられない等，相違点はあるものの，ここでは一応糸島型の祭祀土器としておく。時期は須玖Ⅱ式の範疇に入れて大過ないと思われる。

31号甕棺（第38図ＳＴ31，図版15）

下甕の胴部下半～底部である。底部は分厚い平底で，ほぼ直線的に胴部へ移行する。胴部下位には穿孔が施される。弥生中期中頃のものか。



第38図　甕棺実測図⑤（Ｓ＝１／８）

32号甕棺（第38図ＳＴ32，図版15）

上棺は壷で，胴部のみ遺存した。中位付近に最大径をもち，１条の三角突帯を巡らす。

下甕は口縁部を欠く。上げ底をなす底部は厚みがなく，中央に内側から穿孔が施される。底裾部はやや外側にふんばる感じで，胴部へは外上方に大きく開いてのびる。弥生中期中頃の時期が考えられる。

33号甕棺（第38図ＳＴ33，図版15）

上甕は口縁部以外を欠失する。逆Ｌ字状をなす口縁部は端部が肥厚気味で，刻目が施される。口縁部下には三角突帯を２条巡らす。胴部はやや張るものと推測される。胎土に金ウンモの混入が目立つ。

下棺は壷で口縁部を欠く。胴部は丸味が強く，最大径のある中位付近にはM字突帯が施される。底部は分厚い平底をなす。時期的には弥生中期中頃～後半が考えられる。

ii　箱式石棺墓出土土器（第39図）

甕（１）　１は逆Ｌ字状をなす口縁部片である。端部はやや肥厚し，丸くおさめる。

壷（２）　２の底部は薄手で平底をなす。いずれも覆土中からの出土で，箱式石棺に伴うものかどうかは微妙である。遺跡の時期から考えると，弥生中期中頃以降とするのが妥当であろう。

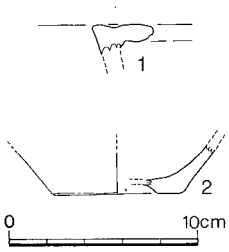
iii　２号住居跡出土土器（第40図，第41図，図版９）

壷（１～3，12，14～17，23～25）　１～３は広口壷である。１は頸基部のくびれが強く，やや長い口頸部が斜め上方に開くものである。端部は内側へわずかにふくらむ。頸基部内側の稜は甘い。２は１よりも基部のくびれがやや弱い。長めの口頸部は立ち気味で，上方へのびて開く。端部は肥厚気味となり，面をなす。胎土は金ウンモが顕著に見られる。３は１と同様な口縁部をもつ。頸基部にくびれを有し，長い口頸部が斜め上方へ直線的にのびる。頸基部内面の稜は鈍い。端部は内側へ肥厚気味に小さく突出する。胴部は球形に近く，最大径は中位にある。胴部外面は風化のため調整不明。内面は胴部上半がヨコハケで，下半はヘラケズリを行う。

12，14～17は壷の口縁部である。12は鋤先状をなす。14は小型壺か甕の口縁部か。短かい頸部から屈曲した口縁部は，端部が上方につまみ出される。15は口頸部の長い複合口縁壷である。屈曲部の稜は鈍く，反転部は内湾気味にのびる。端部は面をなす。胎土に金ウンモを含む。16も複合口縁壷である。屈曲の稜は鋭角的で，反転部は直線的ないし外反気味にのびる。17は複合口縁の反転部をさらに外へつまみ出し，擬口縁状になす。

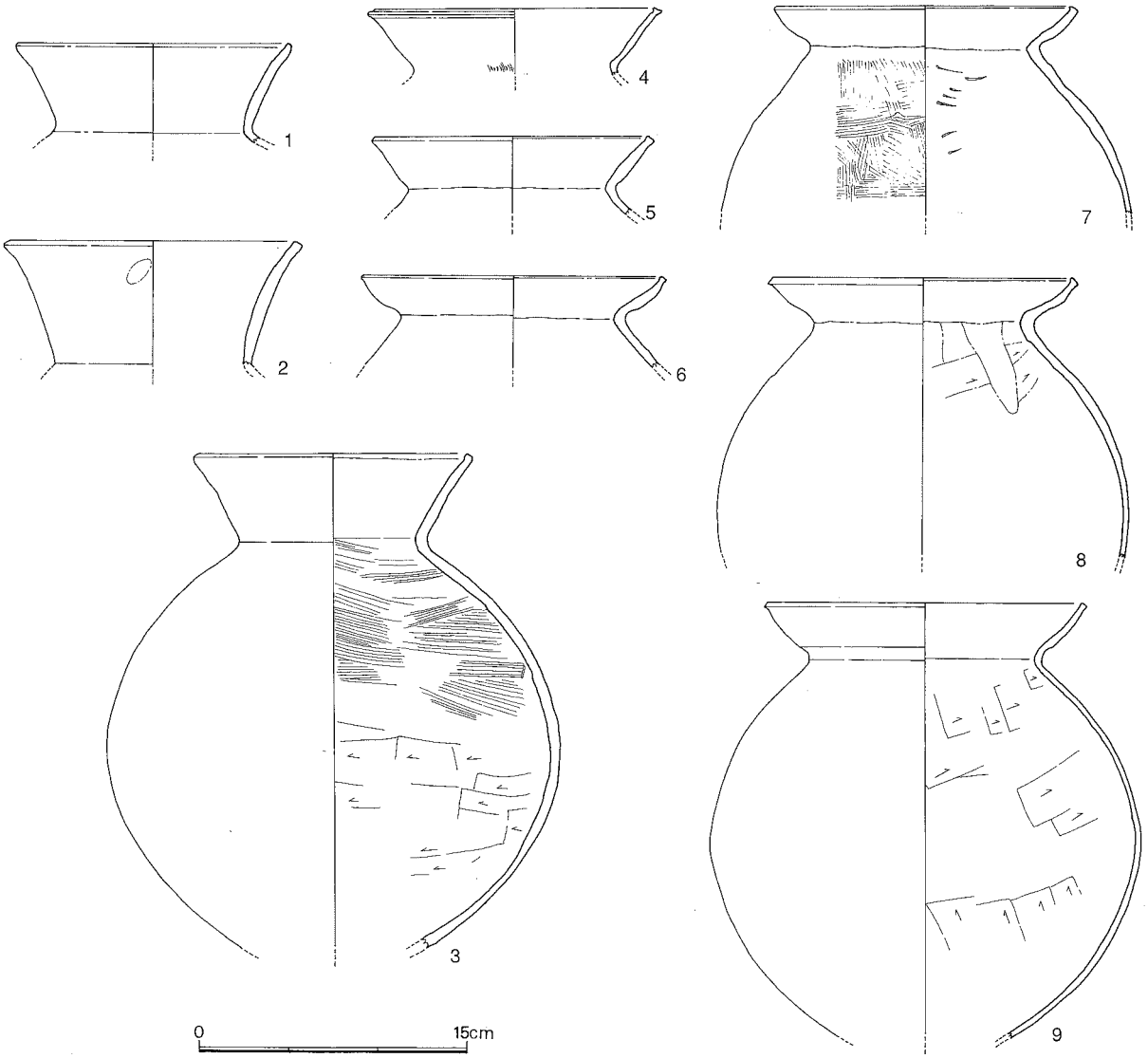
23～25は壷の底部である。23は薄手の平底で，底部に若干くびれをもつ。24・25は厚手の平底で，底端部の稜は不明瞭となる。

甕（４～11，13，19～22，26）　４～11，13は口縁部である。４の口縁部は直線的に開いて，端部を外側につまみ出す。器壁はかなり薄い。胎土には金ウンモが顕著である。５も直線的に開くが，口縁部中位付近の器壁が肥厚気味で，端部は面をなす。内外側へのつまみ出しはごくわずかである。頸



第39図　箱式石棺墓出土土器
（S＝1／4）

部内側の稜は鈍い。金ウンモは胎土内にかなり目立つ。6は強く内弯しながらのびる口縁部である。口縁部中位がやや肥厚し，端部は丸くおさめるものの，外側へのつまみ出しは痕跡的に残る。頸部の稜はあまく，なで肩の胴部にいたる。7も内弯してのびる口縁部を有す。口縁部の中位付近は肥厚し，端部は外傾する面をなすと同時に内側へもわずかにつまみ出す。胴部はなで肩となる。胴部外面はハケで，内面は口縁のつけねまでヘラケズリを施す。8も7に似る。口縁部は強く内弯するもので，中位付近で肥厚し，端部は内外方向につまみ出す。胴部はなで肩となり，上位に浅い段がつく。外面の調整は不明だが，内面は口縁下までヘラケズリを行っている。9も口縁部は内弯気味にのびる。ただし，中位付近に肥厚はみられない。端部は面をなし，わずかに外側へつまみ出す。胴部はほとんど球形をなし，器壁はかなり薄くつくられる。外面は調整不明だがナデか，内面はヘラケズリを施す。金ウンモの混在が顕著である。



第40図　2号住居跡出土土器①（S＝1／4）

10は逆L字状口縁をなし，端部は肥厚して丸くおさめる。内側への突出は小さい。胎土には金ウンモが目立つ。11は断面が細長い三角形をなす逆L字状口縁である。口縁下には1条の三角突帯を巡らす。13は丸味のあるく字状口縁で，やや長めの口縁が立ち上がって緩く外反する。端部は面取りされ，屈曲部内側の稜は鈍い。胴部との境に1条の三角突帯を施す。

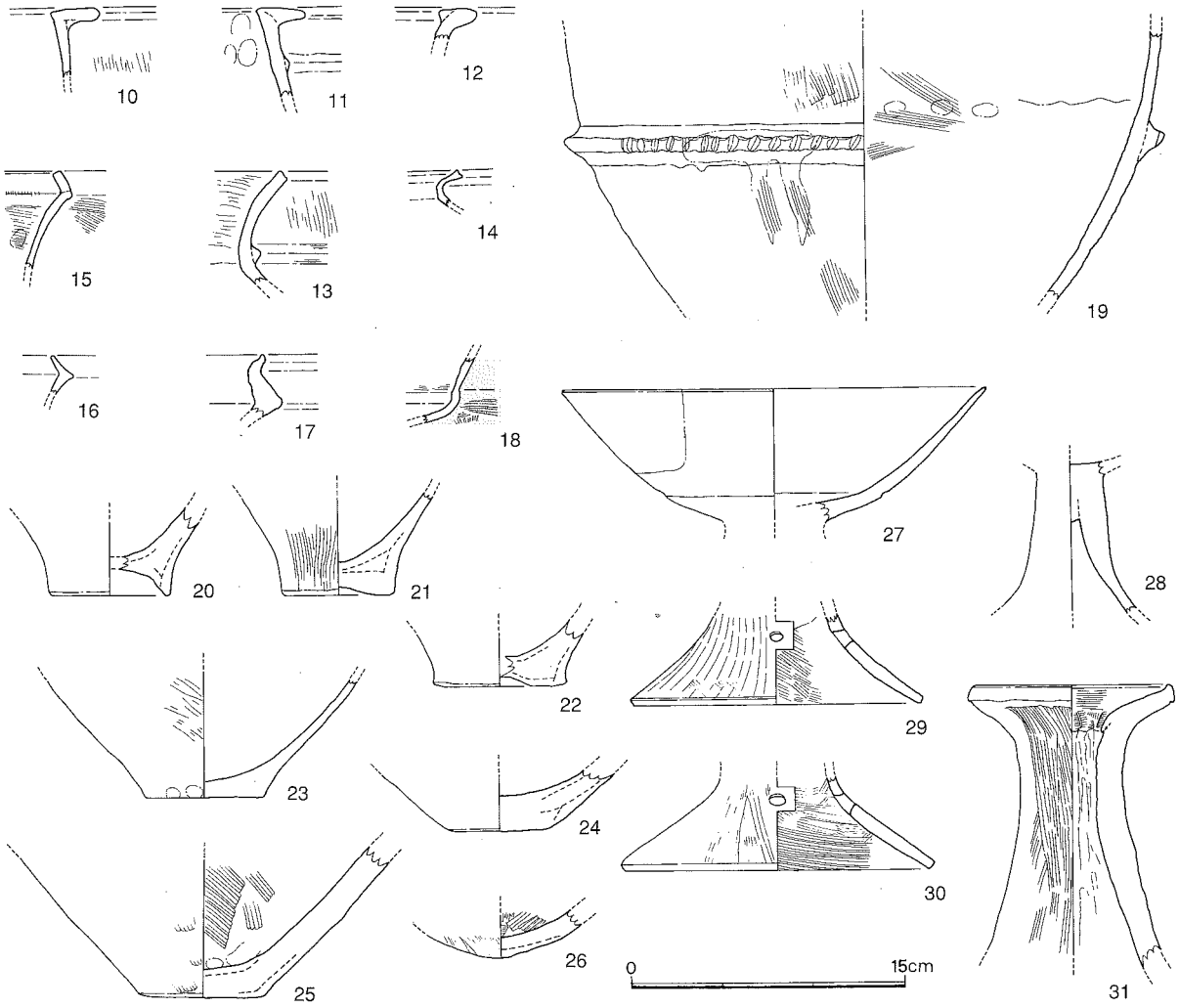
19は胴部片である。胴部下位に鈍い三角突帯が上向きに貼付され，その上から粗い刻目を施す。胎土には角閃石が目立つ。

20～22，26は底部である。20は高い上げ底を，21・22は低い上げ底をなす。20～22は胎土に金ウンモを含む。26は尖底をなす。2枚の粘土板を張り合わせてつくられる。内外面とも放射状にハケ調整を施し，尖底部分はナデを加える。

鉢（18）

18は小型丸底鉢の胴部か。口頸部のくびれ込みは弱く，胴部は扁球形をなす。外面には赤色顔料が施される。

高坏（27～30）　27は坏部で，坏部は深く，口縁部はやや内弯し，坏底部との境は浅い段がつく。脚柱部の基部は太めである。口径は大きい。口縁の先端部は鋭い。シャープである。28は脚柱部で，



第41図　2号住居跡出土土器②（S＝1／4）

丁寧にナデ調整を行う。29・30は脚裾部で，29は外反気味の裾部をもち，端部は面取りされる。脚柱部との境に円孔を有する。暗文風のヘラケズリが放射状に施される。内面はヨコハケを行う。金ウンモの混入が顕著である。30は直線的ないし内弯気味の裾部で，端部はしっかりとした面をなす。脚柱部との境は内側から円孔を穿つ。内外面ともハケ調整が施される。胎土には金ウンモがかなり目立つ。

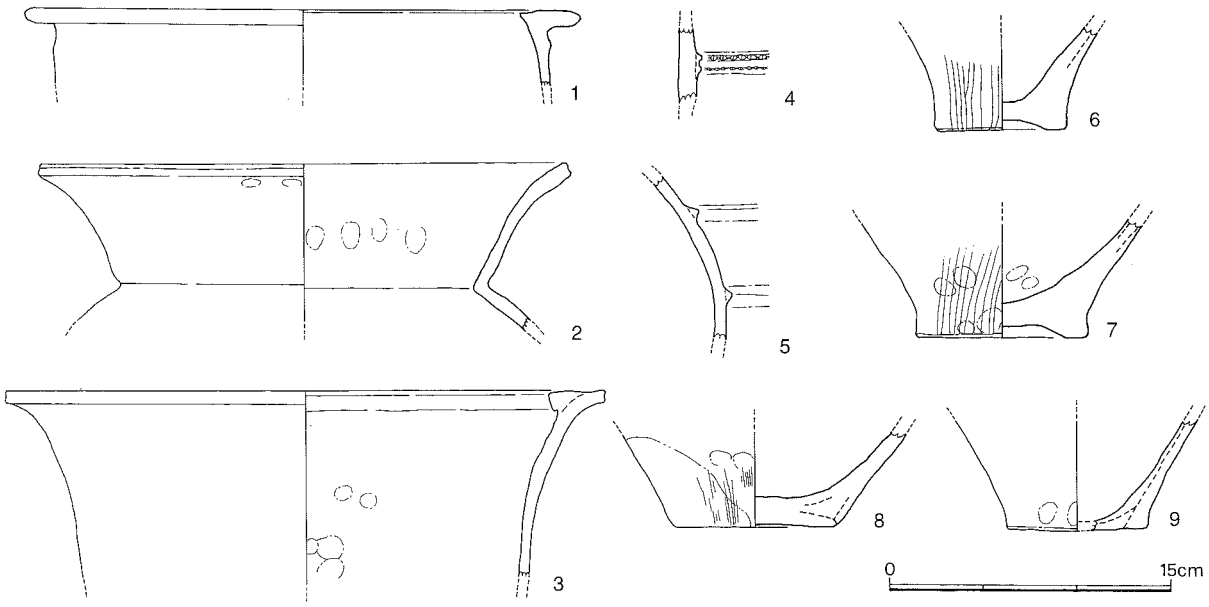
器台（31）　受部と脚部の境を上位に有し，緩く内弯気味に屈曲する。胎土には金ウンモが顕著である。

3・5・7～9・19・21・24は2号住居跡床面出土で，それぞれの出土地点は第27図に示した。左記以外はすべて覆土内からの出土である。床面出土の土器は若干の幅はあるものの，柳田編年(1991)における土師器Ⅱb式の範疇に入ると思われ，2号住居の廃絶時期も概ねこの頃に求められるだろう。

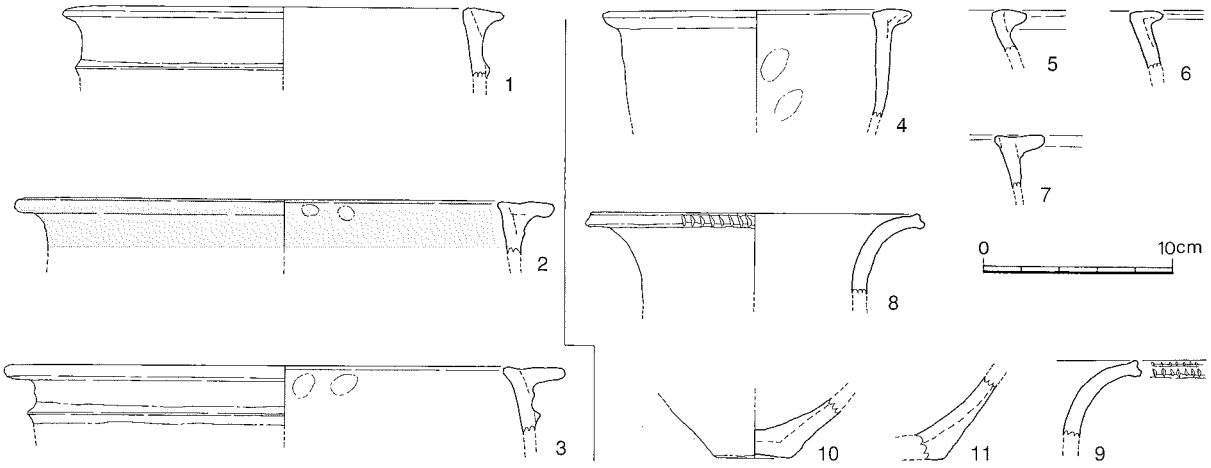
iv　2号土壙出土土器（第42図）

甕（1・6・9）　1は逆L字状を呈する口縁部で，垂れ気味の端部は丸くおさまる。口縁内側への突出は小さい。口縁下は強いヨコナデによってくぼみ，三角突帯の貼付はみられない。胴部の張りもほとんどない。6・9は甕の底部である。6は上げ底をなすもので，底部付近にくびれを有する。9は薄手の平底で，ほとんどくびれがみられない。

壷（2～5・7・8）　2・3は口縁部である。2は広口壷の口縁部で，単純な素口縁をなす。頸部のつけねが締まり，大きく外反する。頸部はあまり長くのびることはない。口縁端部は肥厚し，面取りされる。3も広口壷の口縁部だが，鋤先状を呈し，端部は面をなす。頸部のしまりはゆるく，直上方向にのびて開く。4・5は胴部片である。4は断面M字突帯に刻目を施す。5は胴部中～上位に2条のシャープな三角突帯を巡らせる。7・8は底部である。7は上げ底をなし，底裾部は外に張り出す感がある。8は厚手の平底である。



第42図　2号土壙出土土器（S＝1／4）



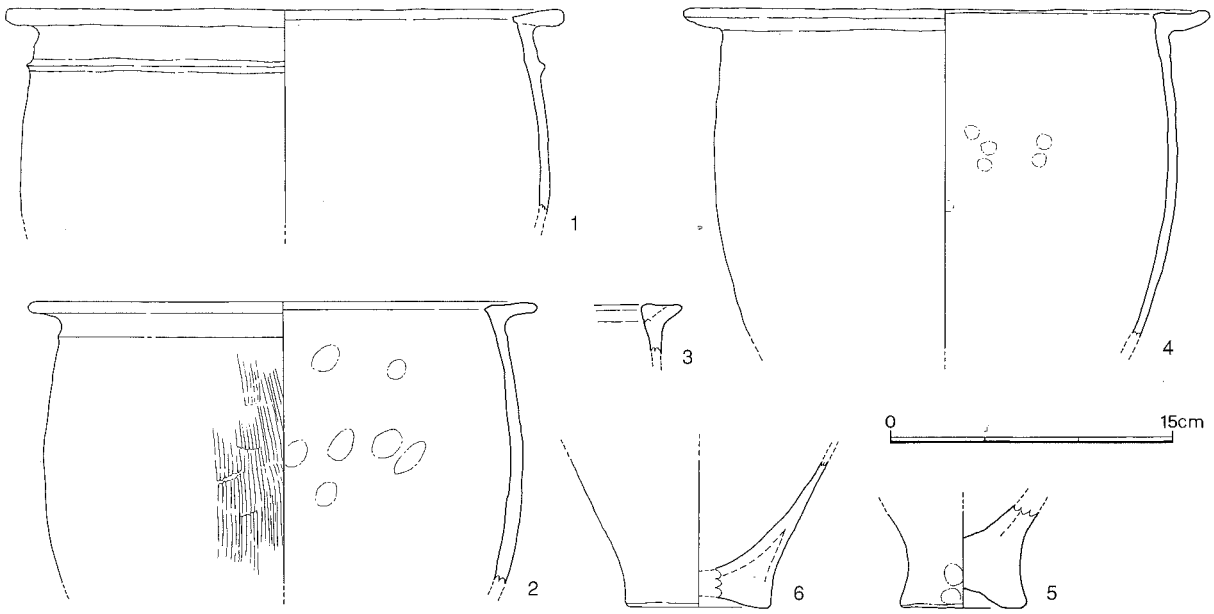
第43図　3号土壙・4号土壙出土土器（S＝1／4）

2・3・6～9の出土地点は第28図に示した。それ以外は覆土内から出土したものである。時期的には弥生中期前半～中頃におさまり，2号土壙の築造もその頃に比定できよう。

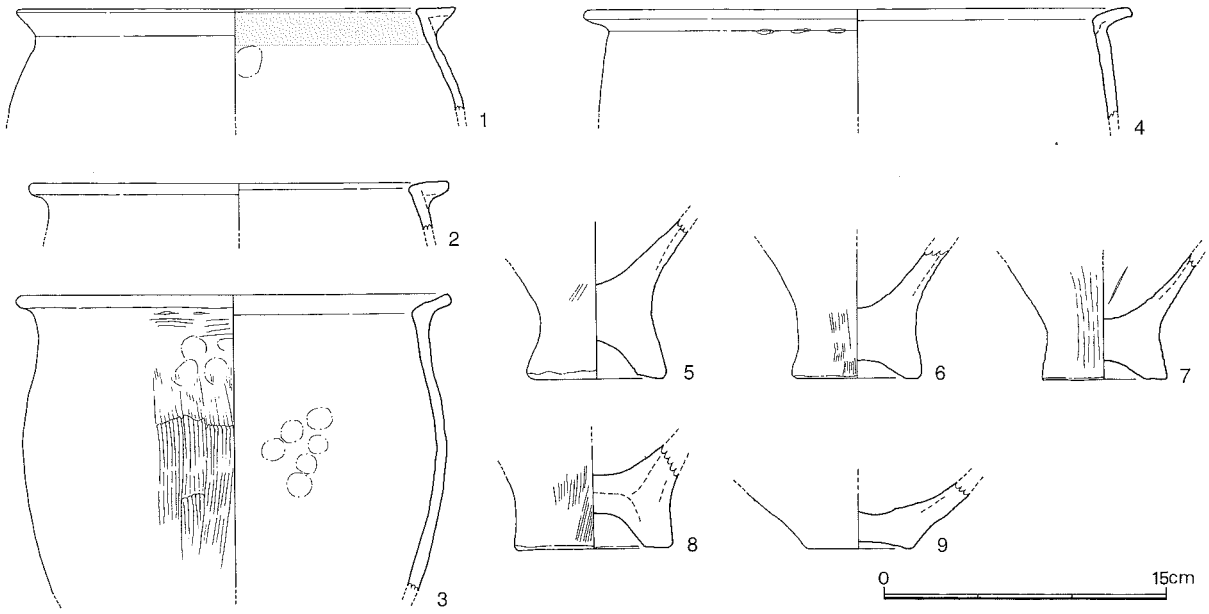
v　3号土壙出土土器（第43図）

甕（1～3）　図示できるものが少なく，口縁部のみ3点掲載した。1は断面三角形をなし，口縁下にも三角突帯を巡らす。2は平坦面をもつ逆L字状で，端部は肥厚する。内外面に赤橙色の化粧土（Slip）が施される。胎土に金ウンモが目立つ。3も逆L字状口縁をなす。口縁部下にはシャープな三角突帯を有する。胎土には金ウンモが顕著にみられる。

1は城ノ越式になろうが，2・3は須玖Ⅰ式に相当する。いずれも覆土からの出土であるが，3号土壙の時期は弥生中期前半頃としておきたい。



第44図　5号土壙出土土器（S＝1／4）



第45図　土器溜り出土土器（S＝1／4）

vi　4号土壙出土土器（第43図）

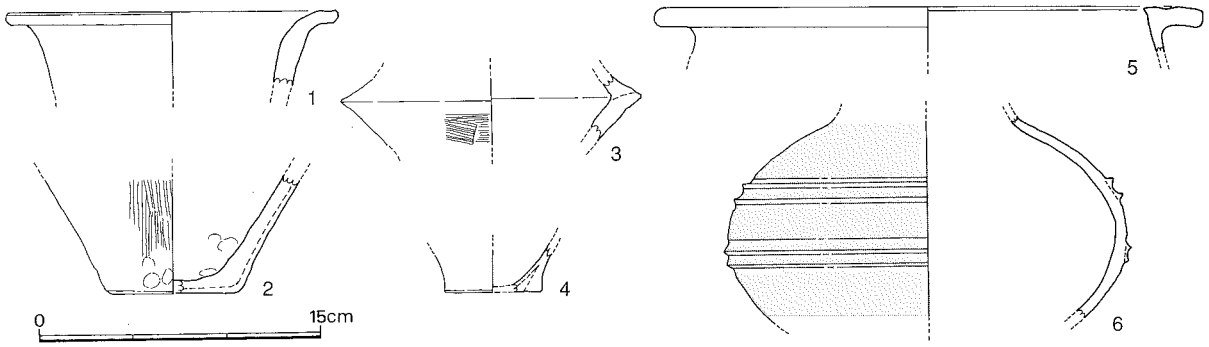
甕（4～7）　4～7は口縁部である。4は未発達な逆L字状口縁を呈す。内側への突出はなく，胴部も張らない。5・6は断面三角形の口縁部である。城ノ越式になるか。7は須玖式の逆L字状口縁である。内側に小さく突出をみせる。

壷（8・9）　8・9は壷の口縁部で，ラッパ状に開いた口縁の端部は上下につまみ出され，刻目が施される。10・11は底部か。10は底径が小さく，やや上げ底状になる。

4・7・8は覆土からの出土であるが，それ以外の出土地点については第30図に示した。城ノ越式かと思われる土器はあるものの，遺構の中心時期は弥生中期前半頃と考えた方がよさそうである。

vii　5号土壙出土土器（第44図）

甕（1～6）　1～4は口縁部である。1はやや内傾する逆L字状口縁をなす。端部は肥厚して丸くおさめ，内側への突出は小さい。口縁部下にシャープな三角突帯を巡らす。胴部はあまり張り出さない。2も口縁部が逆L字状をなす。口縁部下は強いヨコナデで稜がつき，三角突帯にはならない。胴部の張りは弱い。3は断面三角形をなす口縁部である。4も逆L字状を呈する口縁部で，平坦面は



第46図　その他の遺構出土土器（S＝1／4）

内弯気味になる。端部は丸くおさまり，内側へわずかに突出する。胴部の張り出しはほとんどない。5・6は底部である。5は分厚い上げ底をなすもので，底部のくびれは明瞭につく。6は厚手の底部で，やや上げ底状をなす。くびれは弱い。

3だけが覆土からの出土で，それ以外の出土地点は第31図に記したとおりである。概ね須玖Ⅰ式に比定されそうで，弥生中期前半頃のものであろう。

viii　土器溜り出土土器（第45図）

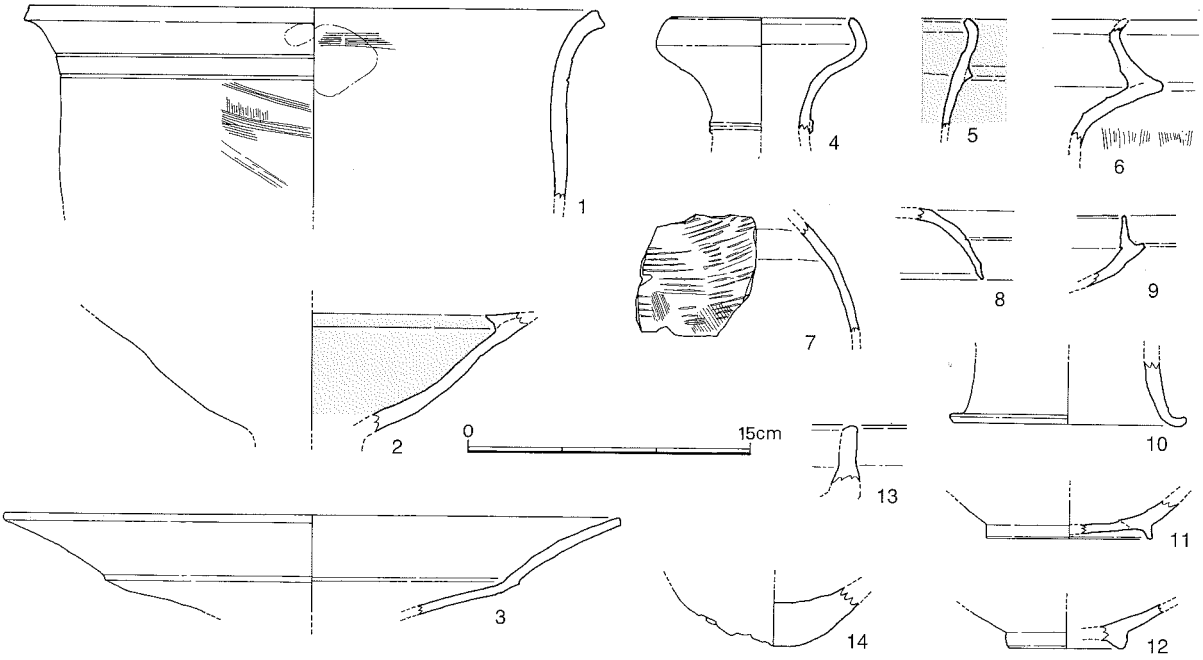
甕（1～8）　1～4は口縁部である。1・2は断面三角形をなすが，須玖Ⅰ式の古段階と考えられる。口縁部下に突帯はなく，胴部はやや張るようである。1の口縁部内面には赤色顔料が施される。胎土には金ウンモが目立つ。3・4は屈曲口縁をもつ。3は屈折部の稜が甘く，胴部がやや張るもので，4は丸味をもって屈折し，胴部があまり張らないものである。4は胎土に金ウンモの混入が著しい。5～8は底部である。いずれも上げ底をなし，底部の厚みとくびれの度合いにより順に並べた。8は胎土に金ウンモや角閃石が顕著に見られる。

壷（9）　9は凹レンズ状の浅い上げ底をなす。内底面は棒状の工具で突いたような痕跡がみられた。胎土に金ウンモがかなり含まれる。

5のみ覆土からの出土で，それ以外の出土地点については第32図に示した。すべて須玖Ⅰ式古段階の範疇に入ると思われ，弥生中期前半頃として大過ないだろう。

ix　その他の遺構出土土器（第46図）

不明石組ピット（H8区P6）出土土器（1・2）　1は広口壷の口縁部であろう。口頸部が短く，直線的に立ち上がった後に短く外反する。端部は丸くおさめる。2は甕の底部で，薄手の平底をなす。



第47図　その他の土器（S＝1／4）

中期中頃～後半のものか。

Ｄ４区Ｐ１出土土器（３・４）　３は複合口縁壷の口縁部で，反転部が内弯気味のカーブを描く。４は甕の底部である。薄手の平底をなす。時期幅があり，どれが遺構に付随するものか不明。

Ｅ８区Ｐ８出土土器（５・６）　５は逆Ｌ字状をなす口縁部である。端部は厚く，垂れ気味となる。内側への突出は短い。６は壷の胴部片である。口縁部と底部を欠くが，意識的なものかは不明。扁球形の胴部中央とやや上位にシャープなＭ字突帯を２条巡らす。外面は全面に赤色顔料を塗彩している。６の土器から須玖Ⅱ式古段階の中期後半頃と考えたい。

ｘ　その他の土器（第47図）

甕（１・７）　１は口縁部である。緩やかに外弯する如意形口縁の端部は面取りされ，刻目は施さない。口縁下には２条の沈線を巡らす。胴部の張りはほとんどみられない。板付Ⅱ式の新段階になるか。Ｈ９区Ｐ38出土。７は胴部片である。右上がりの粗いタタキ目を有する。庄内系の影響か。表採資料である。

高坏（２・３）　２は坏部である。口縁部は端部を欠くものの内傾する鋤先状をなし，シャープなつくりである。内面には赤色顔料を塗布する。胎土は金ウンモの混入が顕著である。須玖式段階のものである。Ｉ７区Ｐ１出土。３も坏部で，坏部上半はあまり弯曲せずに長大化し，坏部下半はやや内弯気味になる。坏部下半との境には浅い段がつく。弥生時代終末期に比定される。Ｆ８区Ｐ52出土。

壷（４～６）　４・５は袋状口縁壷の口縁部である。４は丸味のある袋状口縁部をなし，頸部がすぼまるもので，中位には鈍いＭ字状突帯が巡る。表採資料である。５は袋状口縁部があまり発達しないもので，口縁下に１条の三角突帯をもつ。石橋分類のＢ類壷か。内外面とも赤色顔料が施される。Ｅ６区Ｐ11出土。４・５は中期後半の資料である。６は複合口縁壷で，口縁部は逆く字状をなし，反転部は内弯気味のカーブを描く。口縁端部のつまみ出しは強く，擬口縁状になる。弥生終末期に位置づけられる。表採資料。

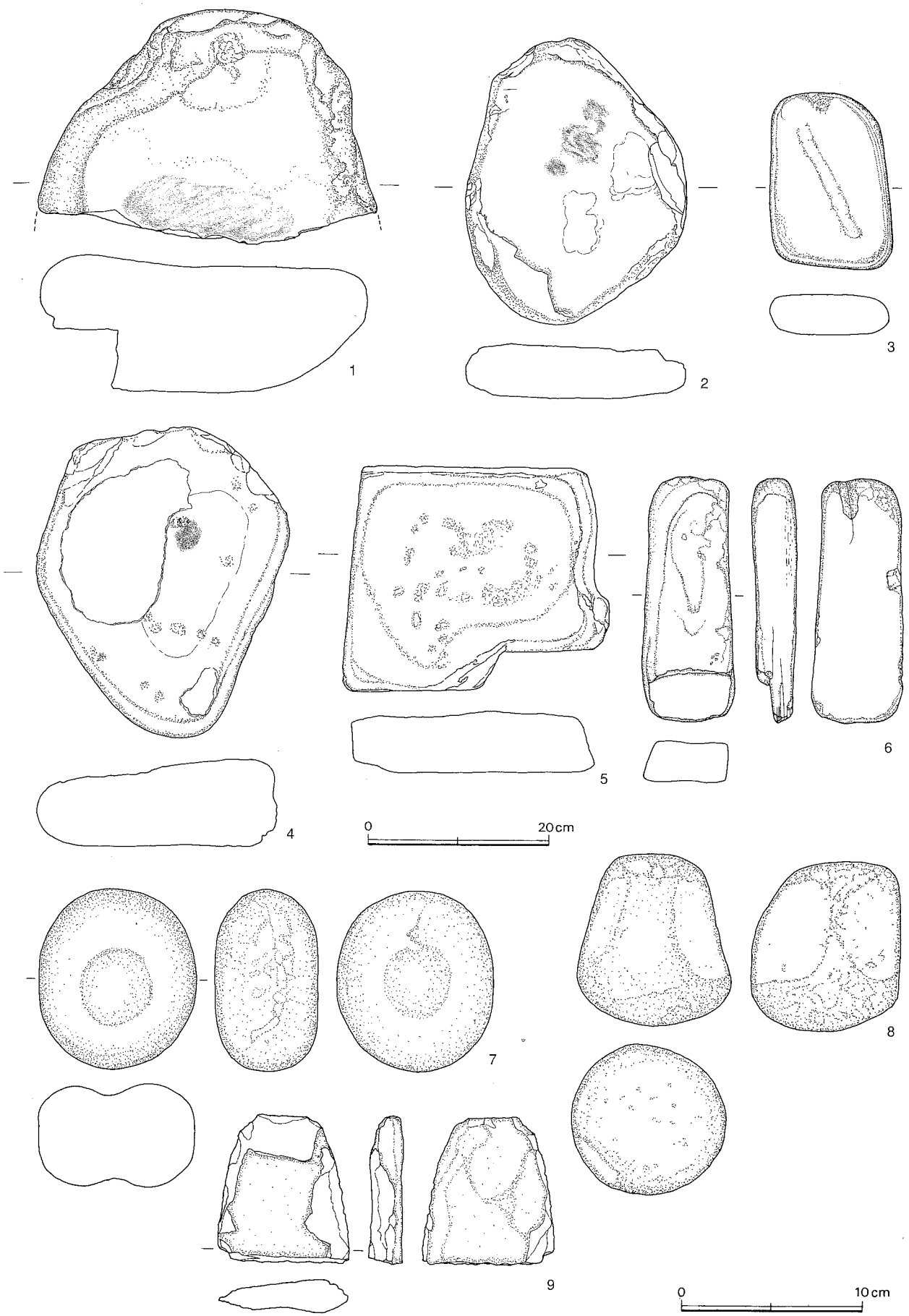
須恵器（８～10）　８は坏蓋で，天井部は高いほうで，体部中位に沈線を巡らす。口縁端部は鋭く，内側は面をなす。９は坏身で，たちあがりは比較的長く，端部は段がつかないで内側に面をなす。小田編年のⅢＡ期に相当しよう。10は端部内面に自然釉が付着しないことから脚部と判断したが，形状不明。いずれも表採資料である。

黒色土器（11）　黒色土器Ａ類の坏高台部である。表採資料。

白磁（12）　白磁椀Ⅱ類の高台部で，外面は直に，内面は斜めに削り出す。内面見込には段がつかない。表採資料。

朝鮮製無釉陶器（13）　13は口縁端部が直立する二重口縁壷になるか。表採資料である。

縄文土器（14）　縄文早期の繊維土器底部である。器壁は厚く，焼成はもろい。色調は黒灰色を呈す。Ｆ７区Ｐ４出土。



第48図　2号住居跡出土石器（1～6はS＝1／6，7～9はS＝1／3）

b　石器（第48図～第51図，図版16）

i　2号住居跡出土石器（第48図，図版16）

2号住居跡より石皿・台石・磨石・砥石・扁平打製石斧などが一括出土している。石皿は台石と併用されたものが多く，中央部に敲打痕が認められる。砥石については3の硬質のものと，6の軟質砂岩のものとが出土しており，鉄器等の粗研ぎと仕上げがこの場で行われたのであろう。台石・石皿と対になると思われる7の凹石,8の磨石が各1点ずつ出土している。9の扁平打製石斧の出土は，筆者の知るところでは，時期的に県内で下限の扁平打製石斧の資料と思われる。2号住居跡は布留段階の土器が出土しており，この期の住居跡として捉えられ，弥生時代の系譜が石器からも窺われる。

ii　30号甕棺墓石蓋（第49図，図版16）

甕棺墓の石蓋として石皿が転用されている。ただ単なる転用というより，石皿そのものが生活の中で重要な役割を果たしていたことの現れではなかろうか。

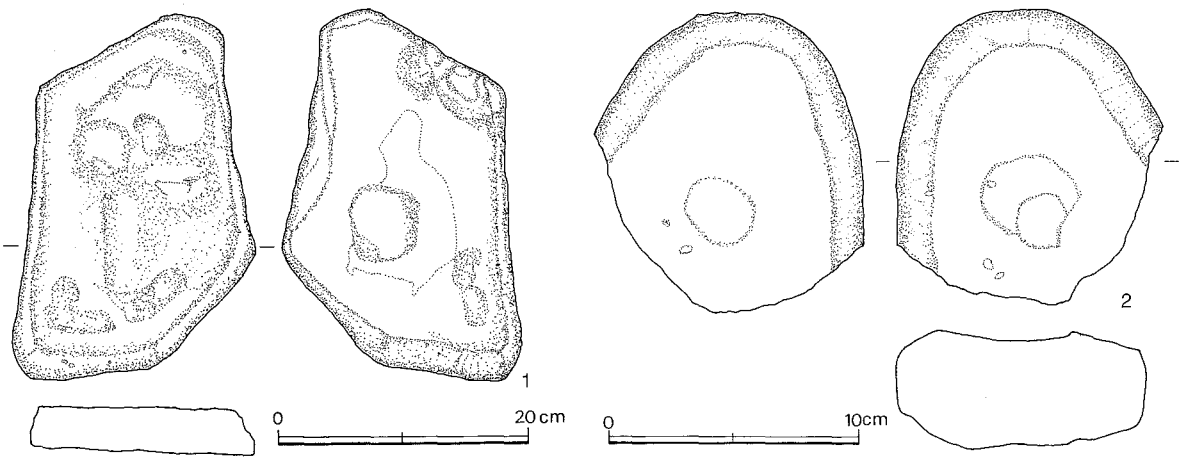
iii　土器溜り出土石器（第50図）

30号甕棺に石皿が転用されていたように，本遺跡からは多くの石皿・台石が出土している。

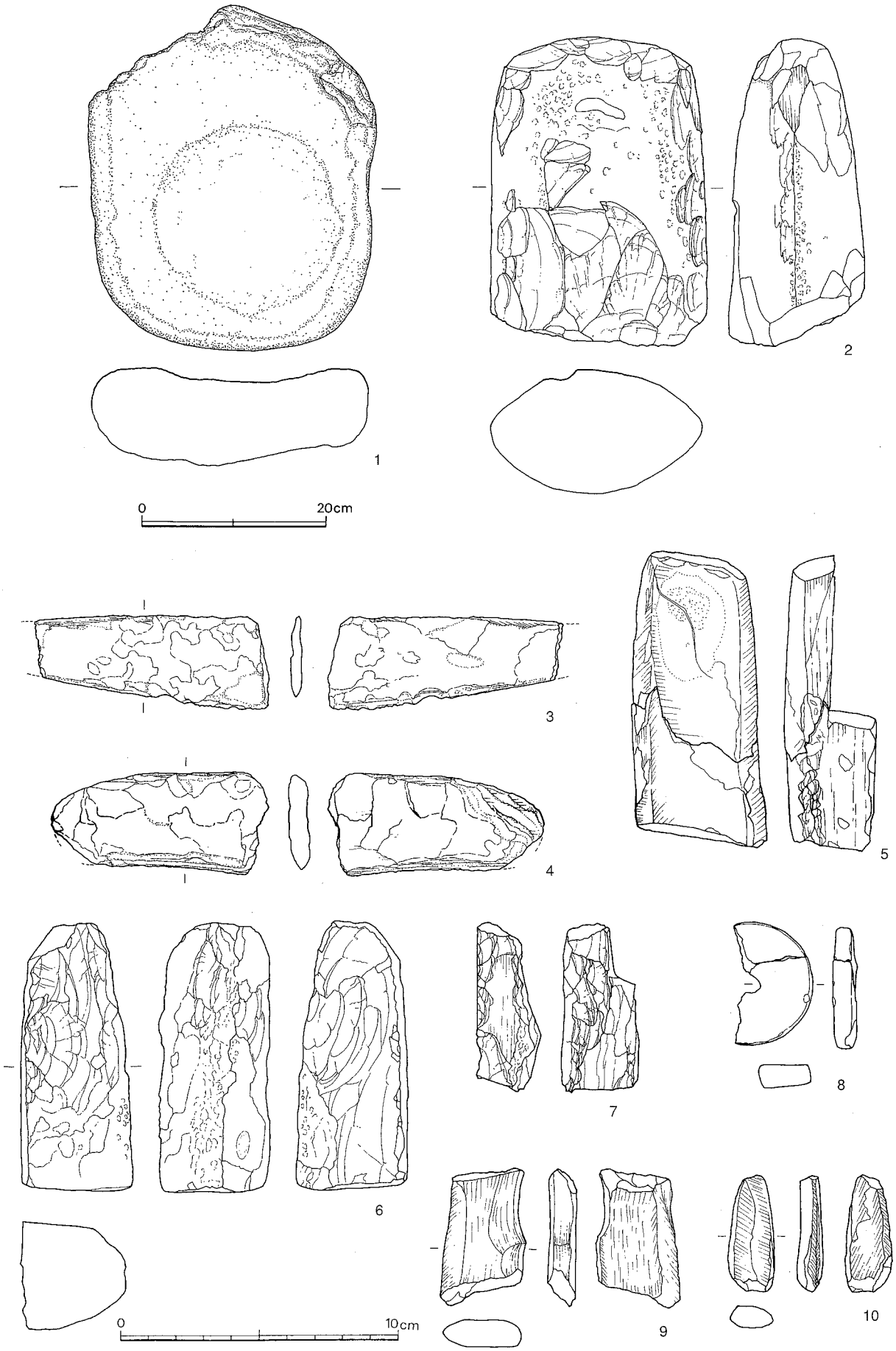
iv　その他の石器（第51図）

大形の石斧・石剣・石鎌・柱状片刃石斧・紡錘車等が出土している。3の石剣（図面として90度回転させなければならない）は厚さ6㎜と薄身である。4の石鎌と同様に頁岩を使用しているが表面の剥落がはげしい。今回の調査では，石庖丁の出土はなかったが，鉄鎌・石鎌の出土から，離島地域といえども農耕と無縁では無かったことの証左となろう。

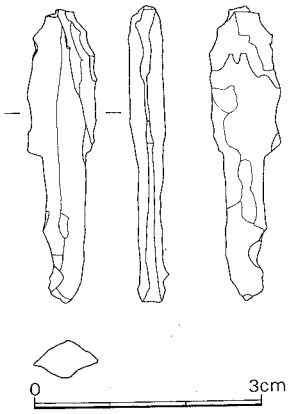
第49図　30号甕棺石蓋（S＝1／6）



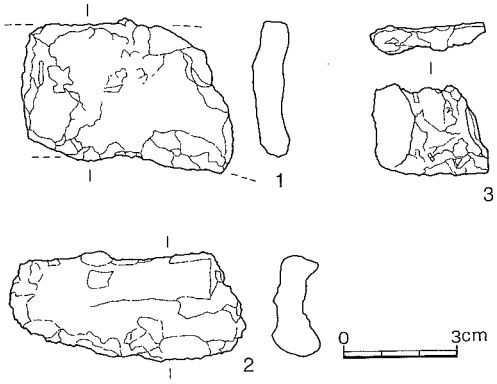
第50図　土器溜り出土石器（S＝1／6）



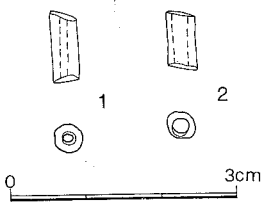
第51図　H10区P5出土石器（S＝1／6）およびその他の石器（S＝1／2）



第52図　Ｅ７区P267出土銅鏃
（Ｓ＝１／１）



第53図　出土鉄器（Ｓ＝１／２）



第54図　25号甕棺墓出土管玉
（Ｓ＝１／１）

c　その他の遺物（第52図～第54図，図版16）

i　金属器（第52図，第53図，図版16）

銅鏃（第52図）　有茎の柳葉鏃で，全体に腐食を受けており，鋒・逆刺・茎の一部をそれぞれ欠く。身の断面形は菱形をなし，片面のみ鎬がうかがえた。色調は灰青色を呈す。付着物はみられなかった。現存長3.9cm，現存幅0.9cm，現存厚0.5cmを測る。Ｅ７区Ｐ267出土。

鉄鎌（第53図）　１～３は折損したり銹化して明確ではないが，鉄鎌とした。１の刃部はやや湾曲するか。幅3.6cm，厚さ0.7cm前後を測る。Ｂ５区Ｐ１出土。２は鎌の先端部かと思われ，刃部は直線的である。幅2.8cm，厚さ0.6cm前後を測る。Ｅ６区Ｐ14出土。３は直線的な刃部をもち，端部を１cmほど折り返す手鎌であろう。幅2.2cm，厚さは１mm前後か。２号住居跡出土。

ii　玉類（第54図，図版16）

管玉（第54図）　25号甕棺の人骨取り上げ後，長崎大学医学部の分部哲秋氏によって骨に混在する管玉２点が検出された。長さは６～８mm，径は３mm前後を測り，色調は灰緑色を呈す。甕棺の時期からすると，弥生後期初め頃のものと考えられよう。

【参考文献】

石橋新次　1992　「糸島型祭祀用土器の成立とその意義」『北部九州の古代史』名著出版

井上裕弘　1991　「北部九州における古墳出現期前後の土器群とその背景」『古文化論叢』児嶋隆人先生喜寿記念論集　児嶋隆人先生喜寿記念事業会

蒲原宏行　1991　「古墳時代初頭前後の土器編年－佐賀平野の場合－」『佐賀県立博物館・美術館調査研究書』第16集　佐賀県立博物館・美術館

武末純一　1987　「九州地方の弥生土器，須玖式土器」『弥生文化の研究』４　雄山閣出版

田崎博之　1985　「須玖式土器の再検討」『史淵』第122号　九州大学文学部

橋口達也　1979　「甕棺の編年的研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXXI　福岡県教育委員会

柳田康雄　1982　「三・四世紀の土器と鏡」『森貞次郎博士古稀記念論文集』

1987　「九州地方の弥生土器，高三潴式と西新町式土器」『弥生文化の研究』４　雄山閣出版

1991　「九州」『古墳時代の研究』６　雄山閣出版

Ⅶ 総　　括

1　墓制について

本県を中心とした西北九州地域の弥生時代墓制については宮崎貴夫氏の論考がある（宮崎1995）。その中で県北・玄海灘地域の最も一般的な墳墓形態としてあげられているのが箱式石棺墓である。平戸市根獅子遺跡や松浦市栢ノ木遺跡，佐世保市宮の本遺跡など県北の主要遺跡では全体の３分の１～半数が箱式石棺墓で占められ，甕棺・壷棺の割合は少ない。

本遺跡では甕棺墓33基，箱式石棺墓１基，石蓋土壙墓１基，土壙墓？１基が確認され，圧倒的に甕棺の占める割合が高い。これは五島列島北部の宇久町松原遺跡や有川町浜郷遺跡と同様に，北部九州系の甕棺墓圏に属していることを示している。しかしながら，宮崎も指摘するようにこの地域では北部九州系の甕棺（註１）は少なく，日常用の壷を転用した壷棺である場合が多い。

また，一般的傾向として直立に埋置される単式棺が多いともいわれている。確かに本遺跡でも中期中頃～後半に属するものには壷を用いる例が半数を越えている（表１）。埋置角度についてはかなりばらつきがあり，主軸方位についても北～西方向と北東～東方向に大別できるだけで，時期的な差異は窺えない（第55図）。壷棺以外でも直立埋置に近いものはあり，確実に単式棺と判断されたのは石蓋をもつ30号甕棺墓しかない。以上のようなことを考えると，本遺跡は甕棺墓を主体とするとはいえ，いわゆる北部九州系の甕棺の様相とは色合いが異なっていることがわかり，宮崎氏の指摘する内容が看取できる。25号・26号甕棺の出土人骨はそれぞれ１歳前後と５歳頃の幼児ものであることが判明しているが，これら甕棺の法量（註２）から見ても被葬者は小児に限定されていると考えて良いのでは

挿図番号	遺構番号	器形 上	器形 下	構造	主軸方位	埋置角度	打欠	穿孔	人骨	副葬品	時期（弥生時代）	備考
第12図	ＳＴ１	甕	壷	－	Ｎ 59° Ｗ	39°	－	底部	－	管玉4	中期後半	上甕口縁部に赤化粧粘土
第12図	ＳＴ２	壷	壷	覆口式	Ｎ 50° Ｗ	48°	－	－	－	小玉60	後期中頃	上壷に赤色顔料
第12図	ＳＴ３	－	甕	－	Ｎ 62° Ｗ	56°	－	胴部	－	－	後期中頃	
第12図	ＳＴ４	－	壷	－	Ｎ 98° Ｗ	61°	－	－	－	－	後期前半	
第12図	ＳＴ５	甕	甕	－	Ｎ123° Ｗ	51°	－	－	－	－	中期中頃	
第12図	ＳＴ６	甕	甕	合口式	Ｎ 5° Ｅ	60°	－	－	－	－	中期中頃	下甕口縁部に赤色顔料
第12図	ＳＴ７	－	壷	－	Ｎ 57° Ｗ	34°	－	－	－	鉄釧	中期後半	下壷胴部に赤色顔料
第13図	ＳＴ８	甕	甕	覆口式	Ｎ 25° Ｗ	30°	口縁部	胴部	○		中期後半	上甕口縁部に赤化粧粘土 下壷に赤色顔料
第13図	ＳＴ９	甕	甕	－	Ｎ123° Ｗ	51°	口縁部	底部	－	－	後期前半～中頃	三連甕棺
第13図	ＳＴ10	－	甕	－	Ｎ 56° Ｗ	63°	－	底部	－	－	後期中頃～後半	
第36図	ＳＴ11	－	甕	－	Ｎ 45° Ｅ	32°	－	胴部	－	－	後期後半	
第36図	ＳＴ12	－	甕	－	Ｎ 75° Ｅ	51°	－	－	－	－	後期中頃	
第36図	ＳＴ13	－	甕	－	Ｎ131° Ｅ	36°	－	－	－	－	後期中頃	
第36図	ＳＴ14	甕	甕	－	Ｎ 93° Ｅ	67°	－	－	－	－	後期前半～中頃	
第36図	ＳＴ15	－	甕	－	Ｎ 92° Ｅ	44°	－	胴部	－	－	後期前半	
第36図	ＳＴ16	甕	甕	覆口式	Ｎ128° Ｅ	21°	口縁部	－	－	－	後期後半	
第36図	ＳＴ17	甕	壷	覆口式	Ｎ 8° Ｗ	21°	口縁部	－	－	－	中期前半～中頃	下壷に赤色顔料
第36図	ＳＴ18	－	甕	－	Ｎ 42° Ｗ	78°	－	底部	－	－	中期中頃	
第37図	ＳＴ19	甕	壷	－	Ｎ 66° Ｅ	73°	口頸部	底部	－	－	中期中頃～後半	下壷に赤色顔料
第37図	ＳＴ20	－	甕	－	Ｎ 61° Ｅ	40°	－	－	－	－	中期中頃～後半	石支え？　配石？
第37図	ＳＴ21	－	甕	－	Ｎ 87° Ｅ	6°	－	－	－	－	中期中頃	
第37図	ＳＴ22	－	壷	－	Ｎ 36° Ｗ	－	－	底部	－	－	中期中頃～後半	
第37図	ＳＴ23	甕	甕	合口式	Ｎ 84° Ｅ	23°	－	底部	－	－	中期中頃	三連甕棺，石支え
第37図	ＳＴ24	－	甕	－	Ｎ 82° Ｗ	60°	－	－	－	－	中期後半	
第37図	ＳＴ25	甕	甕	－	Ｎ 52° Ｗ	53°	口縁部	胴部	○	管玉2	後期初め	
第37図	ＳＴ26	－	甕	－	Ｎ 6° Ｗ	47°	－	底部	○	－	後期初め～前半	
第38図	ＳＴ27	甕	甕	－	Ｎ 51° Ｅ	59°	－	－	－	－	中期末～後期初め	
第38図	ＳＴ28	－	甕	－	Ｎ120° Ｅ	35°	－	底部	－	－	後期中頃	
第38図	ＳＴ29	－	甕	－	Ｎ160° Ｗ	40°	－	底部	－	－	中期後半	
第38図	ＳＴ30	－	甕	－	Ｎ 68° Ｗ	63°	－	底部	－	－	中期後半	石蓋，単棺，赤色顔料あり
第38図	ＳＴ31	－	甕	－	Ｎ 76° Ｗ	51°	－	胴部	－	－	中期中頃	
第38図	ＳＴ32	壷	甕	－	Ｎ 25° Ｗ	73°	－	底部	－	－	中期中頃	
第38図	ＳＴ33	甕	壷	－	Ｎ128° Ｅ	5°	－	－	－	－	中期中頃～後半	

表１　甕棺墓一覧表

ないだろうか。時期的には弥生中期中頃～後期後半まであり，ピークは中期中頃と後期中頃にある。

本遺跡の埋葬の特徴として,2つの墓が並置される傾向が窺える。これについては宇久松原遺跡でも同様の事例（註３）がある。遺跡の立地環境の相違もあり，同一の視点で論じられないため，今後事例の増加を待って検討を行いたい。

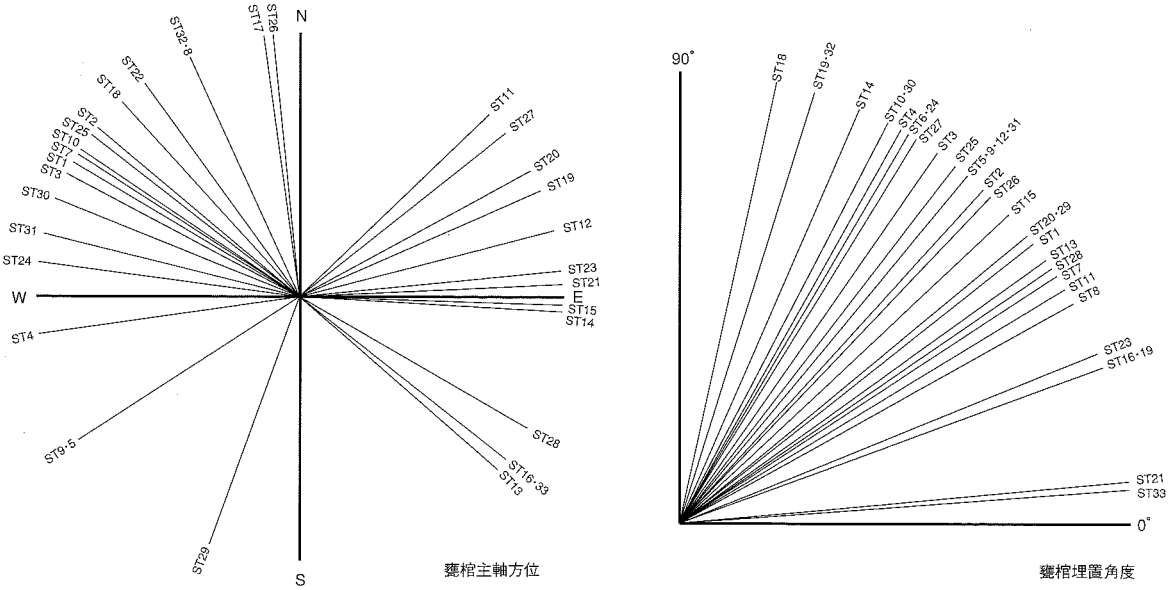
また，本遺跡の埋葬施設では近接して埋置されているにもかかわらず，お互いの切り合い関係が全くみられなかった。埋葬に際して，地表に何らかの標式があったものと想定される。

2　副葬品について

７号甕棺墓から出土した鉄釧は中部地方から関東地方での出土例が多いことで知られている。県内では対馬美津島町白蓮江第２遺跡（小田ほか1974）の石棺と五島有川町浜郷遺跡（鏡山ほか1964）があり，九州では佐賀県東脊振村三津永田遺跡（金関ほか1961）の採集品等の出土が知られるものの，総じて九州での出土例は極端に少ない。弥生後期の墓の副葬品として出土しているものがほとんどであるが，本遺跡の場合は壷棺の特徴などから弥生中期後半に比定される。型式的には牛山英昭氏のいう「円環型鉄釧」（註４）に属し，前述の３遺跡も同様のタイプになる。

五島列島から北部九州一帯は貝輪装着例の報告が顕著であり，特にイモガイ・ゴホウラといった南海産の巻貝を用いた貝輪は，青銅で模した銅釧として新たな発展を遂げることはよく知られている。そのなかでも「帯状円環型銅釧」はイモガイを横方向で輪切りにした貝輪に祖形を求められるとされ（註５），本例の鉄釧も同形態をなすことから，川越哲志氏は「イモガイ横切り貝輪の材質転換型」（川越1993）と述べている。さらに着装者についても女性であったことが想定されている。

「帯状円環型銅釧」が中部・関東地方に偏在することについて井上洋一氏は「縄文的色彩の濃い風



第55図　甕棺墓主軸方位，埋置角度

土だけに，縄文時代からの習俗，つまり二枚貝などを用いた貝輪をこの地方独自の形に変化させた可能性も考えてみなければならない。」とし，「長野・群馬などにみられる同様の形態を示す鉄釧との相関関係についても十分考慮していかねばなるまい。」と結んでいる（井上1989）。

実際，このタイプの鉄釧が出土する五島～対馬一帯の弥生時代貝輪の原材料としてはベンケイガイ・サルボウ・タマキガイといった二枚貝が最も多い。縄文的生活様式を残すのは西北九州島嶼部の特徴でもあり，東日本との共通項といえないことはない。安易に両地域を結びつけることには慎重にならざるを得ないが，入手困難な南海産大型巻貝に対して，近海で比較的容易に採集できる貝を祖形として採用した可能性については今後の課題として残るであろう。南海産の貝類がもたらされなかった本遺跡は西北九州地域においても主流とはなりえず，交易ネットワークの拠点的位置を占めることができなかったことを示唆しているように思われる。

25号・26号甕棺墓からはイノシシ類の臼歯が出土している。どちらも上甕を削平されているので混入の可能性は否定できないが，甕棺内の土をふるいにかけたところ確認できた。イノシシを副葬する例としては有川町浜郷遺跡（註６）と福江市大浜遺跡などが知られており，イノシシの下顎骨や尺骨が貝輪やアワビなどとともに副葬されている。

本遺跡の場合も五島列島と同じような慣習に従ったものであろうか。西本豊弘氏は本稿の中で「中国では，新石器時代から漢代に至るまで，ブタの頭骨が墓に副葬されることがよく知られている。」とし，習俗の起源が大陸にあることを示唆している。興味深い説であり，今後は注意深く類例を探っていきたい。

3　祭祀土壙について

１号土壙については直径２ｍほどの円形土壙から多数の礫に混在して土器や石器などの遺物と獣骨片が出土した。炭化物や被熱した礫もあり，何らかの祭祀行為が行われたものと推定されている。土壙の主体をなすのはアシカ（註７）で，石器類によって解体（註８）された雄の亜成獣の骨が中央～南半分に集められている。クジラ類は南隅，イノシシは北西側，シカは北側に集中する。

アシカの骨が出土した範囲には礫の集中もみられ，両者の分布は重なりあっていたことがうかがえる。多数の土器片や被熱した礫も同様の出土状態をみせる。イノシシの周囲にも礫の集中がみられたが，規模は径70cmほどとかなり小さい。祭祀行為で使用された土器は礫とともに獣類を覆うよう廃棄されたと考えることができよう。

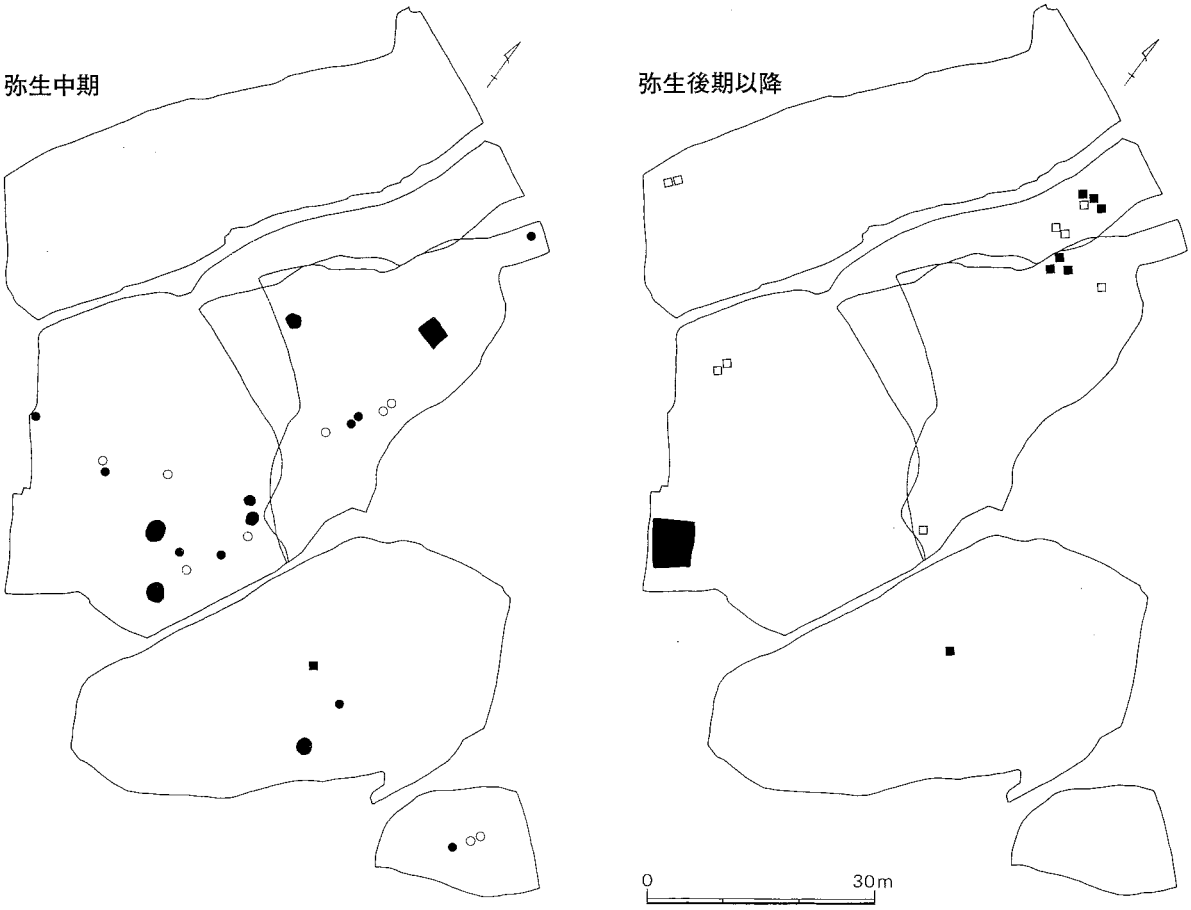
県内の祭祀遺構としては大村市富の原遺跡（稲富1987），諫早市林ノ辻遺跡（秀島1983）の例があげられる。長畑馬場遺跡の場合，丹塗り土器や高坏といった祭祀を連想させる遺物が特段に多いわけではなく，1号土壙ではおびただしい量の獣骨と破砕された日常土器・礫が重なり合って出土する。どのような祭祀行為が行われたかは知る由もないが，ここでは丹塗土器が一片もみられないことから，丹塗土器を使用する前段階の祭祀と考えた方が妥当かもしれない。

4　遺構の時期的変遷について（第56図）

本遺跡の遺構は弥生中期中頃を中心に古墳時代初頭まで継続していたことが判明している。まず中期中頃に調査区の中央付近で住居跡・土壙とともに甕棺墓が形成される。やがて周囲に拡散しはじめ，後期にはいると台地の最頂部周辺に墓域が設けられる。また，それとは別の小規模な墓地が点在するようになる。住居は墓域とはやや離れた場所に形成されるが，土壙は伴わない。

中期段階では居住区と墓域を区別しないで営まれている。後期以降になると墓域と居住区は一応区分けされているかのような印象を受ける。ただ，住居跡はそれぞれ１軒ずつで，集落と呼べるほどのものではない。住環境が恵まれているとはいえない土地柄であるためか，典型的な散村形態を示している。土壙も後期のものは見られず，もっぱら中期の祭祀行為や廃棄行為のためだけに形成されたかのようである。中期後半以降になって糸島型の祭祀土器が流入するにつれ，伝統的祭祀行為からの脱却が図られたものであろうか。副葬品を持つ甕棺が見られるのもこの頃からである。

小田富士雄氏や正林護氏が早くから指摘しているように，五島列島と西北九州地域では専ら弥生中期後葉～後期初頭頃に遺跡数が激減する傾向がみられる（註９）。ところが本遺跡をはじめとして，小値賀町神ノ崎遺跡や平戸市度島中学校遺跡・大島村大根坂遺跡では様相をやや異にする。弥生中期の小海進による海水面の上昇で海浜部の遺跡は影響を被ることになったかもしれないが，もとより台地上に営まれていた本遺跡などは宮崎氏のいう「正の要因」（宮崎1995）として働いた事例といえる



第56図　長畑馬場遺跡　遺構変遷図

○は中期中頃～後半
●は中期後半
□は後期前半～中頃
■は後期後半以降

だろう。その結果，海への比重がこれまで以上に高まり，海へ目を向けさせる契機となったとも考えられる。

5　遺物について

(1)古式土師器について

古式土師器については近年における古門雅高氏の積極的な研究がある（古門1997・2000)。本遺跡でも２号住居跡から良好な資料が得られ，表採ではあるが粗いタタキ目を残す甕の胴部片も出土している。庄内系土器の影響下に成立した在地系甕といえ特筆できる。本県では庄内系二重口縁壷はあるものの明確な庄内系甕は確認されていない（古門1997)。本例はタタキが細筋ではないものの，庄内系の要素はうかがえる資料として貴重である。

本来なら本遺跡の２号住居跡出土土師器についても検討を加え，県内での編年的位置づけを行うべきであるが，原の辻遺跡の継続的な発掘調査により古式土師器の資料が増えつつあり，ある程度出揃った段階で改めて論考をおこしたい。

(2)石鎌・鉄鎌について

本遺跡では直接的に漁撈をうかがわせる遺物はみられないものの，農耕具の類は比較的多い。収穫具としては石庖丁が全くみられず，石鎌や鉄鎌がある。

２号住居跡からは手鎌が出土する。手鎌の分布は北部九州に限られているようで，時期も庄内式併行期前後と限定されている（寺沢1985)。２号住居跡出土はまさにこれまでの事例と適合するものといえるだろう。鉄鎌は松井和幸氏の型式分類に従えばⅡa小型曲刃鎌になろうか（松井1985)。稲の根刈り用ではなく，穂首刈り用として用いられたとされている。出現の時期は後期後半から終末頃に考えられているが，本遺跡資料もその頃に比定して大過ないであろう。本県では対馬峰町木坂遺跡，壱岐原の辻遺跡・カラカミ遺跡，本土部の森山町西ノ角遺跡で出土が知られ（川越2000)，いずれも

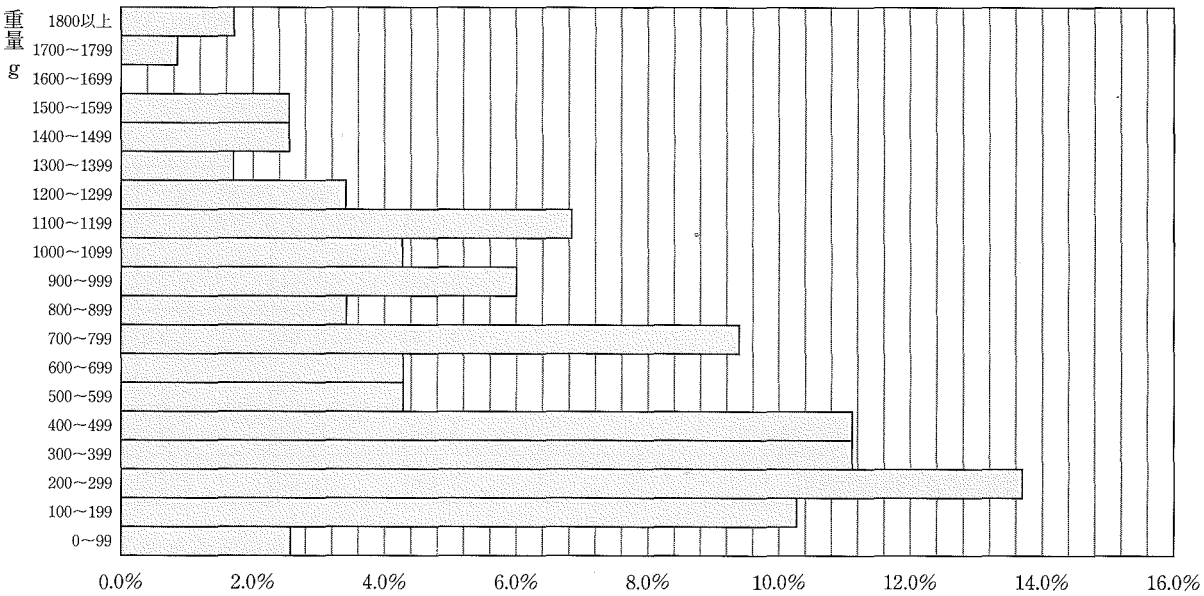


表２　礫石器重量別分布表

後期後半～終末に比定されている。

石鎌はその８割以上が玄海灘沿岸から響灘沿岸地域に分布するといわれる。本遺跡の資料は磨製－内湾刃－薄手のもので，水島稔夫氏の分類ではＩ類ｂになる（水島1985）。用途としては「石庖丁（摘鎌）と補完しあうもの」であろうとされる。Ｉ類の石鎌は中期後半～後期にかけて鉄鎌にとってかわるとされ，当遺跡では石鎌から鉄鎌・手鎌への変遷がみてとれることになる。

石器では上記のほかに，生産工具としての砥石や台石・紡錘車，狩猟採集具として石鏃や石剣，耕作具としての石斧等，ほとんどが揃っている。なかでも顕著なのが調理具の敲石・磨石の類で，数量的には他を圧倒するほどである。これら礫石器については重量別分布表（表２）を掲載したので参照されたい。重量1700ｇ以上のものは石皿であるが，H10区ｐ５のように据え置かれるようにして出土した事例もある。本来調理加工具であるはずのものの出土状態としては不可解なところがあり，実用的用途とは別の，例えば祭祀的な利用を考えたほうがよいのであろうか（註10）。現在の筆者では力不足で論じ得ない。

6　ま　と　め

本遺跡のある大島村は壱岐とは一衣帯水の地であり，盛衰をほぼ共にする状況が各所にうかがえる。また，平戸や生月，北松浦や東松浦の半島は交易ルート上にあり，五島列島や対馬を含め同じネットワークで結ばれた集団であったかと推測される。

特に弥生中期後半以降は「糸島型祭祀用土器」（石橋1992）を採用するにいたり，壱岐を介して伊都国の影響下におかれたであろうことは，各種の出土遺物が雄弁に物語る（註11）。甕棺墓制の採用や金属器・古式土師器等の流入は，それまでのマージナルな立場からの脱皮を迫り，より政治的な関係へと移行をうながすものではなかったかと思えてならない。西北九州島嶼部の遺跡のあり方は，政治再編の動きが地方に伝播してゆく有り様を垣間見ることのできる格好の材料なのかもしれない。

番号		色　　調	径（mm）	長さ（mm）	孔径（mm）	重さ（g）
1	ST1-1	g12(grayish green)	5.50	15.37	2.24	0.74
2	ST1-2	g16(grayish greenish blue)のやや暗め	5.09	20.79	2.87	0.80
3	ST1-3	g12(grayish green)	5.19	15.89	2.26	0.71
4	ST1-4	g12(grayish green)	4.67	12.62	2.34	0.44
5	ST25-大	g14(grayish blue green)	3.68	7.83	2.42	0.15
6	ST25-小	g12(grayish green)	3.60	6.40	2.22	0.12

【註】色調は新配色カード１７５ａ（財団法人日本色彩研究所監修）による。

表３　管玉計測表

【註】

註1　ここでいう北部九州系の甕棺とは日常用の甕の転用品等ではなく，成人棺として利用できるような専用の大形甕棺を意味する。

註2　25号・26号甕棺は本遺跡出土の中では比較的大振りの部類に属すると思われるが，それでも小児棺として用いられていることは，成人の埋葬は別の墓制が採用されていたことの証左であろう。本遺跡の場合，小児用の埋葬地として利用されたものと解釈される。

註3　宇久松原遺跡（宮崎1983）では「小児カメ棺を埋置する際出土した骨をカメに入れ並置したものであろう。」と報告され，「埋葬する際に以前の人骨をカメに納めたり石棺に集骨した結果であると思われる。」とされている。砂地での埋葬の場合は人骨が遺存しやすいために前述のような報告がなされたと思われるが，当地は玄武岩風化層を地山とする溶岩台地で，人骨が残りにくい条件下にある。

註4　牛山英昭　1998「4.七社神社前遺跡出土の鉄釧」『七社神社前遺跡Ⅱ』北区埋蔵文化財調査報告書第24集　東京都北区教育委員会

註5　小田富士雄　1974「日本で生まれた青銅器」『古代史発掘』5　講談社

註6　浜郷遺跡（小田1970）の報告では「棺の近くや被葬者の埋葬位置上層部にイノシシの顎骨があたかも散布したかのような状態で発見され，しかもそれが下顎骨に限られているところから，これが人為的な埋葬習俗であることが知られたのである。」と記している。

註7　県内でアシカの骨が出土した事例では，対馬峰町佐賀貝塚（正林1989），福江市大浜遺跡（酒詰1964），富江町宮下遺跡（川道1998）の3遺跡があり，このうち大浜遺跡以外は縄文時代の遺跡である。ニホンアシカは現在絶滅種とされているものの，かつては日本列島近海に生息していたようで，対馬や五島列島は大型海獣類の回遊路になっていたといわれている（宮路1998）。アシカもクジラやイルカ等のように積極的に捕獲されていたかどうかは定かではないが，対馬海流沿いの生活環境は共通する部分が多いことを改めて感じさせる貴重な資料といえる。

註8　アシカの解体痕に複数条の傷がみられたことから，西本豊弘氏とともに長畑馬場遺跡の動物遺体の同定を行っていただいた鵜沢和宏氏は，鋭利な金属器ではなく打製石器のような利器を用いたのではないかと指摘された。

註9　小田富士雄　1983「西北九州」『三世紀の考古学』下巻　学生社

正林護　1980「殿寺遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第50集　長崎県教育委員会

註10　安達厚三　1983「石皿」『縄文文化の研究』7　雄山閣

この中で安達氏は「石皿は，このような実用的用途のほかに，祭祀的用途にも使われたようである。（中略）石皿にもこうした側面があったことは否定できないものと思われる。」とし，出土状況の検討の必要性を述べている。縄文時代の石器と同列には比較できないであろうが，可能性の一つとして提起しておきたい。

註11　例えば，本遺跡出土の銅鏃は原の辻遺跡から大量に出土しているものと同じ有茎柳葉鏃で，供給先はまさに壱岐であったろうと考える。

【引用・参考文献】

村川逸朗　1992『大根坂遺跡』大島村文化財調査報告書第６集　長崎県大島村教育委員会
宮崎貴夫　1983「宇久松原遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報』Ⅵ　長崎県文化財調査報告書第66集　長崎県教育委員会
小田富士雄ほか　1974『対馬－浅茅湾とその周辺の考古学調査』長崎県文化財調査報告第17集　長崎県教育委員会
鏡山猛ほか　1964『五島遺跡調査報告』長崎県文化財調査報告第２集　長崎県教育委員会
金関丈夫ほか　1961「佐賀県三永田遺跡」『日本農耕文化の生成』　東京堂出版
川越哲志　1993「第５節　２鉄製腕輪」『弥生時代の鉄器文化』雄山閣出版
井上洋一　1989「銅釧」『季刊考古学』第27号　雄山閣
小田富士雄　1970「五島列島の弥生文化－総説編－」『長崎大学人類学考古学研究報告』２
正林　護　1989『佐賀貝塚』峰町文化財調査報告書第９集　長崎県峰町教育委員会
酒詰仲男　1964「大浜遺跡」『昭和37・38年度五島遺跡調査報告』長崎県教育委員会
川道　寛　1998『宮下貝塚』富江町文化財調査報告書第１集　長崎県富江町教育委員会
宮路淳子　1998「宮下貝塚出土の動物遺存体」『宮下貝塚』富江町文化財調査報告書第１集　長崎県富江町教育委員会
稲富裕和　1987『富の原－大村市富の原１・２丁目に所在する遺跡群の範囲確認調査』大村市文化財保護協会
秀島貞康　1983『林ノ辻遺跡』諫早市文化財調査報告書第４集　諫早市教育委員会
宮崎貴夫　1995「五島列島の弥生・古墳時代の墓制と文化－西北九州地域との比較を中心として－」『風土記の考古学』第５巻　同成社
古門雅高　1997「有明海西部地域の古式土師器」『稗田原遺跡Ⅰ』長崎県文化財調査報告書第136集　長崎県教育委員会
古門雅高　2000「黄金山古墳出土土師器の検討」『西海考古』創刊号　西海考古同人会
寺沢知子　1985「10.鉄製穂摘具」『弥生文化の研究』５　雄山閣
松井和幸　1985「12.鉄鎌」『弥生文化の研究』５　雄山閣
川越哲志　2000『弥生時代鉄器総覧』（東アジア出土鉄器地名表Ⅱ）広島大学文学部考古学研究室
水島稔夫　1985「11.石鎌」『弥生文化の研究』５　雄山閣
石橋新次　1992「糸島型祭祀用土器の成立とその意義」『北部九州の古代史』　名著出版
宮崎貴夫　1985『西ノ角遺跡』長崎県文化財調査報告書第73集　長崎県教育委員会

Ⅷ　自然科学分析

長崎県大島村長畑馬場遺跡出土の弥生時代人骨

佐伯和信*・分部哲秋*・長島聖司*

はじめに

長崎県北松浦郡大島村戸田長畑に所在する長畑馬場遺跡の発掘調査が中山間事業に伴って平成10年（1998年）９月28日から10月30日までと平成11年（1999年）６月28日から10月１日までの２カ年に渡って行われ，平成11年の調査の結果，弥生時代中期から後期に属すると考えられる土壙墓と甕棺墓から人骨が３体（成人１体，未成人２体）検出された。

離島を含む長崎県の海岸部を中心とした地域（西北九州地域）からは，長崎市の深堀遺跡，五島列島の浜郷遺跡など弥生時代の人骨が比較的多く出土している。これらをまとめた内藤[1,2]は「この地域の弥生人は低顔・低身長を形態的特徴とし，生活基盤を狩猟・採集に依存していたと考えられることなどから，縄文人の継続であり新しい種族の影響を受けたとは考えにくい」とし，渡来者の影響を受けていると考えられる佐賀県三津永田遺跡[3]や山口県土井ケ浜遺跡[4]の人骨に代表される北部九州・山口地域の高顔・高身長の弥生人骨と区分して，西北九州の弥生人骨として一地方型を設定した。

本遺跡は，地域的には西北九州地域に位置しており，西北九州弥生人骨の追加例ということになるが，今後の形質人類学上の基礎資料とするため，観察や計測の結果を記載しておきたい。

資料および方法

長畑馬場遺跡は図１に示すように的山大島の西側で的山湾に面する標高約40mの丘に位置している。今回の発掘調査で１基の土壙墓と33基の甕棺墓が検出され，そのうち土壙墓から成人骨が，甕棺墓２基から幼児２体の人骨が出土している。これら人骨について，性別および年齢を推定した結果を表１に示す。

表１　出土人骨一覧

人骨番号	性別	年　齢	墓制	備考
ＳＸ－１	女性	成　人	土壙墓	仰臥屈葬
ＳＴ－25	－	約１歳	甕棺墓	
ＳＴ－26	－	約５歳	甕棺墓	

各人骨の計測は主としてMartin-Saller[5]に従って行ったが，脛骨の横径については，Vallois[6]の方法で計測した。幼児の年齢については歯の形成状態[7]，四肢骨の大きさから推定した。

人骨所見

ＳＸ－１（成人女性）

埋葬姿勢は頭位が北西で上肢，下肢ともに屈曲した仰臥である。供伴遺物は特にないが，現在もこの地域の埋葬風習として残る「まさご石」を供していた。人骨は全身的に遺存しているが，骨質がも

＊長崎大学医学部解剖学第二教室

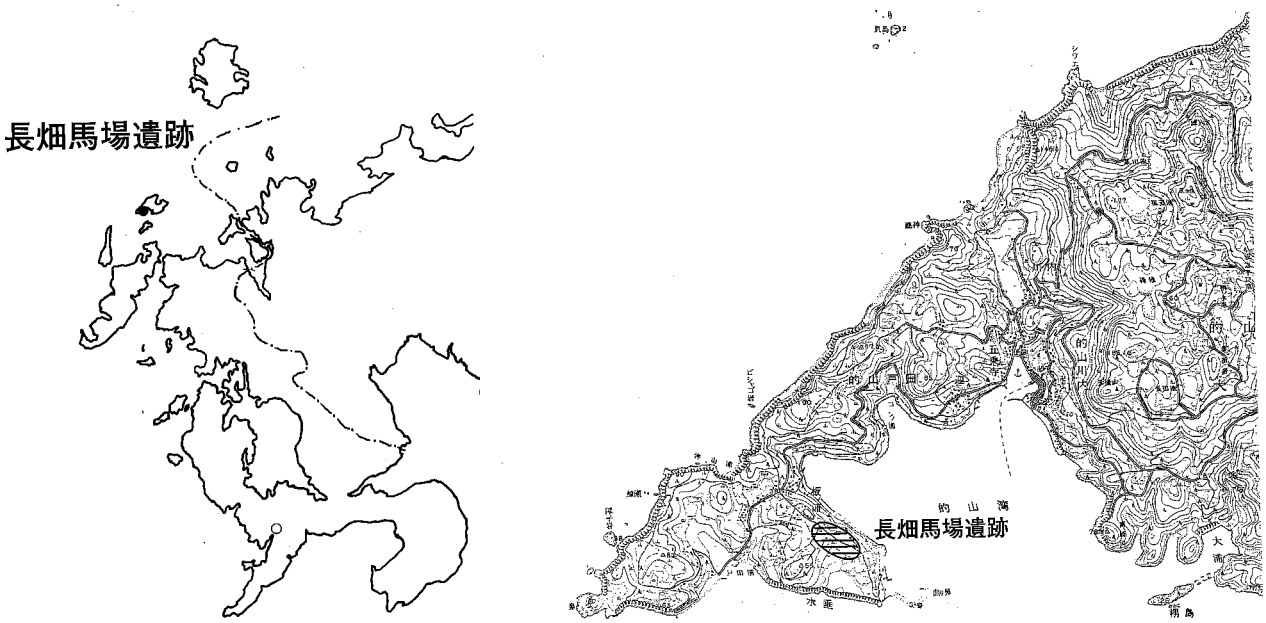
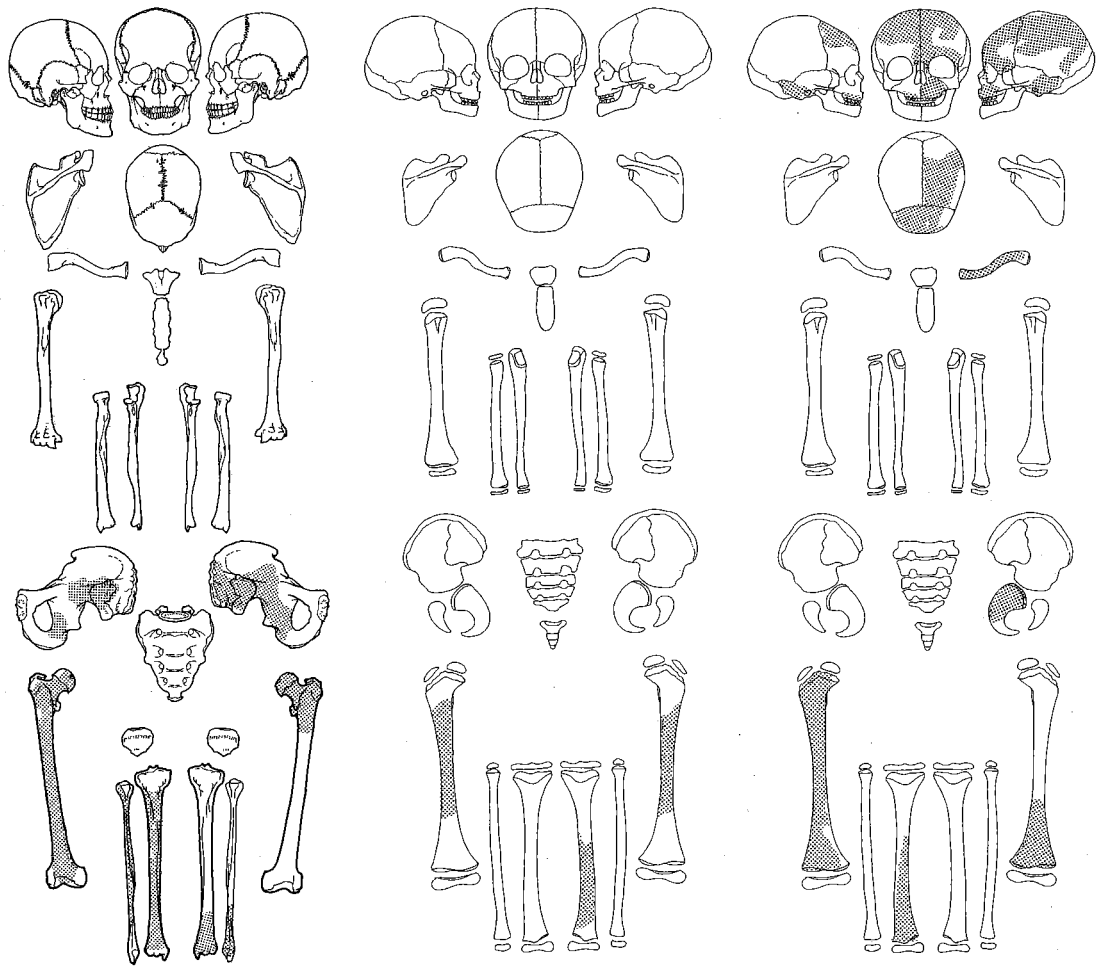


図１　遺跡の位置



ＳＸ－１（成人女性）　ＳＴ－25（幼児）　ＳＴ－26（幼児）

図２　人骨の残存部位（アミかけ部）

ろく取り上げ後，同定できた骨部位は図２に示す寛骨，大腿骨，脛骨および腓骨に限られた。頭蓋は頭頂骨を中心とした頭蓋冠の破片がかなり残存しているが，小さい破片が多く接合するのは困難で，復元できなかった。頭蓋の形態的特徴を知ることはできないが，頭蓋の骨壁は比較的薄く女性的な印象を受ける。

寛骨は両側ともに耳状面から大坐骨切痕にかけての部位が残存している。大坐骨切痕の角度は大きく，女性の特徴を示している。大腿骨は，右側はほぼ全長が残存し，左側は上部のみが残存している。骨頭は小さく，骨体は細い。骨体後部の粗線の発育は悪く滑らかな稜線状である。計測値は骨体中央矢状径が23㎜，骨体中央横径が23㎜，骨体中央周が72㎜で，計測値からも細いことがうかがえる。残存部から推定した大腿骨の最大長は約410㎜で，これより推定した身長値は152㎝を超えることから，本人骨は当時の女性としてはやや高身長であったと思われる。脛骨は右側の骨体部分と左側の下端が残存している。大腿骨と同様に骨体は細く，骨体後面のヒラメ筋線の発育も悪い。計測値は，中央最大径が24㎜，中央横径が17㎜，骨体周が66㎜でかなり細い。腓骨も右側骨体の大部分と左側の下端が残存している。大腿骨，脛骨と同様に細い骨体である。

表２　大腿骨および脛骨主要計測値比較表（女性，右側，㎜）

			長畑馬場	宇久松原土壙墓		宮の本		大　友		三　津	
			ＳＸ-1	N	M	N	M	N	M	N	M
大腿骨	6	骨体中央矢状径	23	2	24.5	12	23.7	30	26.0	13	26.3
	7	骨体中央横径	23	2	24.0	12	24.3	30	25.0	13	25.4
	8	骨体中央周	72	2	75.5	10	75.4	28	80.3	13	81.8
	6／7	骨体中央断面示数	100.0	2	102.1	12	97.3	30	104.1	13	101.5
脛　骨	8	中央最大径	24	2	25.5	9	26.3	27	27.3	12	27.7
	9	中央横径	17	2	18.5	9	18.8	29	19.5	12	20.0
	10	骨体周	66	2	70.5	9	71.4	27	74.7	12	77.5
	9／8	中央断面示数	70.8	2	73.0	9.0	71.5	27	71.8	12	72.8

大腿骨と脛骨の計測値を同じ西北九州地域の宇久松原[8]，宮の本[9]，大友遺跡[10]の人骨と北部九州地域の三津永田遺跡[3]の人骨と比較してみると（表２），長畑馬場の大腿骨および脛骨は径，周径ともに最も小さく，骨体が細いことがより明確となる。西北九州地域の弥生人の大腿骨，脛骨は，大友遺跡の人骨が比較的太いものの，北部九州地域の弥生人に比べ細い傾向が認められるが，長畑馬場にもその特徴が表れているのではないかと考えられる。また，脛骨の中央断面示数は比較群の中で最も小さく，やや扁平傾向が見て取れるが，その程度は強いものではない。

本人骨は前述のように、骨盤の形態から女性と推定されるが，年齢については判断する部位が残存しておらず不明である。

ＳＴ－25（幼児）

頭蓋骨の骨片が少量と両側の大腿骨の骨体，および左側脛骨の下半が残存している（図２参照）。歯が残存していないので下肢骨の計測値から年齢推定を試みる。大腿骨骨体中央周は右側が27.5㎜，左側が27.0㎜で，大友弥生人幼小児骨[11]と比較すると1.5歳の値（33.0㎜,29.5㎜）と新生児値（18.0㎜～23.0㎜）の間を示している。脛骨骨体周は28.0㎜（左）で，大友弥生人幼小児骨の1.5歳の値と一致している。従って，本人骨の年齢は１歳前後と推測される。

ＳＴ－26（幼児）

頭蓋骨，左側鎖骨，肋骨片，左側坐骨，両側の大腿骨および右側脛骨が残存している（図２参照）。頭蓋骨は前頭骨と左側頭頂骨の大部分，側頭骨の外耳孔周囲，上顎骨の歯槽部と左側は前頭突起が残存している。前頭骨は，前頭縫合がすでに閉鎖し，前額部は幼児らしく丸く膨隆している。左側の眼窩上縁の傾斜は緩く，比較的直線的である。側頭骨の外耳道には骨腫は認められず，また鼓室骨裂孔も認められない。上顎骨の前頭突起は矢状方向に近く，鼻骨の隆起を想起させる。上顎骨には歯が釘植しており残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと次のとおりである。

／ P_2 P_1 ／ ／ I_1	／ I_2 C P_1 P_2 M_1 M_2
m_2 m_1 ○ ○ ○	／ i_2 ○ m_1 m_2
／ ／ ／ ／ ／	／ ／ ／ ／ ／
／ ／ ／ ／ ／ ／	／ ／ ／ ／ ／ M_1

［○：歯槽開存
／：不明
▒：歯槽内に埋状していると予想される歯］

乳歯の咬耗度はBroca１度から軽度の２度で比較的弱い。永久歯はすべて未萌出歯で，上顎M_1の歯根が１／５程度が形成され，上顎I_1の歯根はほとんど形成されていない。これら歯の形成状態から本人骨は５歳程度の幼児と推測される。

大腿骨は右側がほぼ完全に残存している。粗線はまだ未発育で鈍な稜線状になっている。骨体中央周は44㎜で，大友弥生人幼小児骨[11]と比較すると2.5歳（34.0㎜）と７歳で（47.5㎜）の間の値を示し，歯の形成状態から推定した年齢と矛盾はない。脛骨は下半が残存しているが，骨体は扁平性は認められない。

ま と め

長崎県北松浦郡大島村の長畑馬場遺跡の発掘調査の結果，弥生時代中期から後期に属すると考えられる土壙墓から成人骨１体と甕棺墓から未成人骨２体が検出された。人骨の人類学的な観察や計測の結果は次のように要約される。

1．成人骨（ＳＸ－１）は骨盤の形態から女性と推定され，年齢は不明である。埋葬姿勢は頭位を北西に向けた仰臥屈葬である。頭蓋骨および上肢骨の形態は不明であるが，下肢骨は骨体が細くて筋付着部も発育が悪くきゃしゃで，脛骨には弱い扁平傾向が認められる。下肢骨が細いことは，西北九州地域の特徴が表れていると考えられる。

2．２体の未成人骨については，１体（ＳＴ－25）は大腿骨と脛骨の大きさから約１歳と推定され，もう１体（ＳＴ－26）は歯の形成状態と大腿骨の大きさから約５歳と推定される。

《稿を終えるにあたり，本人骨の研究と発表の機会を与えていただいた長崎県大島村教育委員会および長崎県教育庁文化課の諸先生方に厚くお礼を申し上げます。》

【文　献】

1）内藤芳篤（1971）；西北九州出土の弥生時代人骨，人類学雑誌，79：236-248.

2）内藤芳篤（1984）；九州における縄文人骨から弥生人骨への移行，人類学－その多様な発展，日経サイエンス社，東京：52-59.

3）牛島陽一（1954）；佐賀県東脊振村三津遺跡出土弥生時代人骨の人類学的研究，人類学研究，１：273-303.

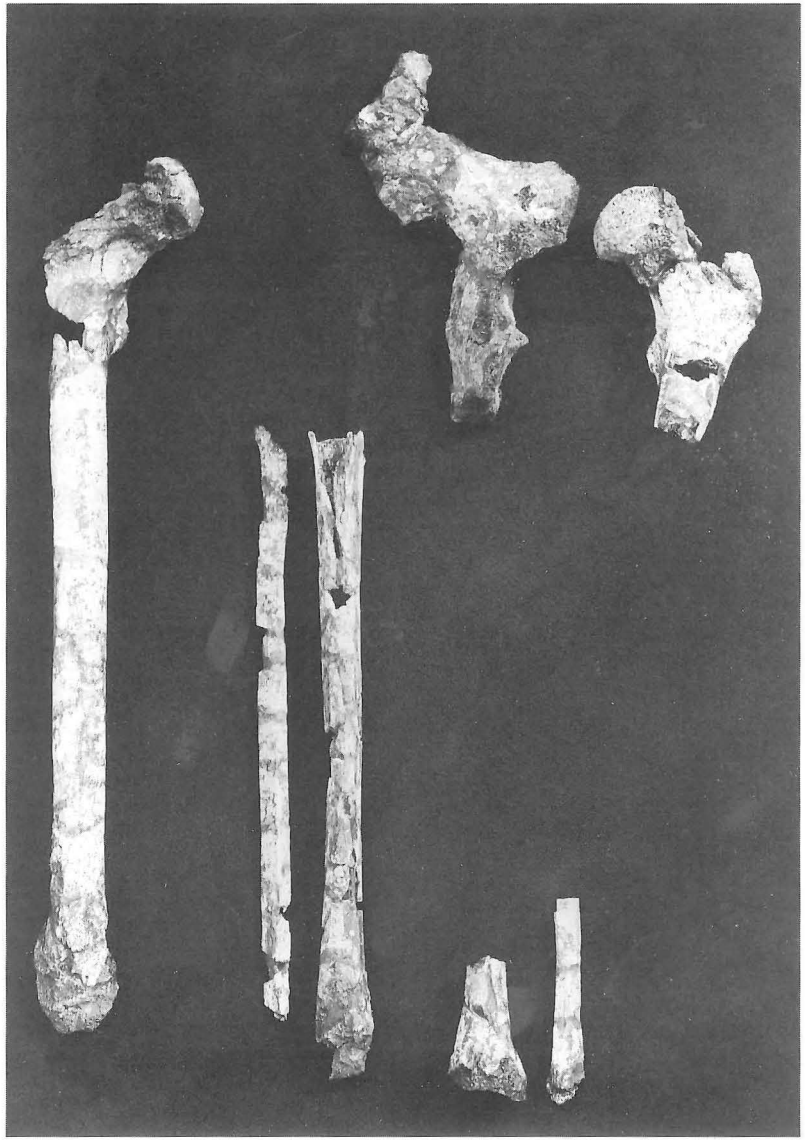
4）金関丈夫，永井昌文，佐野一（1960）；山口県豊浦郡豊北町土井ケ浜遺跡出土弥生式時代人頭骨について，人類学研究　Ⅶ：1-36.
5）Martin, R. and Saller, K.（1957）；Lehrbuch der Anthropologie, Bd. T. Gustav Fischer Verlag Stuttgart.
6）Vallois, H.- V.（1938）；Les methodes de mensuration de la platycnemie ; etude critique, Bull. Soc. Anthrop., Paris, Ser. 8，9：97-108.
7）藤田恒太郎　原著，桐野忠大　改訂（1976）；歯の解剖学，金原出版，東京.
8）佐伯和信，分部哲秋，長島聖司（1997）；長崎県五島列島宇久松原遺跡出土の縄文・弥生時代移行期人骨，宇久松原遺跡（宇久町文化財調査報告書4）：47-69.
9）松下孝幸（1981）；宮の本遺跡出土の人骨，宮の本遺跡（佐世保市埋蔵文化財調査報告書）：93-109, 145-146.
10）松下孝幸（1981）；大友遺跡出土の弥生時代人骨，大友遺跡（佐賀県呼子町文化財調査報告書1）. 254-264.
11）分部哲秋（1981）；大友遺跡出土の幼小児骨，大友遺跡（佐賀県呼子町文化財調査報告書1）. 223-253.

表3　人骨計測値一覧

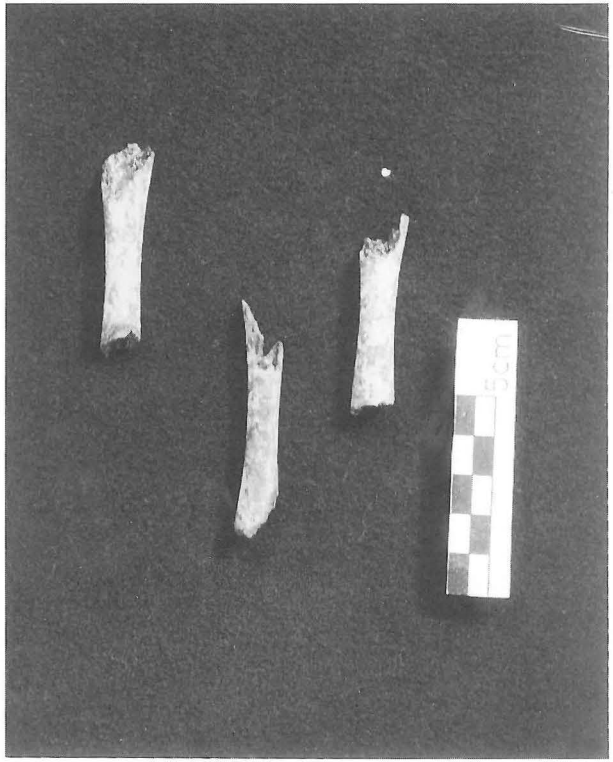
（単位：mm）

			SX-1 成人女性	ST-25 幼児（1歳）	ST-26 幼児（5歳）
頭　蓋	26	正中矢状前頭弧長	—	—	122
	29	正中矢状前頭弦長	—	—	104
	29／26	矢状前頭示数	—	—	85.2
鎖　骨	2	骨体湾曲高（左）	—	—	4
	2 a	骨体湾曲高（左）	—	—	16
	3	骨体湾曲弦長（左）	—	—	57
	4	中央垂直径（左）	—	—	5
	5	中央矢状径（左）	—	—	6.5
	4／5	鎖骨断面示数（左）	—	—	76.9
	6	中央周（左）	—	—	18
大腿骨	1	最大長（右）	—	—	179*
	2	自然位全長（右）	—	—	179*
	6	骨体中央矢状径（右）	23	7.5	14
		（左）	—	7.8	—
	7	骨体中央横径（右）	23	9.0	14
		（左）	—	8.8	—
	6／7	骨体中央断面示数（右）	100.0	83.3	100.0
		（左）	—	88.6	—
	8	骨体中央周（右）	72	27.5	44
		（左）	—	27.0	—
	9	骨体上横径（右）	—	—	16
	10	骨体上矢状径（右）	—	—	14
	10／9	上骨体断面示数（右）	—	—	87.5
脛　骨	8	中央最大径（右）	24	—	—
		（左）	—	8.9	—
	9	中央横径（右）	17	—	—
		（左）	—	8.3	—
	9／8	中央断面示数（右）	70.8	—	—
		（左）	—	93.3	—
	9 a	栄養孔位横径（右）	18	—	—
	10	骨体周（右）	66	—	—
		（左）	—	28.0	—
腓　骨	2	中央最大径（右）	14	—	—
	3	中央最小径（右）	10	—	—
	3／2	中央断面示数（右）	71.4	—	—
	4	中央周（右）	39	—	—

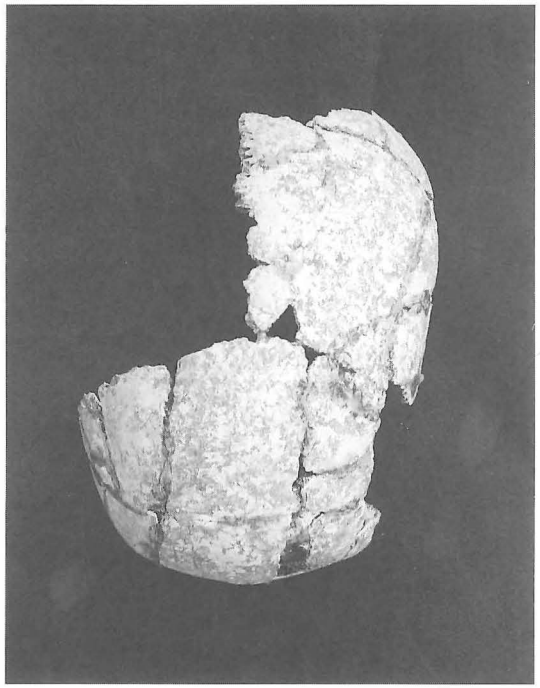
＊骨端を分離して計測

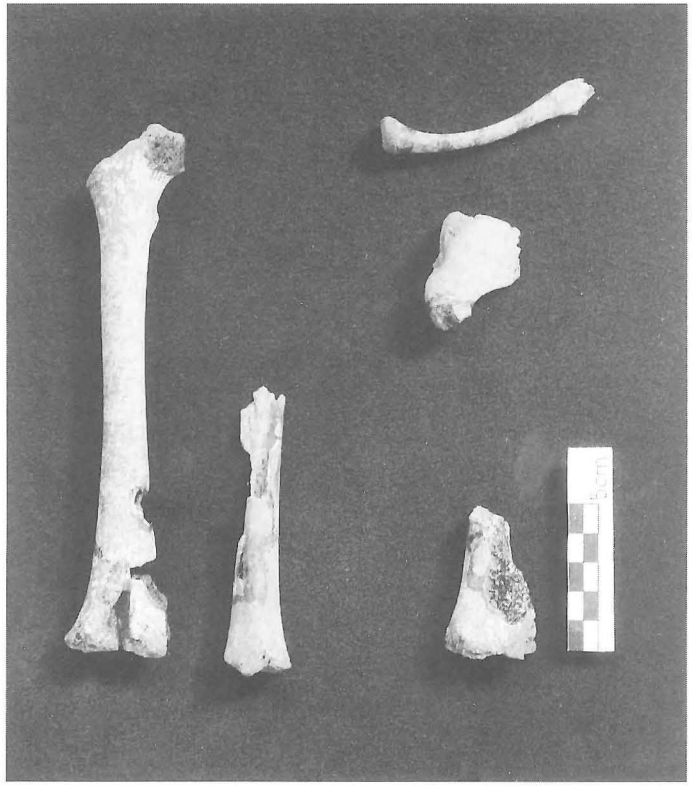


ＳＸ－１（成人女性）



ＳＴ－25（約１歳の幼児）





ＳＴ－26（約５歳の幼児）

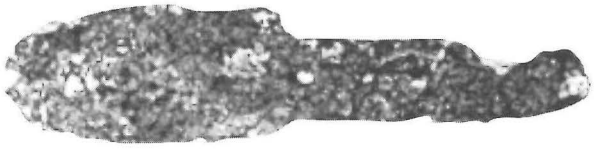
長畑馬場遺跡出土金属器の保存処理報告

比佐陽一郎（福岡市埋蔵文化財センター）
片多　雅樹（　同上　）

〈はじめに〉

長崎県大島村長畑馬場遺跡より出土した金属器２点の，保存処理を行った結果について報告する。同じ金属器でも青銅器と鉄器ということで，それぞれに適した処理を施した。また，保存処理を施す前に顕微鏡観察及び透過Ｘ線を用いた事前調査を行った。

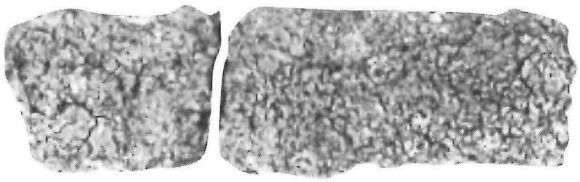
銅鏃



処理前

透過Ｘ線写真

鉄釧



処理前

透過Ｘ線写真

〈処理工程〉

銅　鏃

・顕微鏡観察……付着物（繊維など）の有無を観察。無いことを確認。
・透過Ｘ線観察……特に腐食が著しい部分は見られない。
・錆取り……顕微鏡下でメスを用いて表面に付着している土・サビを慎重に除去。
・樹脂含浸……アクリル樹脂（パラロイドＢ72）の３wt％アセトン・トルエン溶液（ＢＴＡ※含）を減圧含浸。ついで５wt％溶液を減圧含浸し強化。表面保護のため，再度10wt％溶液を表面に塗布。自然乾燥。
※ＢＴＡ（ベンゾトリアゾール）……青銅製品の防錆剤

鉄　釧

・顕微鏡観察……付着物（繊維など）の有無を観察。無いことを確認。
・透過Ｘ線観察……サビをのぞいた原型をある程度確認できた。象眼は見られない。
・錆取り……透過Ｘ線写真を参考に，エアーブラシ，グラインダーを用いてさびを落とした。
・樹脂含浸……アクリル樹脂（NAD-10）の40wt％ソルベントナフサ溶液を減圧含浸。
・表面処理……表面に残った余分な樹脂を溶剤（ソルベントナフサ）で洗い流す。自然乾燥。
・修復……セルロース系接着剤（セメダインＣ）にて接合。

〈結果〉

処理の結果，観察に耐え得る十分な強度が得られた。ＲＰシステムによるパック保存の必要はないものの，今後も著しい温湿度変化がない場所に保管することが望まれる。

長崎県北松浦郡大島村長畑馬場遺跡出土　ガラス小玉の分析について(報告)

福岡市埋蔵文化財センター
比　佐　陽一郎・片　多　雅　樹

1　はじめに

古代のガラス製品は，これまでの研究により，その流通や技術発展の過程などが解明されつつあるが，これには考古学的な調査は勿論のこと，近年の自然科学的な手法による研究成果が大きく反映されている。

今回は，福岡市の埋蔵文化財センターに新たに導入された機器を用いて，材質調査を中心とした分析を実施したもので，ここにその報告を記す。なお作業にあたっては，これまで長年ガラスの分析調査に携わってこられた，奈良国立文化財研究所の肥塚隆保氏による指導を受けた。

2　概　　要

対象となったのはガラス小玉60点で，色調は大きく淡青色系統と青紺色系統の二種類に分類できる。しかし同じ淡青色でも，青みの強いものや明るい色調のもの，緑がかったものなどがあり，青紺色も，色の淡いものから，明るいもの，暗く，黒に近いものなど様々で，更に細かい分類は困難である。大きさは径2.5㎜程度のいわゆる粟玉から，６㎜に及ぶ小玉まで様々有り，やはり規格性は見られないようである。径と長さの関係をグラフに示す。

分析に先立つ基礎調査として，アルキメデス法による，みかけ比重の測定を試みた。ただし全体的に資料が小さく，測定値にかなりの誤差があるものと思われる。測定の結果，淡青色の小玉は最小値1.48のものから最大値4.00のものまであり平均2.352,青紺色の小玉は1.73から4.00で平均2.309と，いずれも2.3強の数値を示している。この数値は，これらの玉類が鉛を含まないアルカリ珪酸塩系のガラスであることを予測させるものであった。

3　蛍光Ｘ線分析法による分析

続いて蛍光Ｘ線分析装置を用いた，ガラスの組成分析を行った。

人工のガラスは石英を高温で溶解することで作られる。しかし石英単独を溶解しようとすると，土器の焼成温度よりも高温を必要とし，坩堝等の道具類が保たないため，溶解温度を下げるために鉛やアルカリなどの「融剤」が添加される。更に，これに着色剤としての金属元素が加えられる。ガラスは主に，この融剤の種類によって分類されたため，含まれる元素を調べることで，ガラスの種類を知ることができる。

蛍光Ｘ線分析法は，試料にＸ線を照射し，含有する各元素から発生する二次Ｘ線（特性Ｘ線＝蛍光Ｘ線）を検出器でとらえて，Ｘ線エネルギーとその強度をピークとして表すものである。ガラス資料の場合，局部的に強いＸ線を照射するとその部分が変色を来すため，同じ蛍光Ｘ線分析法でも，Ｘ線強度が小さくても検出感度の優れた「エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析法」が有効である。この方法により，資料を破損することなく非破壊データを得ることができる。出土ガラスは，見た目に変化していないようでも埋蔵環境下で表層より風化が進み，組成が変化しているとされる。本来，詳細な調査を行うには，風化部分を取り除いた上で分析をおこない，更に標準資料を用いた校正から成分の定量値を求める必要があるが，今回は遺物を損傷させない完全非破壊により実施したため，どのような元素が含まれているかだけを知る「定性分析」のみに止めている。なお，分析は全ての資料に対して

実施した。

《測定条件》

分析装置：エネルギー分散型微小領域蛍光X線分析装置（エダックス社製／Eagle μ plobe）

対陰極：モリブデン（Mo）

検出器：半導体検出器

印加電圧／電流：20kV／380～550μA

測定雰囲気：真空

測定範囲：0.3㎜φ

測定時間：300秒

日本の弥生時代のガラスには，肥塚氏によるこれまでの調査で，アルカリ珪酸塩ガラスと鉛珪酸塩ガラスのあることが知られている。アルカリ珪酸塩ガラスは，融剤に酸化カリウムを用いるカリガラス（K_2O-SiO_2系）と，融剤に酸化ナトリウムを用いるソーダ石灰ガラスに区別され，更にソーダ石灰ガラスは酸化アルミニウム含有量の高いもの（Na_2O-Al_2O_3 - CaO-SiO_2系）と，低いもの（Na_2O-CaO-SiO_2系）に区分される。鉛珪酸塩ガラスには，鉛ガラス（PbO-SiO_2系）と鉛バリウムガラス（PbO-BaO-SiO_2系）がある。定量値が算出されれば，それによる同定が可能であるが，今回の調査では完全非破壊分析による定性分析であり，得られた蛍光X線の特徴と相対強度から判定することになる。

分析の結果，今回調査した60点は全てアルカリ珪酸塩ガラスで，更に細かく分類すると，58点がカリガラス，２点のみはソーダ石灰ガラスであった。ソーダ石灰ガラスは，いずれも青紺色，径2.7㎜程の粟玉で，肉眼観察では同系色カリガラスと同じグループに含めていたが，よくよく観察すると，カリガラスの青紺色粟玉と比べて，紺色の彩度が低いという色調的な相違が見られ，結果的に大きさも揃っていることが分かる。カリガラスの青紺色と淡青色では，着色剤の部分で異なる元素が検出された。以下に詳細を記す。

①カリガラス／淡青色グループ……19点

マグネシウム（Mg），アルミニウム（Al），ケイ素（Si），カリウム（K），カルシウム（Ca）の他，チタン（Ti），鉄（Fe），銅（Cu），鉛（Pb）が検出された。この中でも特にケイ素，カリウムのピークが強く出ており，二成分系のガラスであるカリガラスの特徴をよく示している。鉛も含まれているが，鉛珪酸塩ガラスに比べて，そのピークは低く，着色に青銅が用いられたことによる混入の可能性も指摘されている（肥塚1996）。

②カリガラス／青紺色グループ……39点

マグネシウム（Mg），アルミニウム（Al），ケイ素（Si），カリウム（K），カルシウム（Ca）の他，チタン（Ti），マンガン（Mn），鉄（Fe），コバルト（Co）が検出された。この種類でもやはりケイ素，カリウムのピークが強く出ており，カリガラスの特徴をよく示している。着色にはコバルト，鉄が関与しており，マンガンはコバルトに付随する不純物と考えられる。

③ソーダ石灰ガラス／青紺色グループ……２点

同系色のカリガラスグループとは異なり，ナトリウム（Na）が①，②に比べて強く出ている。それ以外にマグネシウム（Mg），アルミニウム（Al），ケイ素（Si），カリウム（K），カルシウム（Ca）

の他，チタン（Ti），マンガン（Mn），鉄（Fe），コバルト（Co），銅（Cu）が検出された。ナトリウムのピーク強度や，カリガラスに比べてカリウムのピークがカルシウムのピークよりも弱くなっている特徴から，コバルト着色によるソーダ石灰ガラスと考えられる。ソーダ石灰ガラスにはアルミニウムの含有量が高いものと低いタイプがあり，前者には黄色，黄緑，赤色などカラフルな色調のものが多く，後者は青紺色の普遍的色調を特徴としている。本資料は定量的な分析を行っていないため，アルミの含有量は不明であるが，色調からは後者である可能性が考えられる。

4　顕微鏡観察

実体顕微鏡による観察により，製作技法の推定を試みた。ただし筆者にはガラス製作や加工の経験が無く，ここに記す内容は，あくまでも先学の研究成果にあてはめた推測によるものである。

ガラスは，残存する気泡の挙動や，気泡が風化した痕跡（＝蝕像）の観察により，製作技法の解明が可能であるとされる。小玉については，小瀬康行氏の製作実験に基づく研究で，細長くのばしたガラス管を適当な長さに割り，何らかの心材に通して加熱することで，角が再溶解して丸くなり，小玉の形に整形されることが示されている（小瀬1987）。

観察の結果，多くの資料に，複数の気泡が筋状に連なった気泡列，または細長く引き延ばされた気泡が観察され，これらが，いわゆる「引伸ばし」→「裁断」→「再加熱」により製作されたことを示すものと考えられる。中には気泡が完全に独立して散在し，引伸ばしを積極的に立証する根拠になり得ないものもあるが，小瀬氏による研究成果のなかの，加熱が進んだ段階を示す資料と考えたい。

また青紺色資料のNo.27・28などに，濃淡が複雑に混じり合った（いわゆるマーブリング〔大理石状の模様・墨流し模様〕のような）状況が観察された。しかし現時点で，これがどのような製作技法と関連するのか知るすべはなく，とりあえず結果のみを呈示し，詳細は今後に委ねたい。

5　まとめ

分析調査の結果，長畑馬場遺跡出土のガラス小玉は，全てアルカリ珪酸塩ガラスで，それらは淡青色の銅着色によりカリガラス，青紺色のコバルト着色によるカリガラス，コバルト着色によるソーダ石灰ガラスに，それぞれ分類できる。

カリガラスは中国やインド，東南アジアで流通し，ヨーロッパ等西方には見られない組成のガラスであることから「アジアのガラス」とも言われている。日本では弥生時代に盛行し，中期後半から後期には東海以西に広く分布が見られる。その多くは青色系統の小玉である。その後古墳時代に入る頃から次第に減少，古墳時代の後期には途絶える。肥塚氏が行ってきた従来の分析調査では，弥生時代の遺跡から出土する青紺色のカリガラスには，例外なく数％に及ぶマンガンが含有しており，これは中国や韓国で出土する同色のカリガラスの特徴とも一致している。このような高いマンガンを含む着色用コバルト鉱石は中国産の特徴とされ，これらのカリガラスが中国で製造されたと考えられる根拠となっている（肥塚1996・1997）。ただし今回の資料が実際どこで製造・加工されたかは不明である。

ソーダ石灰ガラスは，弥生時代の後期以降，古墳時代にかけて盛行し，アルミナの少ない青色系統のものは西方のものと組成の共通性が見られる。これに対し今回の試料には含まれていないが，高アルミナ含有のタイプは，黄色，黄緑，赤茶など，それまでのカリガラスで知られていた青系統とは異なる多彩な色調を特徴とし，その組成は西方のものとは異る「アジアのガラス」であるとされる。（肥塚1996）

今回の調査結果は，いずれも，これまでの調査研究で明らかにされてきた，弥生時代後期のガラスの様相に当てはまるものであった。しかし，北部九州では弥生時代のガラス資料が数多く出土しているものの，分析によるデータは他地域に比べて出揃ってはおらず，その様な点で，今回の調査は今後のガラス研究に有意義なデータを提供できたものと考える。

今回は調査研究の機会を与えていただき有り難うございました。末筆ながら感謝申し上げます。

【参考文献】

肥塚隆保　1995「古代ガラスの材質」『古代に挑戦する自然科学』クバプロ
肥塚隆保　1996「化学組成から見た古代ガラス」『古代文化』第48巻８号　財團法人古代學協会
肥塚隆保　1998「主成分からみた古代ガラスとその歴史的変遷」『保存科学研究集会1998』（発表論旨）
奈良国立文化財研究所
小瀬康行　1987「管切り法によるガラス小玉の成形」『考古学雑誌』第73巻第２号　日本考古學會
藤田　等　1997『弥生時代ガラスの研究』名著出版

長畑馬場遺跡出土ガラス玉一覧表

仮No.	色　調	種　　類	径(mm)	長さ(mm)	孔径(mm)	重さ(g)	水中重量	比　重	観　察　所　見
1	淡青色	カリガラス	5.20	3.00	2.22	0.083	0.043	1.93	
2	淡青色	カリガラス	2.95	3.25	1.18	0.036	0.011	3.27	
3	淡青色	カリガラス	3.90	2.35	1.47	0.048	0.012	4.00	
4	淡青色	カリガラス	4.05	2.10	1.28	0.048	0.018	2.67	
5	淡青色	カリガラス	3.30	2.75	1.04	0.039	0.019	2.05	
6	淡青色	カリガラス	3.20	2.80	1.25	0.037	0.014	2.64	
7	淡青色	カリガラス	3.30	1.90	1.55	0.025	0.009	2.78	
8	淡青色	カリガラス	3.20	3.10	1.40	0.043	0.014	3.07	
9	淡青色	カリガラス	3.10	1.80	1.58	0.022	0.009	2.44	
10	淡青色	カリガラス	3.30	3.20	1.45	0.043	0.027	1.59	破損した気泡内に赤色顔料？残留。
11	淡青色	カリガラス	3.60	2.45	1.55	0.039	0.022	1.77	
12	淡青色	カリガラス	4.15	3.20	1.48	0.068	0.025	2.72	緑がかった色調。
13	淡青色	カリガラス	3.15	2.75	1.45	0.034	0.018	1.89	
14	淡青色	カリガラス	3.75	2.60	1.19	0.045	0.021	2.14	透明度が高く気泡は少ない。細長い糸状の夾雑物有り。
15	淡青色	カリガラス	3.20	2.55	1.19	0.037	0.020	1.85	
16	淡青色	カリガラス	3.30	2.70	1.38	0.034	0.016	2.13	
17	淡青色	カリガラス	3.40	2.50	1.33	0.032	0.015	2.13	側面に平坦面有り。細くなった部分に気泡の集中が見られる。
18	淡青色	カリガラス	3.25	2.70	1.32	0.034	0.016	2.13	
19	淡青色	カリガラス	4.50	1.65	2.25	0.034	0.023	1.48	扁平。孔内に気泡筋の破れ有り。
20	青紺色	カリガラス	3.75	2.90	1.51	0.052	0.030	1.73	
21	青紺色	カリガラス	3.40	2.20	1.50	0.031	0.010	3.10	
22	青紺色	カリガラス	3.45	2.10	1.36	0.030	0.010	3.00	
23	青紺色	カリガラス	3.70	3.60	1.45	0.042	0.018	2.33	
24	青紺色	カリガラス	6.00	4.40	2.08	0.177	0.076	2.33	
25	青紺色	カリガラス	3.95	2.45	1.22	0.048	0.018	2.67	
26	青紺色	ソーダ石灰ガラス	2.70	1.30	1.14	0.011	0.003	3.67	
27	青紺色	カリガラス	3.75	2.00	1.08	0.038	0.018	2.11	マーブリング（墨流し）状の模様有り。
28	青紺色	カリガラス	3.80	1.60	1.59	0.028	0.011	2.55	マーブリング（墨流し）状の模様有り。
29	青紺色	カリガラス	2.80	1.25	1.05	0.015	0.007	2.14	気泡少ない。
30	青紺色	カリガラス	2.90	1.75	1.08	0.024	0.008	3.00	気泡の偏在が見られる。気泡列有り。
31	青紺色	カリガラス	2.60	1.60	0.93	0.015	0.007	2.14	
32	青紺色	カリガラス	3.60	1.40	1.50	0.019	0.009	2.11	細かい気泡有り。
33	青紺色	カリガラス	3.00	2.30	1.19	0.025	0.010	2.50	明瞭な気泡列。
34	青紺色	ソーダ石灰ガラス	2.65	1.50	0.93	0.014	0.005	2.80	
35	青紺色	カリガラス	2.60	1.25	1.08	0.010	0.003	3.33	マーブリング（墨流し）状の模様有り。孔側に平坦面，側面の一部に凸凹有り。
36	青紺色	カリガラス	3.60	1.60	1.54	0.025	0.012	2.08	マーブリング（墨流し）状の模様著しい。
37	青紺色	カリガラス	4.00	1.65	1.70	0.029	0.015	1.93	マーブリング（墨流し）状の模様著しい。
38	青紺色	カリガラス	3.90	2.55	1.56	0.048	0.021	2.29	色調が濃い。
39	青紺色	カリガラス	4.15	2.90	1.26	0.063	0.032	1.97	明瞭な気泡列有り。
40	青紺色	カリガラス	3.00	1.75	0.96	0.019	0.010	1.90	高透明度。孔内に夾雑物による突出が見られる。一部欠損。
41	青紺色	カリガラス	3.00	1.90	1.17	0.022	0.011	2.00	気泡少ない。

長畑馬場遺跡出土ガラス玉一覧表

仮No.	色　調	種　　類	径(mm)	長さ(mm)	孔径(mm)	重さ(g)	水中重量	比　重	観　察　所　見
42	青紺色	カリガラス	3.30	2.40	1.06	0.034	0.018	1.89	マーブリング（墨流し）状の模様，気泡列有り。
43	青紺色	カリガラス	3.90	2.00	1.25	0.037	0.020	1.85	孔と平行の縞模様。一部欠損。
44	青紺色	カリガラス	4.15	2.90	1.63	0.059	0.033	1.76	明瞭な気泡列。
45	青紺色	カリガラス	3.30	4.00	1.23	0.067	0.038	1.76	金属（鉄）状の大型夾圧物有り。
46	青紺色	カリガラス	2.70	0.90	1.10	0.009	測定不能	測定不能	マーブリング（墨流し）状の模様，気泡少ない。
47	青紺色	カリガラス	3.00	1.55	1.00	0.018	0.007	2.57	マーブリング（墨流し）状の模様，気泡少ない。
48	青紺色	カリガラス	2.90	1.10	1.41	0.011	0.006	1.83	色調淡く気泡多い。
49	青紺色	カリガラス	3.20	1.40	1.19	0.018	0.007	2.57	紫色の混入物。
50	青紺色	カリガラス	3.20	1.60	1.34	0.023	0.009	2.56	マーブリング（墨流し）状の模様，気泡列，引き伸ばされた気泡有り。
51	青紺色	カリガラス	4.00	1.90	1.52	0.040	0.019	2.11	色調やや濃い目。
52	青紺色	カリガラス	3.50	1.40	1.39	0.021	0.010	2.10	マーブリング（墨流し）状の模様，気泡少ない。
53	青紺色	カリガラス	3.20	1.80	1.01	0.026	0.015	1.73	気泡多い。孔内に夾雑物による突出有り。明瞭な気泡列。
54	青紺色	カリガラス	4.10	2.20	1.50	0.045	0.019	2.37	色調濃い。
55	青紺色	カリガラス	2.60	1.20	1.13	0.010	測定不能	測定不能	マーブリング（墨流し）状の模様，気泡少ない。
56	青紺色	カリガラス	2.50	1.20	1.10	0.009	測定不能	測定不能	マーブリング（墨流し）状の模様，気泡少ない。
57	青紺色	カリガラス	2.95	2.50	1.24	0.031	0.012	2.58	赤色顔料付着？。気泡の偏在が見られる。
58	青紺色	カリガラス	2.60	1.10	1.05	0.008	0.002	4.00	淡い色調。マーブリング（墨流し）状模様有り。
59	青紺色	カリガラス	4.30	2.10	1.81	0.046	0.026	1.77	マーブリング（墨流し）状模様有り。
60	青紺色	カリガラス	3.00	2.40	1.16	0.029	0.012	2.42	細かい気泡筋有り。

径と長さはノギスによる計測。

孔径はビデオマイクロスコープ（キーエンス：VH-6300）の画面上で２点間距離計測（レンズ50倍）を行ったもの。

◆追加調査について

報告書の作成後，以下の点について追加調査を行った。

1　ガラス小玉 No. 10の破裂した気泡内に残留する赤色顔料の分析

No. 10のガラス小玉には，側面に気泡の破裂した穴があり，この中に赤色顔料の残留が観察されたため，これについて蛍光X線分析を行った。分析の方法や条件についてはガラス小玉自体の分析に準ずるので，ここでは割愛させていただく。

古代の赤色顔料については，先学の研究により硫化水銀を由来成分とする「朱」と，酸化第二鉄を由来成分とする「ベンガラ」の主に二種類のあることが知られている。蛍光X線分析により，水銀(Hg)と鉄（Fe）のどちらが検出されるかで，推定することが可能である。ただし実際には，鉄が検出された場合，埋土にも豊富に鉄が含まれている場合が多く，即ベンガラと同定することはできない。水銀の場合も，朱とベンガラが同一箇所で併用されている場合があり，他の装置や顕微鏡観察などによるクロスチェックが必要となる。

分析の結果は別紙チャートの通りである。今回の分析では，赤色顔料の範囲が分析エリアにほぼ収まり，良好な水銀のピークを観測することができた。硫化水銀の成分である硫黄（S）については，水銀や装置に由来するモリブデン（Mo）のピークと重なり，非常に判りにくいが，なんとか確認できた。この事より，この赤色顔料は朱であると考えられる。

2　ガラス小玉 NO. 49に見られる夾雑物の材質調査

本資料では，顕微鏡観察で小玉の小口面に，鉄の塊のような直方体の材質が噛み込んでいるのが観察された。これは見た限り，後に入り込んだものとは考えられず，製作時，あるいは加工段階のガラスが軟らかい時点で混入したと思われる。これについても材質確認のため，蛍光X線分析を行った。その結果，ガラス本体部分とは比較にならない，強く明瞭な鉄のピークが観察されたことから，この物質が鉄を主成分とする塊であることが確認された。

3　石製管玉の透過X線撮影

透過X線は，文化財において最も汎用的に用いられる理化学分析の手法の一つである。X線は波長の短い電磁波の一種で，これを資料に照射すると，資料の材質や厚みの違いによって，X線の透過や吸収の度合いに差が生じる。これをフィルムなどの二次元情報に置き換えることで，肉眼では見ることのできない資料内部の情報をえることができる。

当センターの装置は，資料を透過したX線を蛍光板でとらえ，これを電気信号に変えるI・I（イメージ・インテンシファイア）機構により，CRT（テレビモニター）で観察する装置である。従ってフィルム撮影とは異なり，通常，X線の透過しやすい部分は白く，透過しにくい部分は黒く写る。得られた画像情報は，付属の光磁気ディスクに保存され，パソコンなどで画像処理を施し，プリントアウトすることができる。

管玉の透過X線像は，別紙の通りである。2点の画像の内，上は画像の白黒を反転させ，通常のフィルム像と同じように表現したもので，下は画像処理により凸凹を強調したものである。(画像加工ソフトはフォトショップを使用)

これにより若干鮮明度には欠けるが，穿孔の様子を確認することができた。

2000年2月17日　福岡市埋蔵文化財センター　比佐陽一郎

No. 1～10

No. 11～19

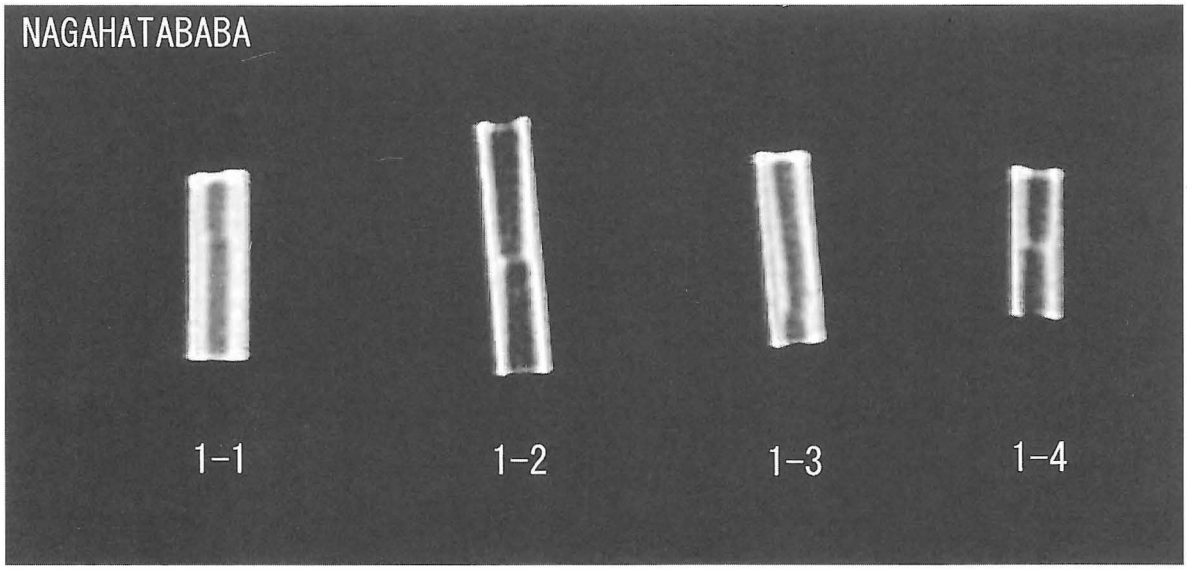
No. 20～25. 27～30

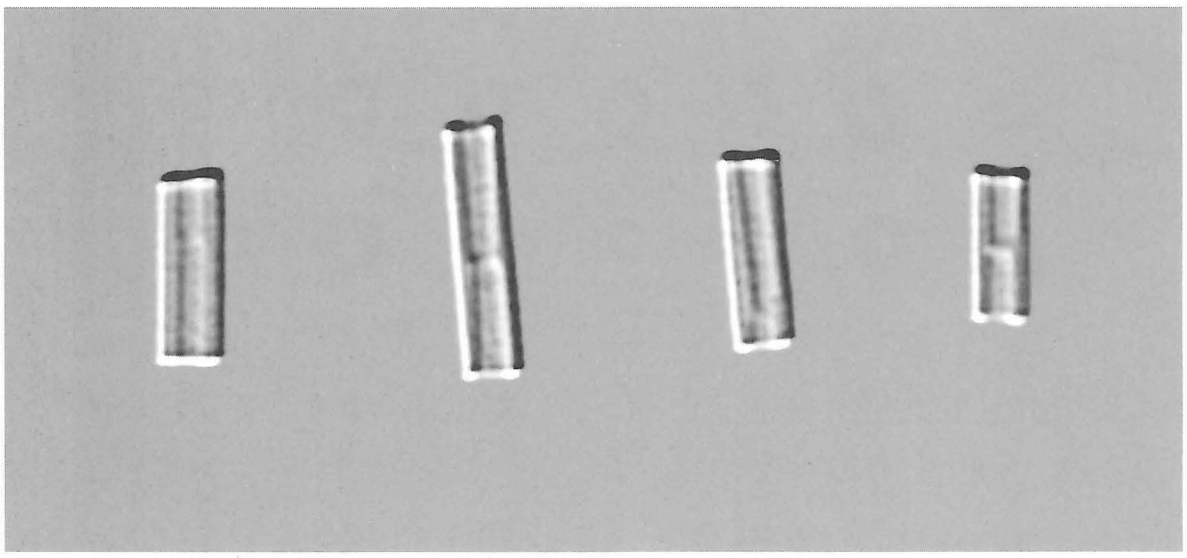
No. 31～33. 35～40

No. 41～50

No. 51～60

No. 26. 34


NAGAHATABABA
1-1
1-2
1-3
1-4



大島村，長畑馬場遺跡出土炭化材の樹種同定

株式会社　古環境研究所

1　試　　料

試料は，長畑馬場遺跡において出土した炭化材21点である（表１）。

2　方　　法

試料を割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面，放射断面，接線断面）を作製し，落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

3　結　　果

同定結果を表１に，主要な分類群の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

表１　長畑馬場遺跡出土炭化材の樹種同定結果

試　料	樹　種（和　名	／　学　名）
NBPA-34	ヤマグワ	*Morus australis* Poiret
NBPA-72	不明	unknown
NBPA-80	シイ属	*Castanopsis*
NBPA-83	マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*
NBPA-90	マツ属複雑管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*
NBPA-99	不明	unknown
NBPB-27	散孔材	diffuse-porous wood
NBPB-42	散孔材	diffuse-porous wood
NBPB-54	ブナ科	Fagaceae
NBPB-56	散孔材	diffuse-porous wood
NBPB-57	広葉樹	broad-leaved tree
NBPB-58	シイ属	*Castanopsis*
NBPB-65	シイ属	*Castanopsis*
NBPB-70	散孔材	diffuse-porous wood
NBPD- 8	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*
NBPD-12	広葉樹	broad-leaved tree
NBSK１区	広葉樹	broad-leaved tree
NBSK 一括分①	シイ属	*Castanopsis*
NBSK 一括分②	マキ属	*Podocarpus*
NBSK 一括分③	シイ属	*Castanopsis*
NBSK 一括分④	マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*

a　マキ属　*Podocarpus*　マキ科　　図版1

仮道管，樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで，年輪界がやや不明瞭である。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は，ヒノキ型で1分野に1～2個存在する。樹脂細胞が散在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で，1～20個細胞高である。樹脂細胞が多く見られる。

以上の形質よりマキ属に同定される。マキ属には，イヌマキ，ナギがあり，関東以西の本州，四国，九州，沖縄に分布する。常緑高木で，通常高さ20m，径50～80cmである。材は，耐朽性が強く，耐水性も高い。建築，器具，桶，箱，水槽などに用いられる。

b　マツ属複維管束亜属　*Pinus* subgen. *Diploxylon*　マツ科　　図版2

仮道管，放射柔細胞，放射仮道管及び垂直，水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で，垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが，水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質より，マツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属には，クロマツとアカマツがあり，どちらも北海道南部，本州，四国，九州に分布する。常緑高木である。材は水湿によく耐え，広く用いられる。

c　シイ属　*Castanopsis*　ブナ科　　図版3

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で，放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型のものが存在する。

以上の形質よりシイ属に同定される。シイ属は本州（福島県，新潟県佐渡以南），四国，九州に分布する。常緑高木で，高さ20m，径1.5mに達する。材は耐朽，保存性やや低く，建築，器具などに用いられる。

なおシイ属には，スダジイとツブラジイがあり，集合放射組織の有無などで同定されるが，本試料は小片の為，広範囲の観察が困難であったので，シイ属の同定にとどまる。

d　コナラ属アカガシ亜属　*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*　ブナ科　　図版4

横断面：中型から大型の道管が,1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で，放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で，単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ，イチイガシ，アラカシ，シラカシなどがあり，本州，四国，九州に分布する。常緑高木で，高さ30m，径1．5m以上に達する。材は堅硬で強靱，弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

e　ブナ科　Fagaceae

横断面：部分的ではあるが大型の道管が見られた。

放射断面：放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりブナ科の，クリ，シイ属，コナラ属コナラ節，コナラ属クヌギ節のいずれかである。なお本試料は小片であるうえに，保存状態が悪く，広範囲の観察は困難であったので，ブナ科の同定にとどまる。

f　ヤマグワ　*Morus australis* Poiret　クワ科　　図版5

横断面：年輪のはじめに中型から大型の丸い道管が，単独あるいは2～3個複合して配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は複合して円形の小塊をなす。道管の径は徐々に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で，小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが，上下の縁辺部の1～3細胞ぐらいは直立細胞である。

接線断面：放射組織は上下の縁辺部が直立細胞からなる異性放射組織型で,1～6細胞幅である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりヤマグワに同定される。ヤマグワは北海道，本州，四国，九州に分布する。落葉高木で，通常高さ10～15m，径30～34cmである。材は堅硬，靱性に富み，建築などに用いられる。

e　散孔材　diffuse-porous wood

横断面：小型の道管が散在する。

放射断面：道管と放射組織が存在する。

接線断面：道管と多列の放射組織が存在する。

以上の形質より散孔材に同定される。なお本試料は小片であるうえに，保存状態が悪く，広範囲の観察が困難であったので，散孔材の同定にとどまる。

h　広葉樹　broad-leaved tree

横断面：道管が存在する。

放射断面：道管と放射組織が存在する。

接線断面：道管と放射組織が存在する。

以上の形質より広葉樹に同定される。なお本試料は小片であるうえに，保存状態が悪く，広範囲の観察が困難であったので，広葉樹の同定にとどまる。

i　不明　unknown　　図版6

表面は比較的なめらかで，鉱物粒が観察される。断面はどの方面も，層状の構造を呈している。炭化材ではない。

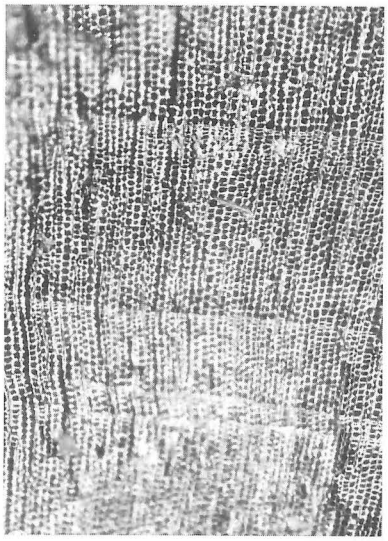
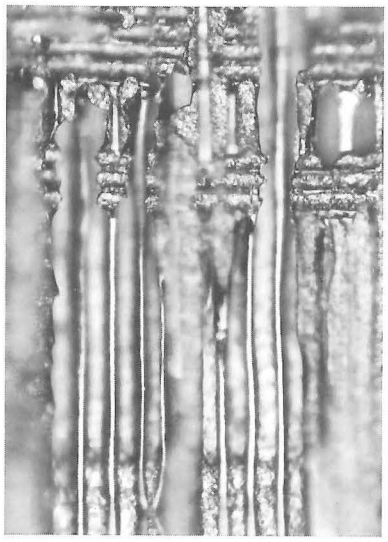
4　所　見

同定の結果，シイ属5，マツ属複維管束亜属3，ヤマグワ2，コナラ属アカガシ亜属1，マキ属1，ブナ科1，散孔材4，広葉樹3，不明2であった。シイ属，コナラ属アカガシ亜属は温暖な照葉樹林の主要構成要素で，マツ属複維管束亜属，ヤマグワ，マキ属は照葉樹林に混在する要素でもある。マツ属複維管束亜属は他の樹木の生育しにくい岩肌や土壌の発達の悪いところにも生育する。マキ属は針葉樹であるが温暖な地域に分布する。以上から，同定された樹種は温暖な照葉樹林かその縁辺に生育する樹木であり，遺跡の周辺には照葉樹林が主に分布していたと推定される。なお，試料がやや少ないこと，炭化材の保存状態が悪いため，同定の精度が悪いこともあり，埋土ごとの特徴は表れない。

【参考文献】

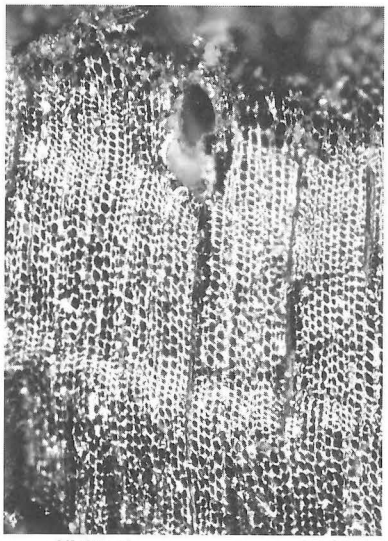
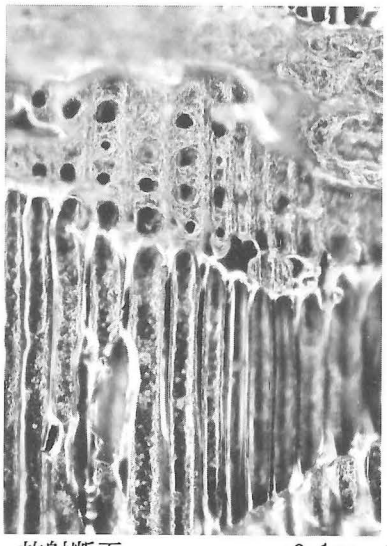
佐伯浩・原田洋（1985）針葉樹材の細胞，木材の構造，文永堂出版，p.20-48.
佐伯浩・原田洋（1985）広葉樹材の細胞，木材の構造，文永堂出版，p.49-100.

長畑馬場遺跡出土炭化材の顕微鏡写真Ⅰ

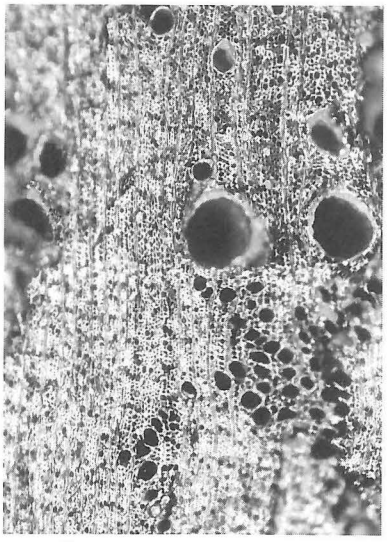
横断面 ―――― :0.4mm　放射断面 ―――― :0.1mm　接線断面 ―――― :0.2mm

1．NBSK一括分②　マキ属

横断面 ―――― :0.4mm　放射断面 ―――― :0.1mm　接線断面 ―――― :0.2mm

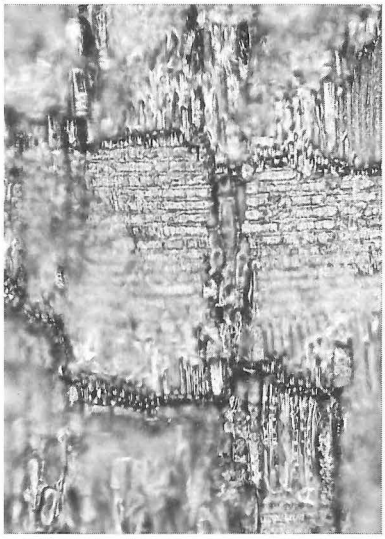
2．NBPA-90　マツ属複維管束亜属



横断面 ―――― :0.4mm　放射断面 ―――― :0.2mm　接線断面 ―――― :0.2mm

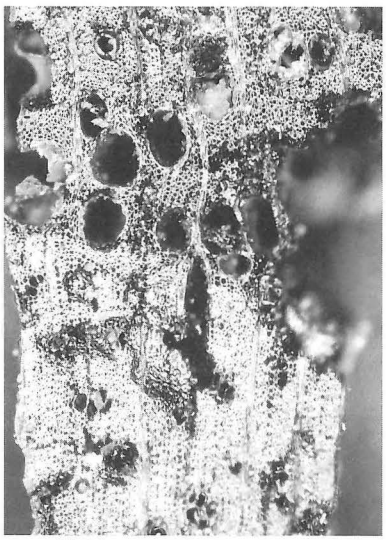
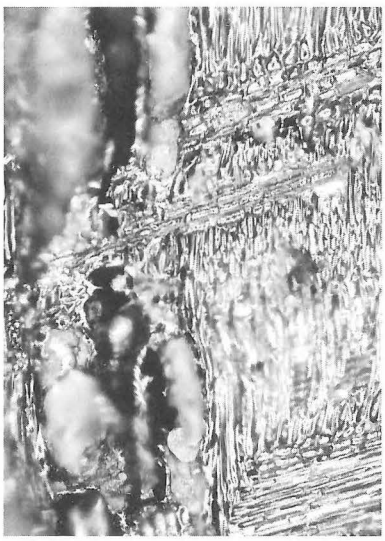
3．NBSK一括分①　シイ属

長畑馬場遺跡出土炭化材の顕微鏡写真Ⅱ



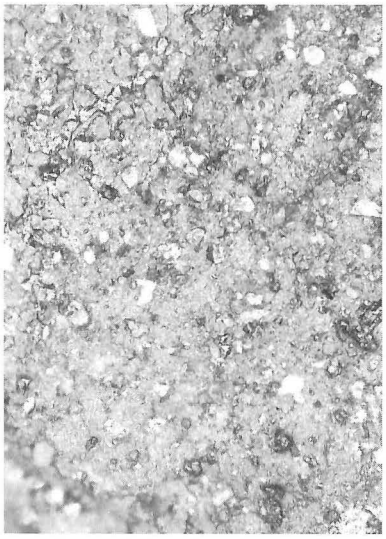
横断面 ―――― :0.4mm　放射断面 ―――― :0.2mm　接線断面 ―――― :0.2mm

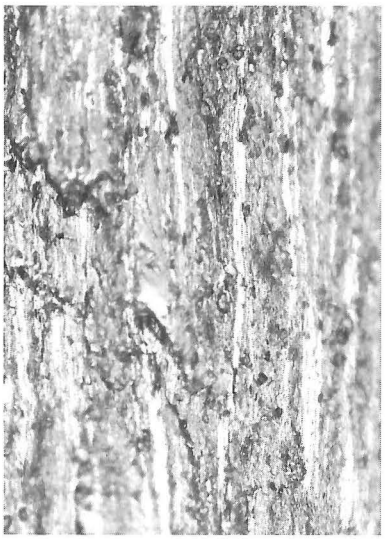
4．NBPD-8　コナラ属アカガシ亜属

横断面 ―――― :0.4mm　放射断面 ―――― :0.2mm　接線断面 ―――― :0.2mm

5．NBPA-34　ヤマグワ





表面 ―――― :0.4mm　断面 ―――― :0.4mm　断面 ―――― :0.4mm

6．NBPA-99　不明

長畑馬場遺跡出土の動物遺体

西本豊弘・鵜沢和宏・姉崎智子

SK１は直径２m程度の大きさの土壙で，その中から獣骨が21点検出された。その資料を同定した結果，タイ類，ニッポンアシカ，シカ，イノシシ類，クジラ類を確認した。

ニッポンアシカは，頭蓋骨１個体分，左右下顎骨，上腕骨，尺骨，寛骨，大腿骨，脛骨が含まれていた。それらはいずれも雄の亜成獣（10歳前後）である。骨の成育のプロセスからみて，これらは同一固体のものであったと考えられる。この土壙のアシカの骨は，頭蓋骨と大腿骨が重なって出土し，解剖学的位置を保たず，さらには上腕骨の表面に解体痕が確認されたことから，アシカが解体され，何らかの意図により集積したものであろう。頭蓋骨を含む全身の骨は，被熱し，はじけた状態のものも認められた。

アシカの骨以外に，中型クジラの椎体板破片１点と，イノシシ類の後臼歯（上顎）１点，切歯１点，シカの左下顎骨１点，左上腕骨遠位部１点，タイ類の前上顎骨破片１点が認められた。そのうち，シカの下顎骨は第３後臼歯の萠出が完了しているが，歯の磨耗があまり認められないため，生後３～４歳の成獣であったと考えられる。雌雄は不明である。また，上腕骨は骨端が癒合しており，成獣のものであった。

この土壙の動物遺体をみてみると，ニッポンアシカが主体であるが，多様な種が認められ，それらの骨が被熱を受けていた。土壙のまわりに柱穴があり、熱を受けた石もあることから、儀礼的な場所であったかもしれない。

この他の地点から，ニッポンアシカの左上腕骨骨幹部～遠位部が１点出土している。アシカ類の他には，タイ類の歯骨とアオザメの歯，クジラ類の骨およびイノシシ類の歯が検出された。そのなかで注目されるのは，イノシシ類の歯であり，これは甕棺から人骨・人歯にともなって採集されたものである。もしこのイノシシ類の歯が，後世の攪乱による混入ではなく，当初から甕棺にいれられていたものであるとすれば，人の埋葬にともなう副葬品であった可能性が高い。中国では，新石器時代から漢代に至るまで，ブタの頭骨が墓に副葬されることが良く知られている。日本の弥生時代においては，イノシシ類（ブタを含む）が墓に含まれることはないといわれている。特に，甕棺の中からイノシシ類が副葬された例は知られていない。この例が攪乱によるものでないとするならば，今後，甕棺から動物骨が出土する可能性が高い。類例の資料の増加を待って，この資料の意味を考えてみたい。

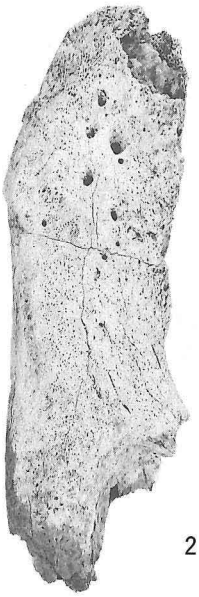
表A　SK１土壙出土　動物遺体

遺物番号	種	部位	左右	残存状態	年　齢	性別	備　　考
NO.3	シカ	上腕骨	L	遠位部			骨端癒合
NO.4	シカ	下腕骨	L	(M123)	亜成獣		M３第咬頭未咬耗
NO.6	海獣類	不明		四肢骨破片			
NO.7	アシカ	寛骨	L	寛骨臼部			
NO.8	アシカ	尺骨	R	完存			
NO.8	不明	頭蓋骨		破片			
NO.9	クジラ類	椎体板					薄（大きい10mクラス）
NO.10	アシカ	下顎骨	L	下顎体	亜成獣	♂	歯脱落
NO.11	アシカ	上腕骨	L	骨幹部－遠位部	亜成獣	♂	近位部未癒合，解体痕あり
NO.12	アシカ	頭蓋骨		破片		♂	焼
NO.16,17	アシカ	大腿骨	R	完存	亜成獣	♂	
NO.17	アシカ	頭蓋骨		頭頂骨，側頭骨	亜成獣	♂	１個体分
NO.19	アシカ	尺骨	L	骨幹部			
NO.20	アシカ	脛骨	R	近位部－骨幹部	亜成獣	♂	
NO.21	アシカ	頭蓋骨		前頭骨，後頭骨			焼
NO.21	海獣類	不明		四肢骨破片			
NO.21	海獣類	不明		四肢骨破片			
1,2区ベルト	アシカ	下顎骨	R	関節突起，下顎枝			
４区	イノシシ類	遊離歯	R	上顎M１／M２			萠出途中
SK一括	イノシシ類	遊離歯	R	上顎第２切歯			
SK一括	タイ類	前上顎骨		破片			

＊歯種　M：後臼歯，数字は歯の番号を示す

表B　その他動物遺体

遺物番号	種	部位	左右	残存状態	年　齢	性別	備　　考
PA１	陸獣			骨片			
PA６	海獣類			骨片			
PA９	海獣類			骨片			
PA13	陸獣			骨片			焼
PA16	魚骨			破片			
PA24	アオザメ						
PA27	海獣類			骨片			
PA34	不明			骨片			
PA36	不明			骨片			
PA42	不明			骨片			
PA44	アオザメ	歯					
PA46	不明			骨片			
PA63	陸獣			骨片			
PA78	不明			骨片			
PA80	クジラ類			骨片			焼，加工
PA88	海獣類			骨片			
PA88	海獣類			骨片			
PA92	アシカ類	中手･中足骨					
PA145	海獣類			骨片			
PA164	海獣類			骨片			
PB１	イノシシ類	遊離歯		臼歯　破片			
PB13	不明			骨片			焼
PB18	海獣類	肋骨		破片			焼
PB18	陸獣			骨片			焼
PB26	アシカ	指骨					解体痕
PB26	クジラ類			骨片			焼，加工
PB26	タイ類	歯骨					マダイ？
PB37	不明			骨片			焼
PB63	海獣類	膝蓋骨？					
PB63	サメ類	椎体					大型，加工？
PB74	海獣類	中手･中足骨					
PD27	クジラ類	椎体		破片			大型，解体痕あり
PD４	不明		R	骨片			焼
PD８	アシカ	上腕骨	R	骨幹部－遠位部	成　獣	♂	
SC２	シカ？	尺骨					
ST25	イノシシ類	遊離歯		臼歯　破片			
ST25	タイ類	椎骨					
ST26	モグラ	上腕骨	L？				
ST26	イノシシ類	遊離歯		後臼歯　破片			
C８表採	イノシシ類	遊離歯		後臼歯　破片			



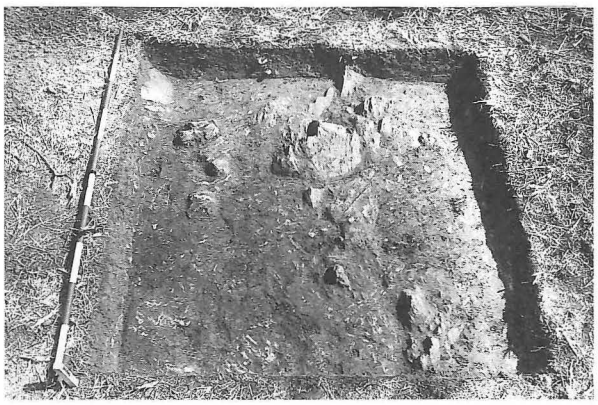
1号土壙出土獣骨（ニホンアシカ、S＝1／1）
［1　左上腕骨　2　左下顎骨　3　頭蓋骨破片　4　右脛骨　5　右大腿骨］

図　　版

遺跡遠景（上），調査区全景（下）

図版 2

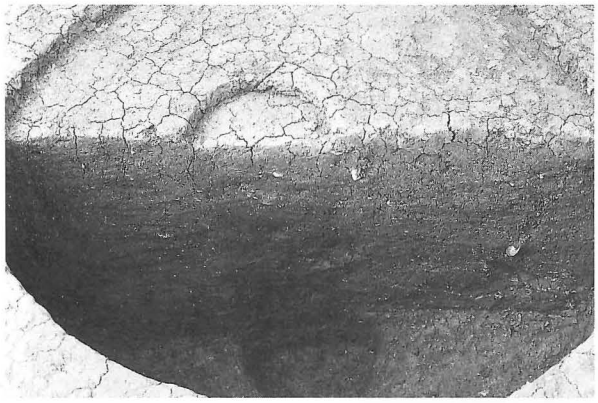
作業風景



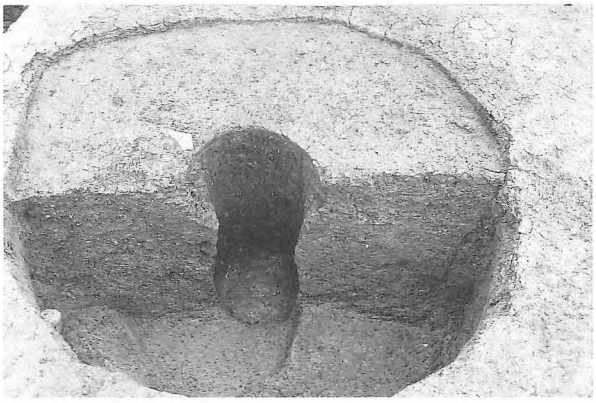
平成 9 年度試掘壙（Ｊ１）

1 号住居跡

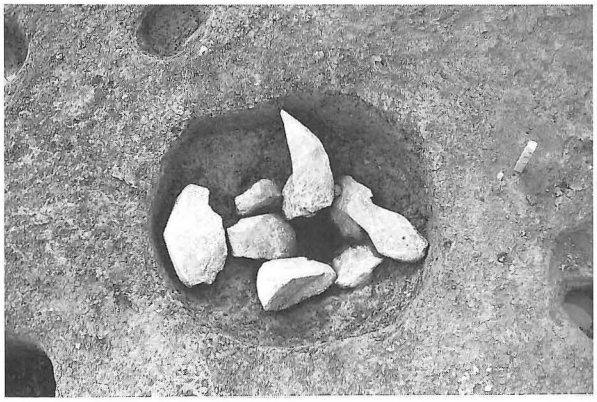
1 号土壙



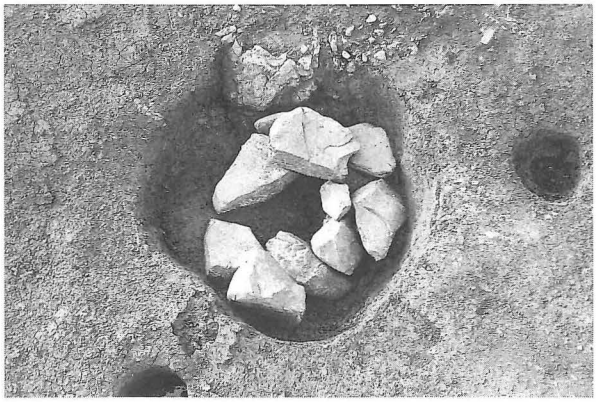
G 7 ―P10



G 7 ―P33



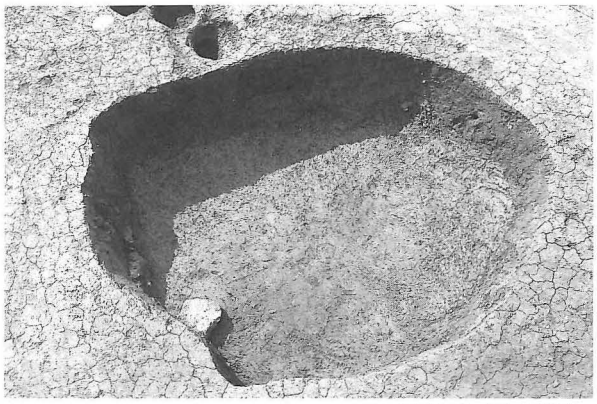
H 8 ―P 6



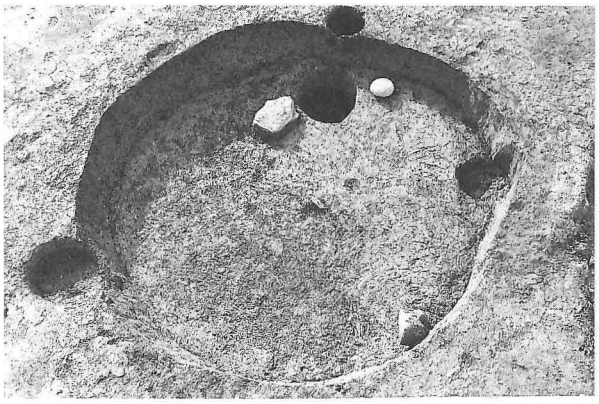
H 9 ―P14

検出遺構①

2 号土壙

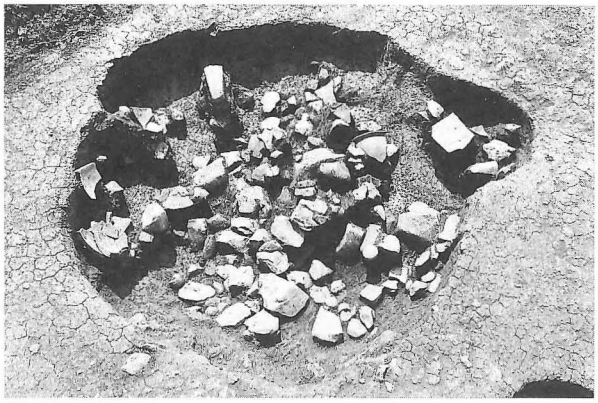


2 号土壙（完掘後）

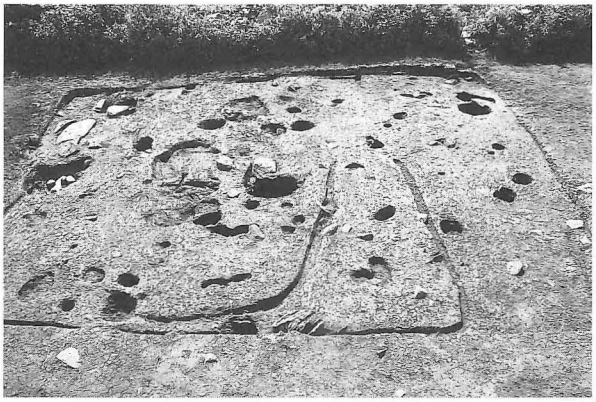


3 号土壙

4 号土壙



5 号土壙



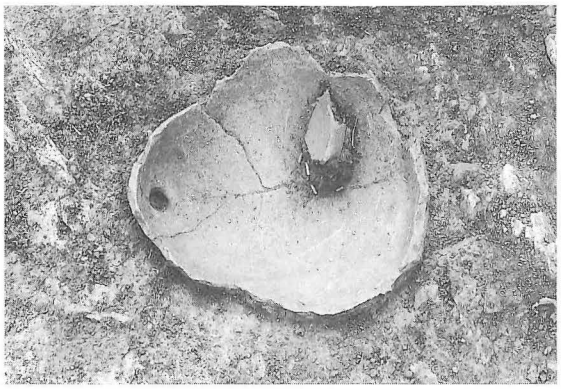
2 号住居跡

石棺墓

SX 1 出土人骨

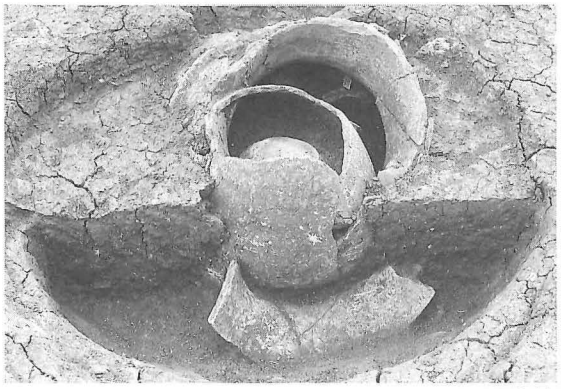
検出遺構②

図版 4



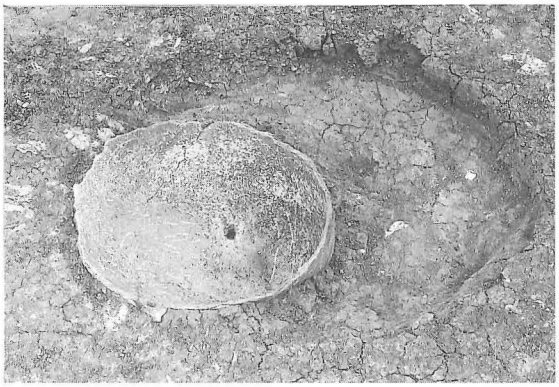
1 号甕棺

1 号甕棺管玉出土状況



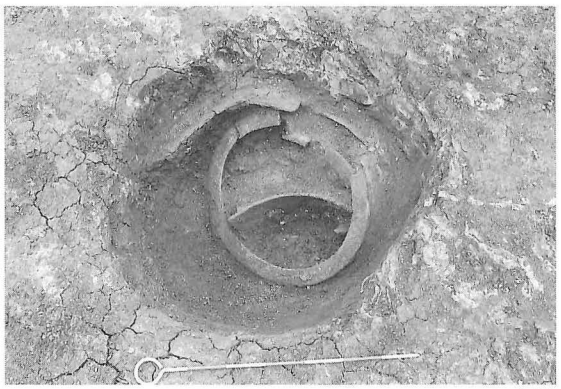
2 号甕棺

2 号甕棺取り上げ後

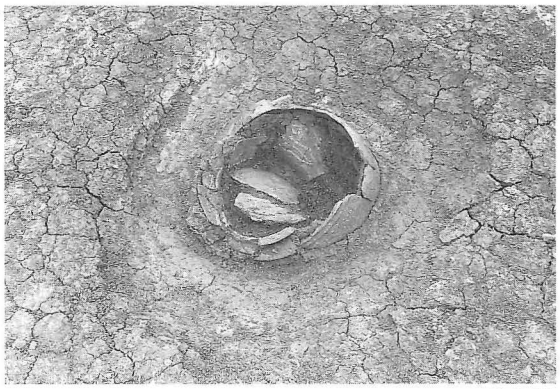


3 号甕棺

4 号甕棺

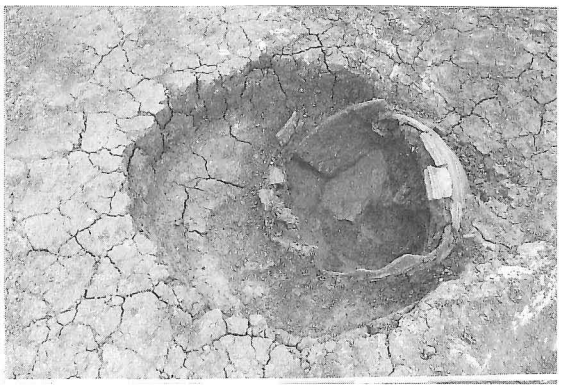


5 号甕棺



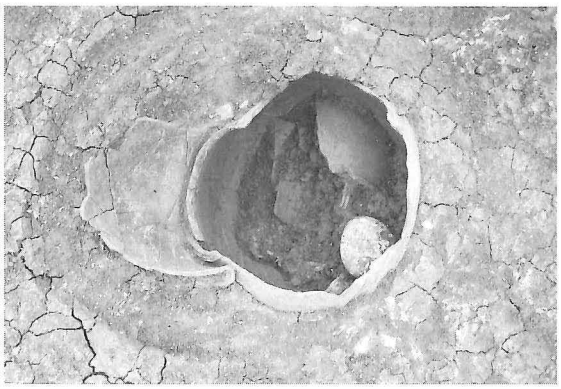
6 号甕棺

甕棺出土状況①



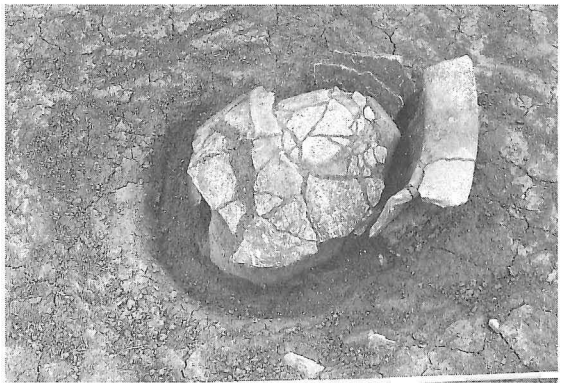
7 号甕棺

7 号甕棺釧出土状況



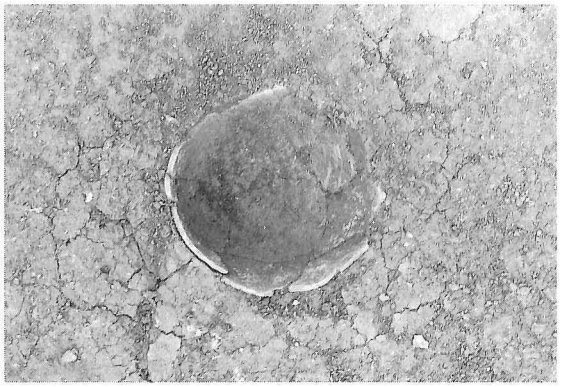
8 号甕棺

8 号甕棺人骨出土状況

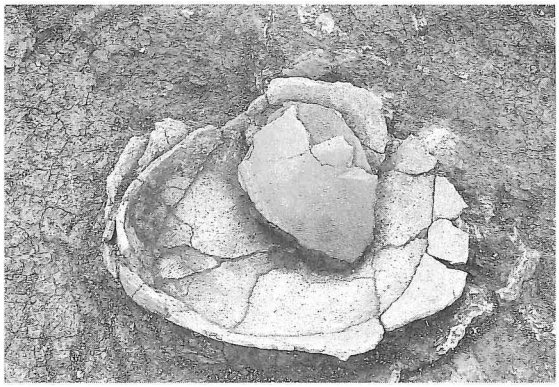


9 号甕棺

9 号甕棺



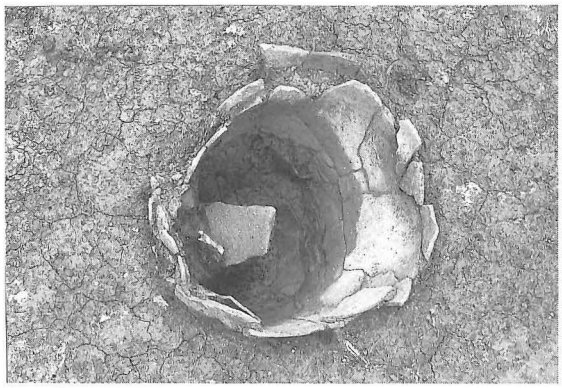
10号甕棺



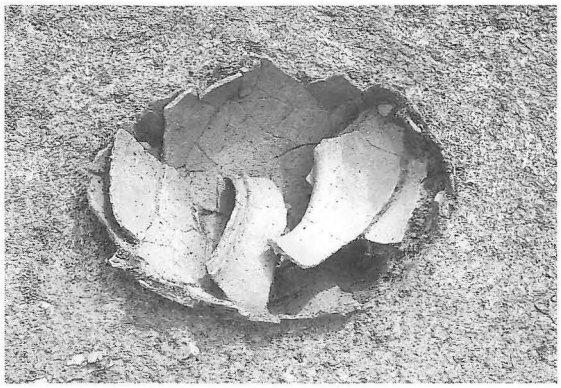
11号甕棺

甕棺出土状況②

図版 6



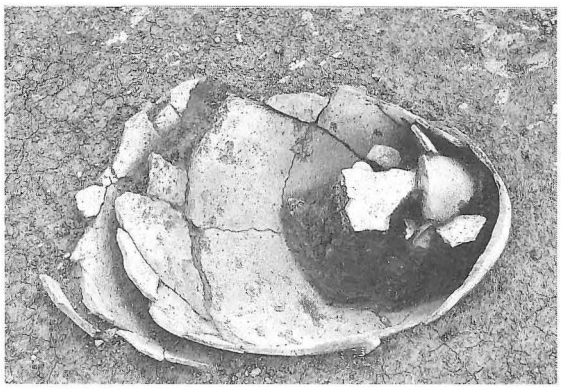
12号甕棺



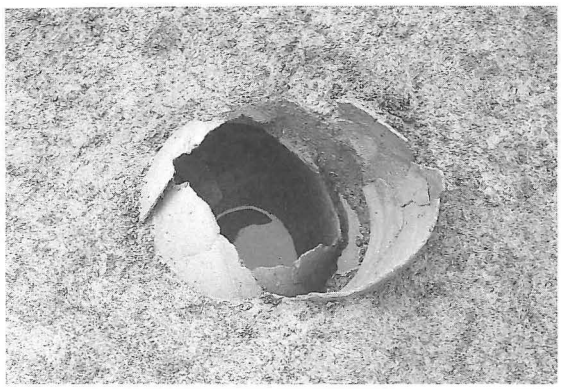
13号甕棺

14号甕棺

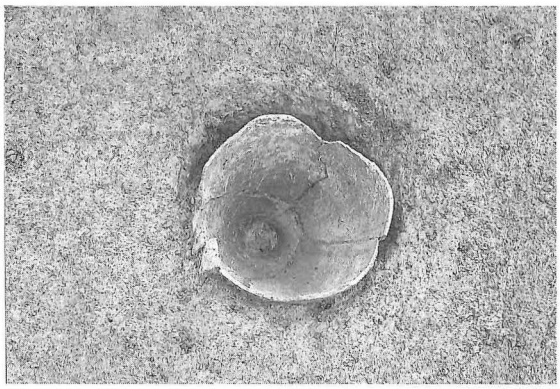
15号甕棺



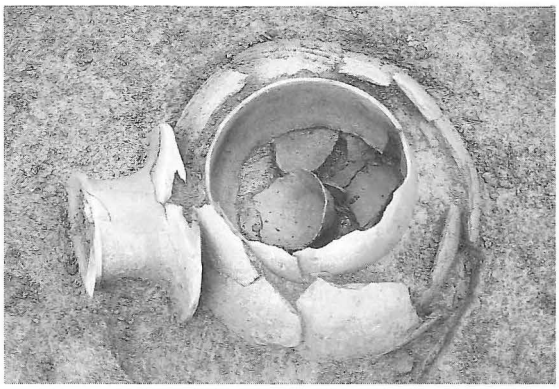
16号甕棺



17号甕棺

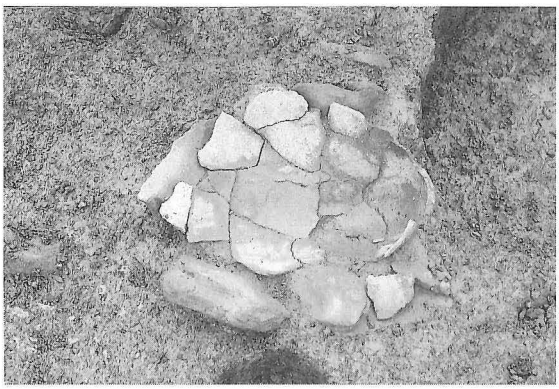


18号甕棺



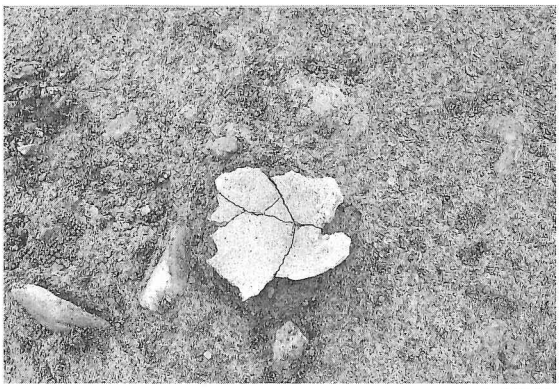
19号甕棺

甕棺出土状況③

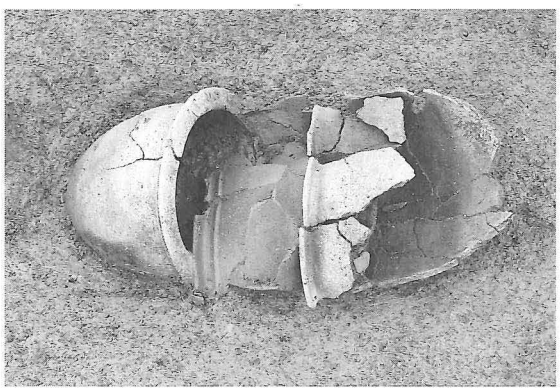


20号甕棺

21号甕棺

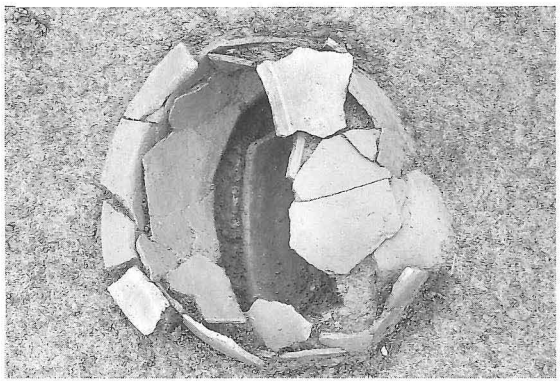


22号甕棺

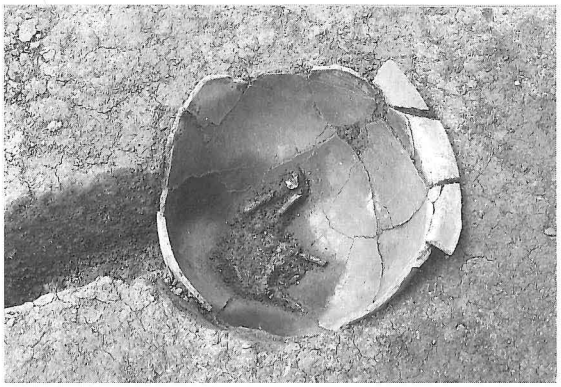


23号甕棺

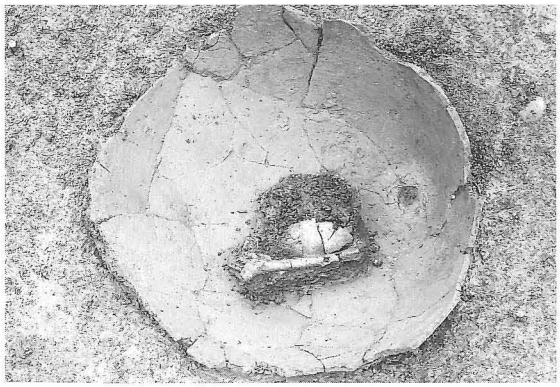
24号甕棺



25号甕棺



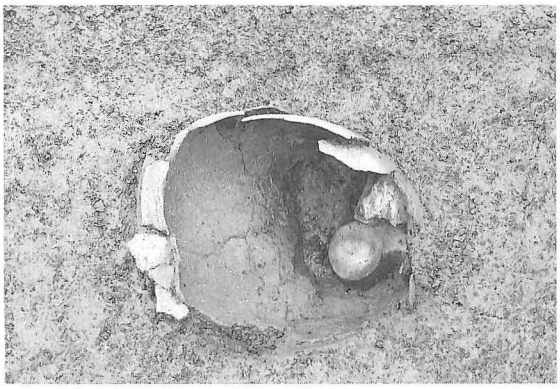
25号甕棺



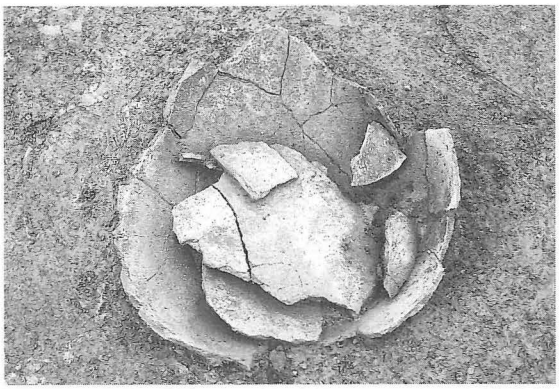
26号甕棺

甕棺出土状況④

図版 8



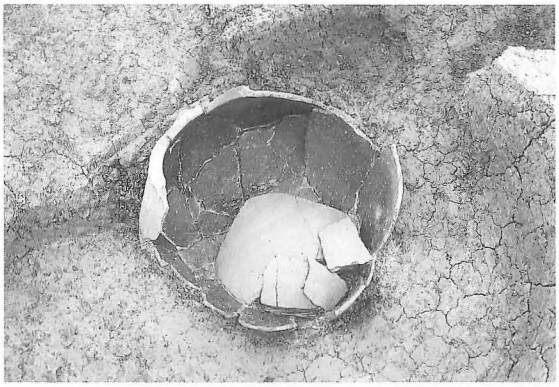
27号甕棺



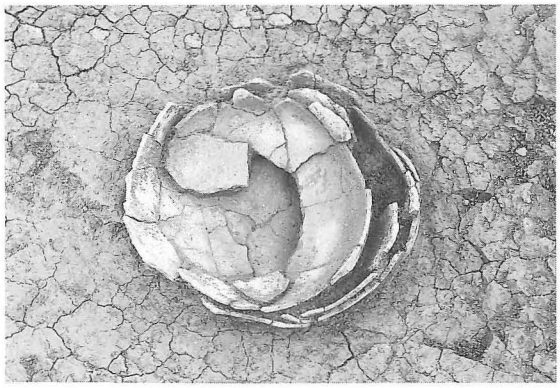
28号甕棺

29号甕棺

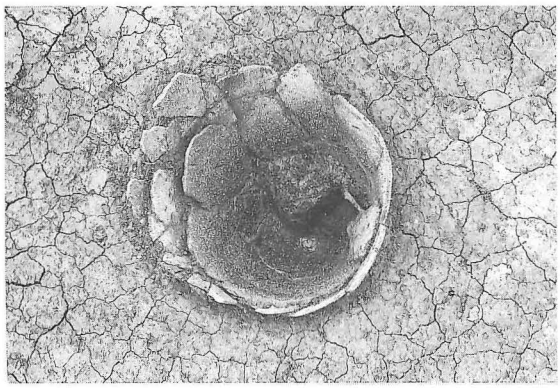
30号甕棺



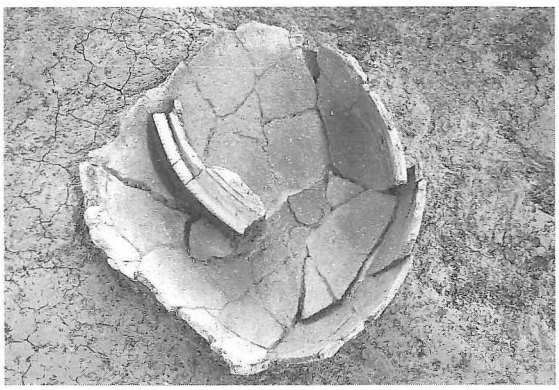
30号甕棺



31号甕棺

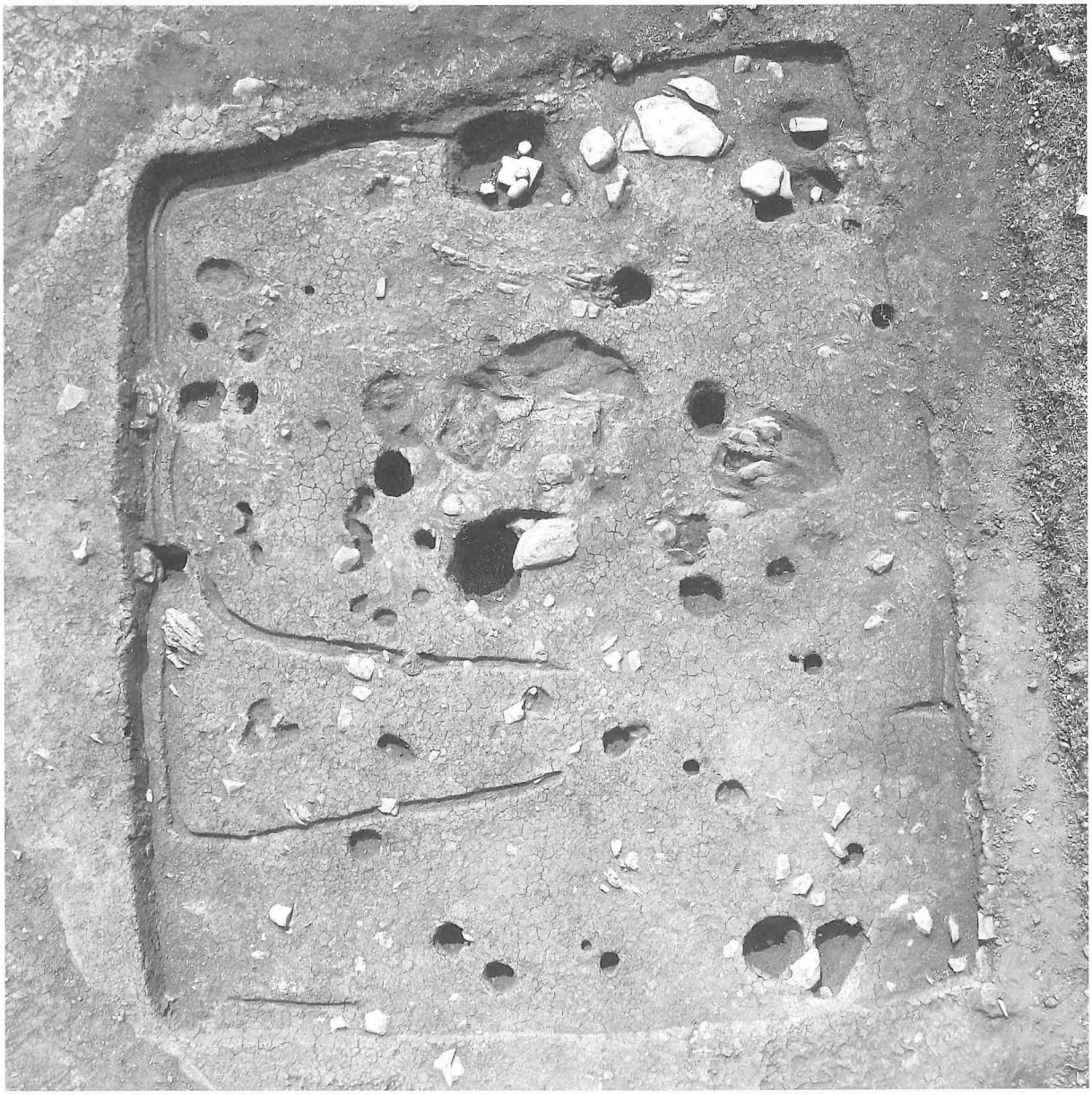


32号甕棺



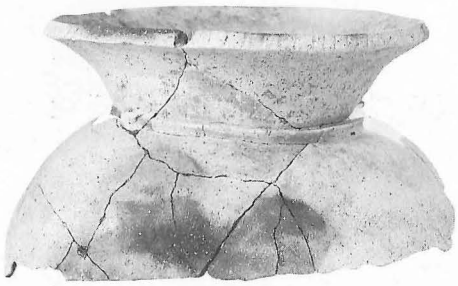
33号甕棺

甕棺出土状況⑤

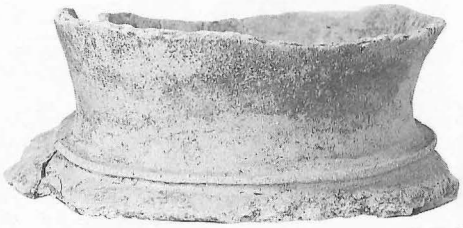


2 号住居跡出土遺物（上），2 号住居跡（下）

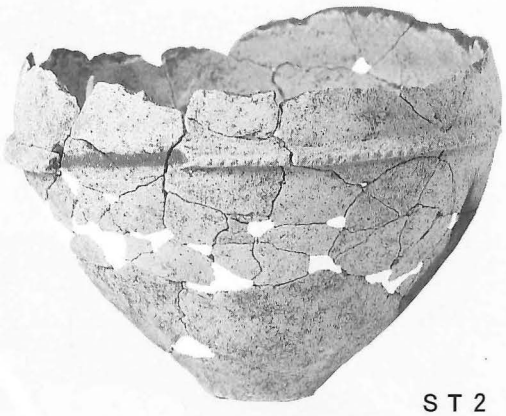
ＳＴ１



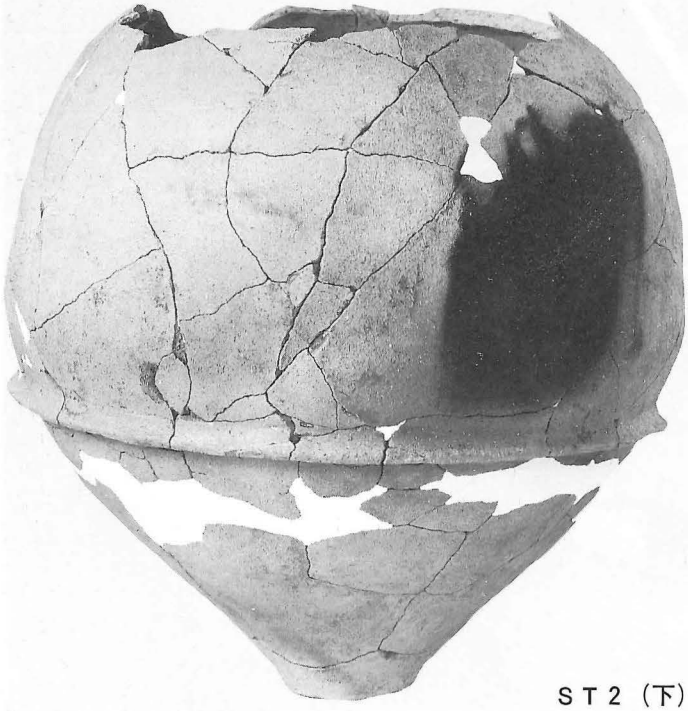
ＳＴ２（上）



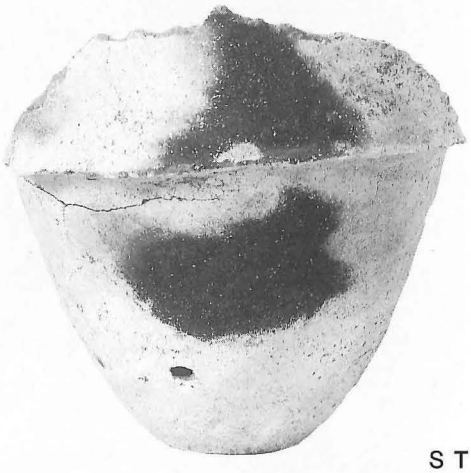
ＳＴ２（下）



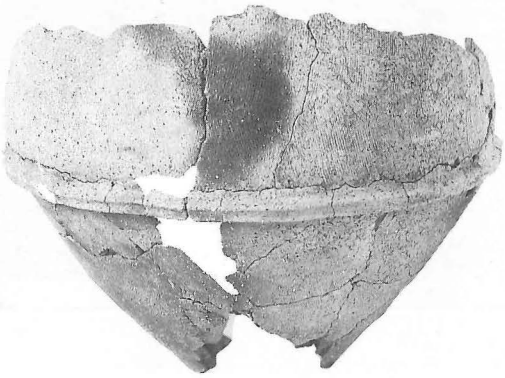
ＳＴ２（上）



ＳＴ２（下）



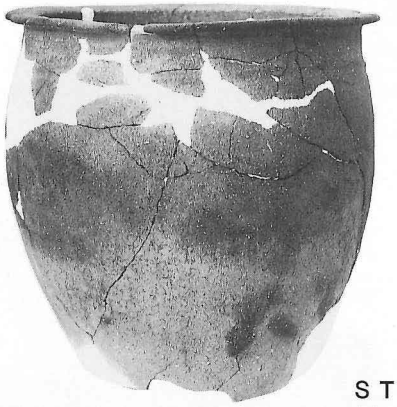
ＳＴ３



ＳＴ４

ＳＴ５（上）

出土甕棺①（Ｓ＝１／６）



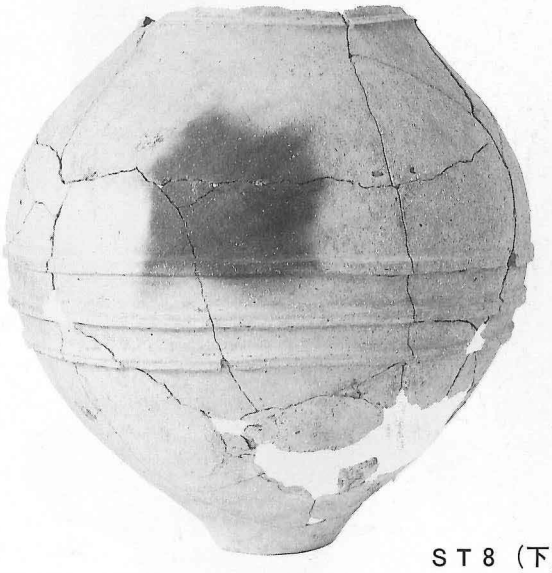
ＳＴ５（下）

ＳＴ６（上）　ＳＴ５（上）

ＳＴ６（下）

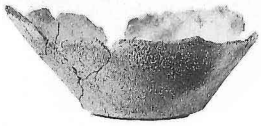
ＳＴ７

ＳＴ８（上）

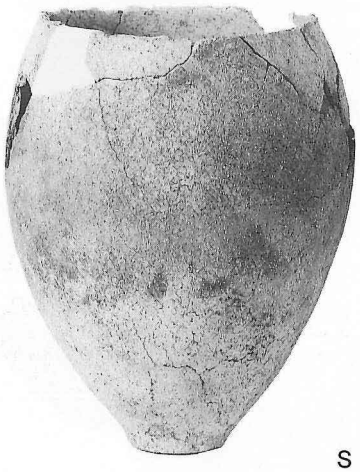


ＳＴ８（下）

ＳＴ９（下）



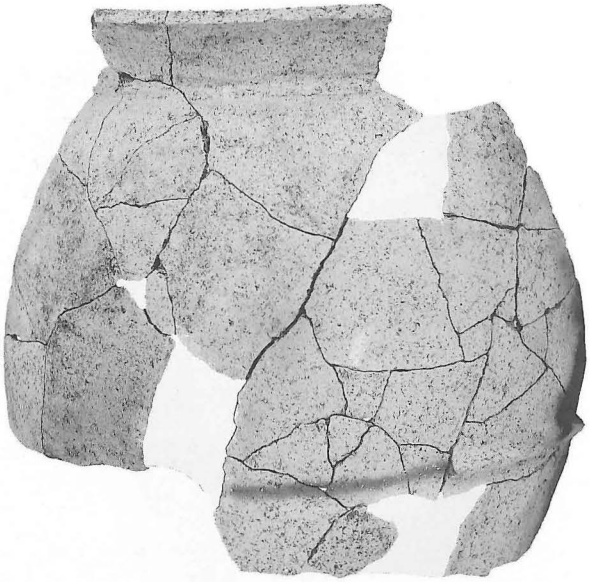
ＳＴ９（下）



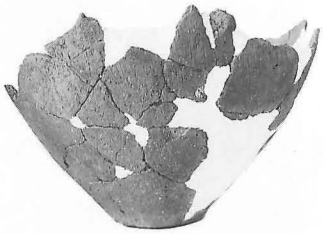
ＳＴ９（上）

出土甕棺②（Ｓ＝１／６）

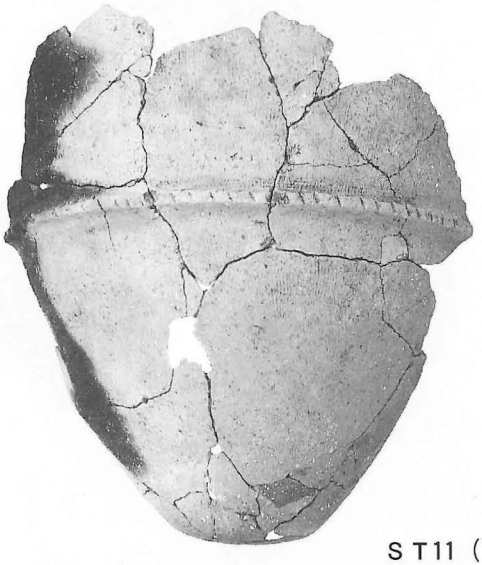
図版12



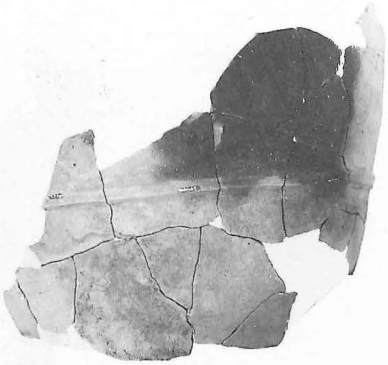
ＳＴ９（中）



ＳＴ10

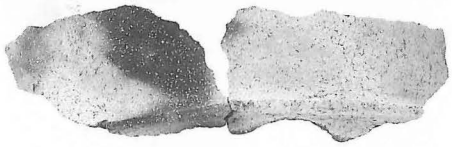


ＳＴ11（下）

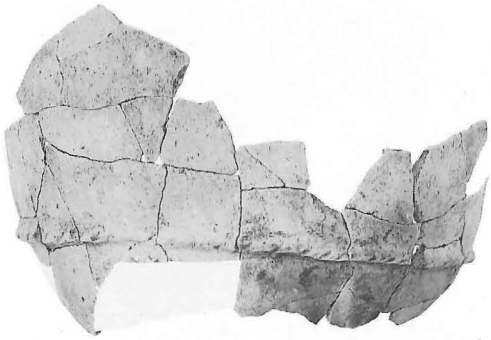


ＳＴ12（下）

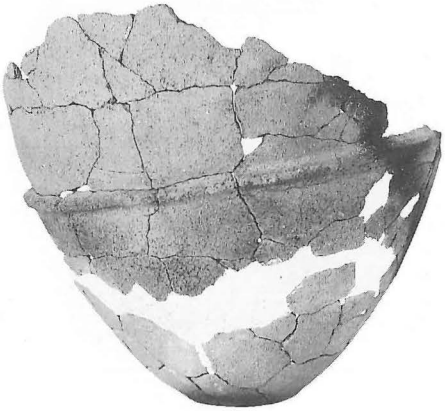
ＳＴ13（下）



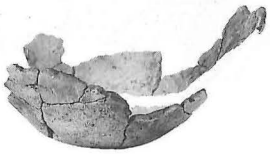
ＳＴ14（上）



ＳＴ13（下）

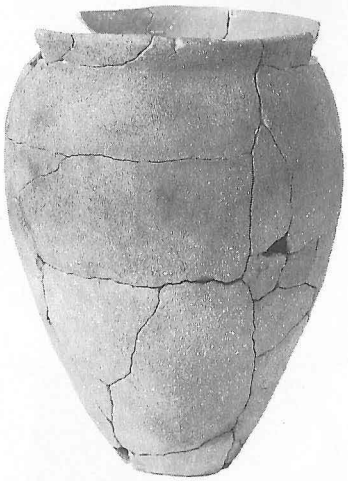


ＳＴ14（上）

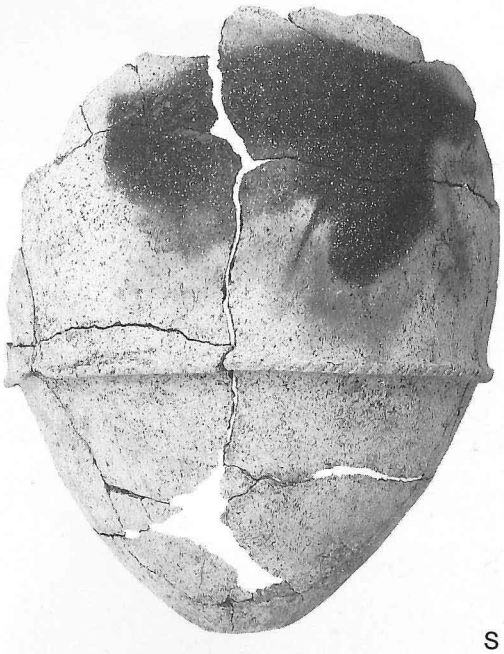


ＳＴ13（下）

出土甕棺③（Ｓ＝１／６）

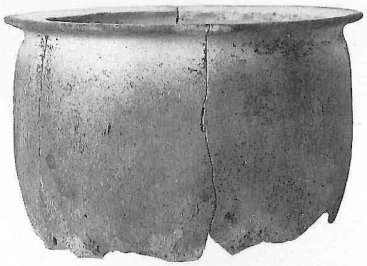


ＳＴ15（下）



ＳＴ16

ＳＴ17（下）

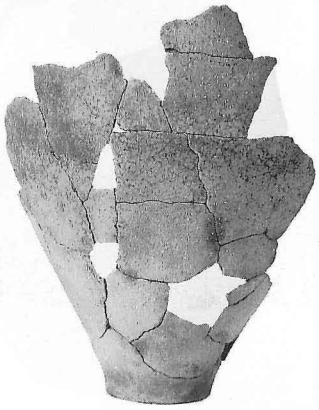


ＳＴ18

ＳＴ19（下）

ＳＴ18

ＳＴ19（下）



ＳＴ20

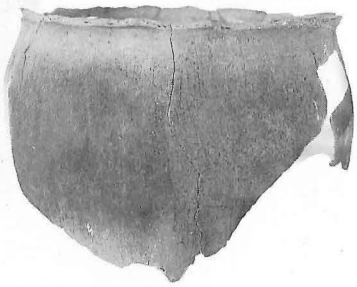
出土甕棺④（Ｓ＝１／６）

図版14

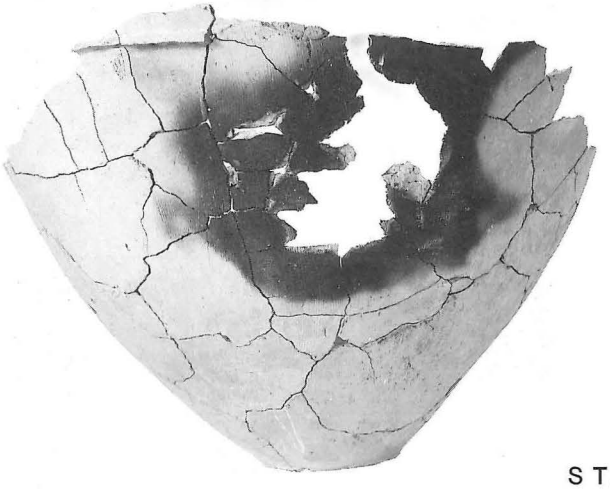
ＳＴ21

ＳＴ24

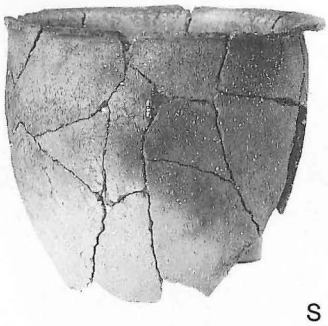
ＳＴ25（下）



ＳＴ25（上）



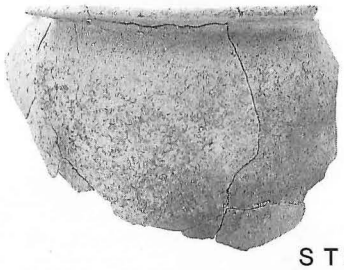
ＳＴ26



ＳＴ23（上）

ＳＴ23（中）

ＳＴ23（下）



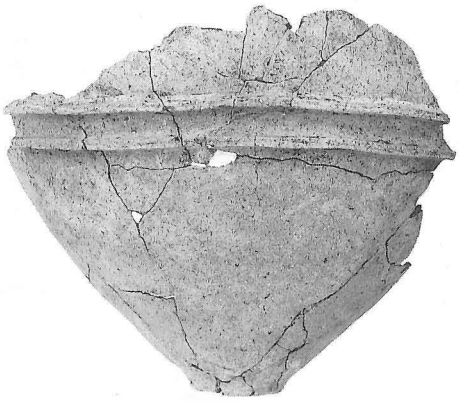
ＳＴ27（下）

ＳＴ27（上）

ＳＴ27

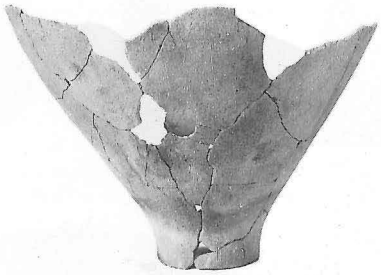
出土甕棺⑤（Ｓ＝１／６）

ＳＴ30

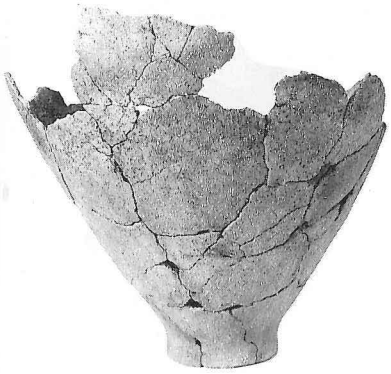


ＳＴ28

ＳＴ29

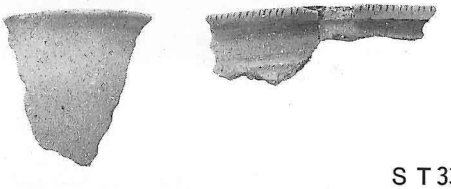


ＳＴ31（下）

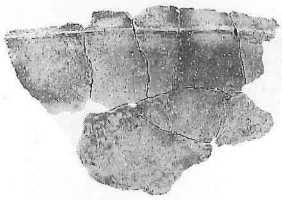


ＳＴ32（下）

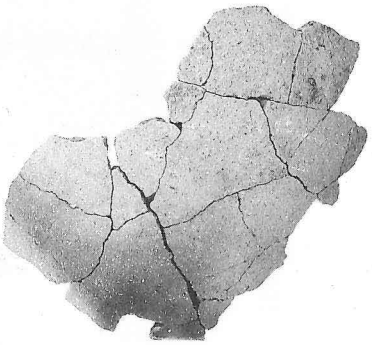
ＳＴ32（上）



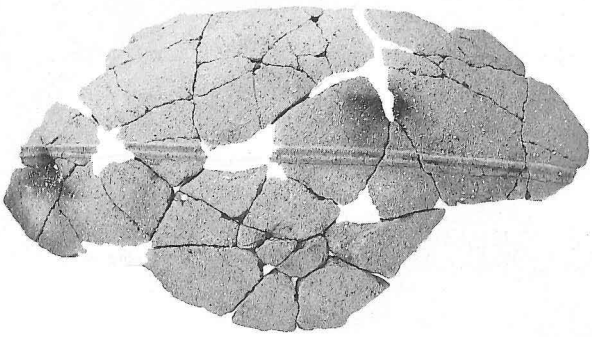
ＳＴ33（上）



ＳＴ32（上）

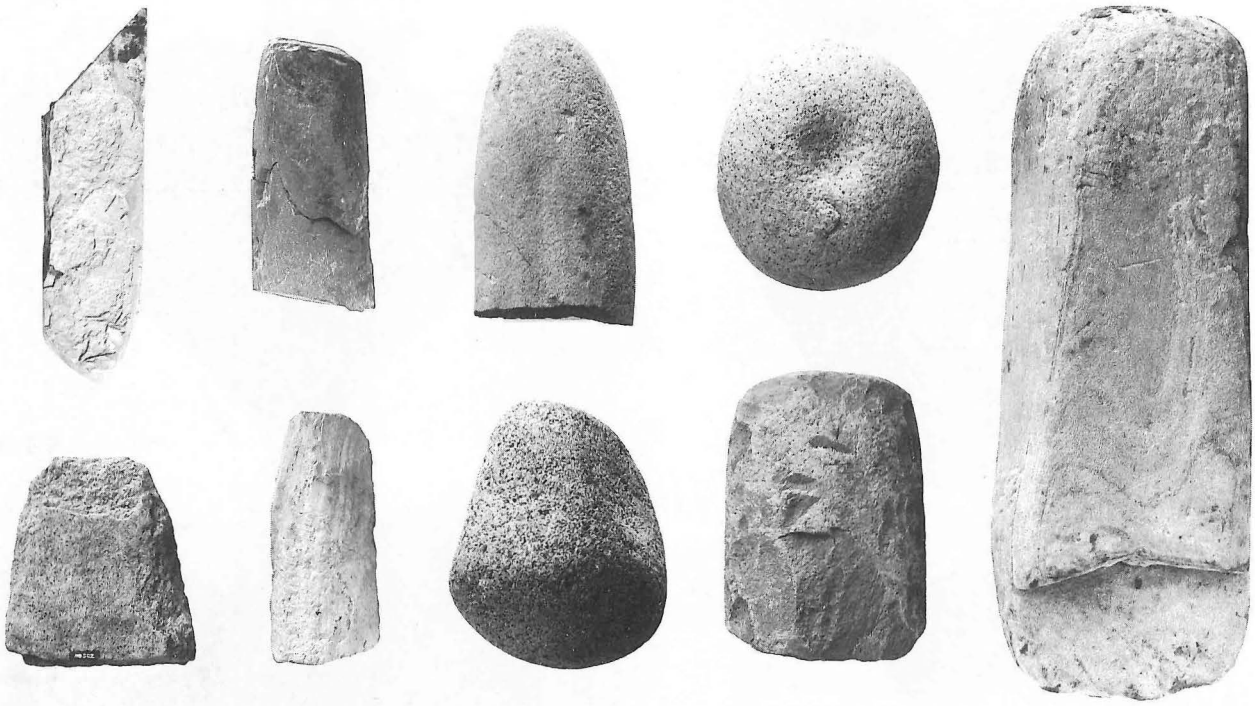


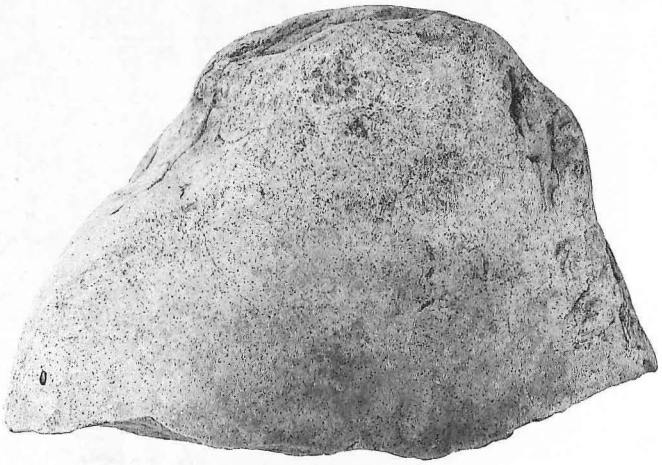
ＳＴ33（下）

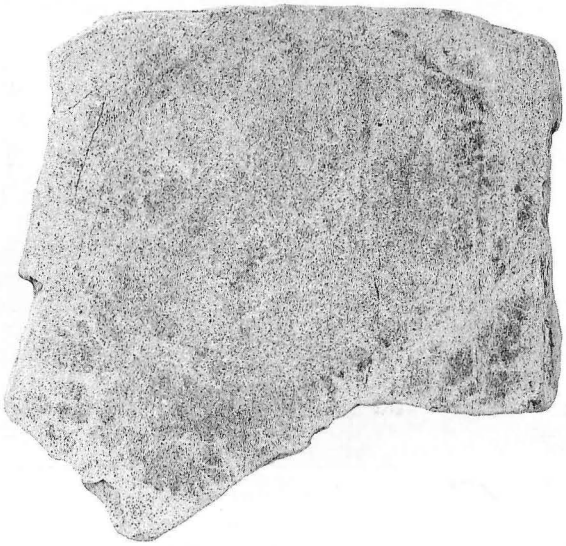


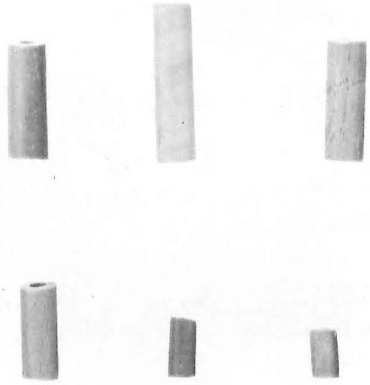
ＳＴ33（下）

出土甕棺⑥（Ｓ＝１／６）









2号住居跡・1号土壙出土石器（S＝1／3）

2号住居跡・出土石器 30号甕棺石蓋（S＝1／5）	その他の遺物（S＝1／1）

報告書抄録

ふりがな	ながはたばばいせき
書名	長畑馬場遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	大島村文化財調査報告書
シリーズ番号	第13集
編著者名	本田秀樹・大浦雅宏・荒木伸也・福田一志
編集機関	大島村教育委員会
所在地	〒859-5802　北松浦郡大島村前平1456番地１　TEL0950-55-2511
発行年月日	西暦2000年３月31日

初収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査機関	調査面積 m²	調査原因
長畑馬場遺跡（ながはたばば）	長崎県 北松浦郡（きたまつうらぐん） 大島村（おおしまむら）	42381	3 47-37	33° 28′ 13″	129° 31′ 13″	19970929 ｜ 19971017 19980928 ｜ 19981030 19990628 ｜ 19991001	5,600	中山間地域総合整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長畑馬場遺跡	包含地	旧石器 縄文 弥生 古墳 中世	甕棺墓 箱式石棺 石蓋土壙 住居跡 土壙 柱穴	弥生土器・石器 縄文土器・石器 ナイフ形石器・台形石器 土師器・須恵器 輸入陶磁器	弥生時代の祭祀土壙

大島村文化財調査報告書　第13集

長畑馬場遺跡

2000年３月31日

発行　大島村教育委員会
〒859-5802 長崎県北松浦郡大島村前平1456番地１
TEL 0950－55－2985

発行　㈱ 昭 和 堂 印 刷
〒854-0036 長崎県諫早市長野町1007－２
TEL 0957－22－6000